

# Oracle® Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0

---

CLI 手順ガイド



Part No. 820-7376-11  
2010 年 11 月、Revision A

Copyright © 2008, 2010, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS. Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD, Opteron, AMD ロゴ, AMD Opteron ロゴは, Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel, Intel Xeon は, Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。



# 目次

---

このマニュアルの使用法 xiii

## 1. CLI の概要 1

ILOM CLI – DMTF Server Management Command-Line Protocol ユーザーインタフェース 2

ILOM CLI 接続 3

ILOM CLI によって受け入れられるサーバー SP または CMM のネットワークアドレス 3

IPv6 アドレスの入力例 3

ILOM CLI ファームウェアと CLI プロンプト 4

ILOM CLI 管理ネームスペース 5

ILOM CLI のターゲットの種類 5

サーバー SP および CMM の CLI 管理ターゲット 6

サポートされる DMTF CLP コマンド 7

CLI コマンドのオプション 7

サーバー SP – CLI ターゲットツリー 8

CLI コマンド構文の入力とコマンドの実行 9

CLI コマンド構文の入力 9

コマンドの実行 9

▼ コマンドを個別に実行する 9

▼ 組み合わせたコマンドを実行する 10

代表的な CLI コマンド	10
ILOM 3.0 のプロパティと ILOM 2.x のプロパティの比較	15
2. ILOM へのログインと ILOM からのログアウト	17
初回ログインの前に	18
ILOM へのログイン	19
▼ ILOM CLI にログインする – ILOM のデフォルトのユーザーアカウント およびパスワードを使用	20
▼ ユーザーアカウントを設定する	21
▼ ILOM CLI にログインする – ILOM のユーザー名およびパスワードを 使用	21
▼ CLI セッションのタイムアウト値を設定する	22
バナーメッセージの設定	22
始める前に	22
▼ ILOM でバナーメッセージを設定する	23
ILOM からのログアウトと失ったパスワードの回復	24
▼ ILOM からログアウトする	24
▼ 失ったパスワードを回復する	25
始める前に	25
次の手順	25
3. ILOM の通信設定	27
ネットワークの設定	28
始める前に	29
▼ IPv4 のネットワーク設定を表示および構成する	30
ターゲット、プロパティ、および値	31
▼ ILOM の既存 IPv4 アドレスを編集する	32
▼ Pv4/IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成する	33
▼ IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストする	38
▼ ホスト名およびシステム識別子を割り当てる	39

- ▼ DNS の設定を表示および構成する 40
  - ターゲット、プロパティ、および値 40
- ▼ シリアルポート設定を表示および構成する 41
  - ターゲット、プロパティ、および値 42
- ▼ HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする 42
  - ターゲット、プロパティ、および値 43
- ▼ シリアルポート出力を切り替える 44
- Secure Shell の設定 45
  - 始める前に 45
    - ▼ セキュリティー保護されたリモート SSH 接続を確立する 45
    - ▼ SSH を有効または無効にする 46
    - ▼ 現在の鍵を表示する 46
    - ▼ 新しい SSH 鍵を生成する 47
    - ▼ SSH サーバーを再起動する 48
- ローカル相互接続インタフェースの設定 48
  - 始める前に 48
    - ▼ ローカル相互接続インタフェースの設定 50
- 4. ユーザーアカウントの管理 55
  - ユーザーアカウントの設定 57
    - 始める前に 57
      - ▼ シングルサインオンを設定する 57
      - ▼ ユーザーアカウントを追加する 58
      - ▼ ユーザーアカウントのパスワードを変更する 58
      - ▼ ユーザーアカウントに役割を割り当てる 59
      - ▼ ユーザーアカウントを削除する 59
      - ▼ 個別のユーザーアカウントを表示する 60
      - ▼ ユーザーアカウントのリストを表示する 60
      - ▼ ユーザーセッションのリストを表示する 61
      - ▼ 個別のユーザーセッションを表示する 61

## SSH ユーザー鍵の設定 62

始める前に 62

- ▼ SSH 鍵を追加する 63
- ▼ SSH 鍵を削除する 63

## Active Directory の設定 64

始める前に 64

- ▼ Active Directory の `strictcertmode` を有効にする 64
- ▼ Active Directory の `certstatus` をチェックする 65
- ▼ Active Directory 証明書を削除する 67
- ▼ Active Directory 設定を表示および構成する 67
- ▼ Active Directory の認証と承認のトラブルシューティング 75

## LDAP の設定 76

始める前に 76

- ▼ LDAP サーバーを設定する 76
- ▼ LDAP 用の ILOM の設定 77

## LDAP/SSL の設定 78

始める前に 78

- ▼ LDAP/SSL の `stritcertmode` を有効にする 78
- ▼ LDAP/SSL の `certstatus` をチェックする 79
- ▼ LDAP/SSL 証明書を削除する 80
- ▼ LDAP/SSL 設定を表示および構成する 80
- ▼ LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング 86

## RADIUS の設定 87

始める前に 87

- ▼ RADIUS を設定する 88

- 5. システムコンポーネントの管理 91
  - コンポーネント情報の表示およびシステムコンポーネントの管理 92
    - 始める前に 92
      - ▼ コンポーネント情報を表示する 92
      - ▼ コンポーネントを取り外す準備をする 93
      - ▼ コンポーネントをサービスに復帰させる 94
      - ▼ コンポーネントを有効または無効にする 94
  
- 6. システムコンポーネントの監視 95
  - システムセンサー、インジケータ、および ILOM イベントログの監視 96
    - ▼ センサー測定値を表示する 97
    - ▼ システムインジケータを設定する 98
    - ▼ クロック設定を構成する 99
    - ▼ イベントログ出力をフィルタリングする 100
    - ▼ ILOM イベントログを表示およびクリアする 100
    - ▼ リモートの syslog 受信 IP アドレスを設定する 103
      - ▼ CLI を使用して障害を表示およびクリアする 104
  - SP コンソールの履歴ログを表示する 105
    - 始める前に 105
      - ▼ ILOM CLI を使用して SP コンソールの履歴ログエントリを表示および管理する 106
  
- 7. ストレージコンポーネントおよび Zone Manager の監視 109
  - ストレージコンポーネントの表示および監視 110
    - 始める前に 110
      - ▼ HDD および RAID コントローラのプロパティの詳細を表示する 111
  - Zone Manager の有効化または無効化 114

- 8. システム警告の管理 115
  - 警告ルール設定の管理 116
    - 始める前に 116
      - ▼ 警告ルールの作成または編集 117
      - ▼ 警告ルールの無効化 118
      - ▼ テスト警告の生成 118
      - ▼ 特定の宛先へのテスト電子メール警告の送信 119
    - 警告ルール設定を管理するための CLI コマンド 119
    - 電子メール通知警告用の SMTP クライアントの設定 121
      - 始める前に 121
        - ▼ SMTP クライアントの有効化 122
    - SNMP MIB の ILOM からの直接ダウンロード 123
      - 始める前に 123
        - ▼ SNMP MIB のダウンロード 123
- 9. ハードウェアインタフェースの電力の監視および管理 125
  - 電力管理機能の更新の概要 126
  - システムの消費電力の監視 128
    - 始める前に 128
      - ▼ システムの合計消費電力を監視する 129
      - ▼ 実際の消費電力を監視する 130
      - ▼ 個々の電源の消費電力を監視する 130
      - ▼ 使用可能な電力を監視する 131
      - ▼ ハードウェア構成の最大消費電力を監視する 132
      - ▼ 許容消費電力を監視する 132
      - ▼ 消費電力履歴を監視する 132
    - サーバーの電力使用を管理する電力ポリシー設定の構成 136
      - 始める前に 136
        - ▼ サーバー SP の電力ポリシーを設定する 136



消費電力しきい値通知の構成	137
始める前に	137
▼ CLI を使用して通知しきい値を表示および構成する	137
コンポーネント割り当て配電の監視	138
始める前に	138
▼ すべてのサーバーコンポーネントのサーバー電力割り当てを表示する	139
▼ サーバーコンポーネントの電力割り当てを表示する	139
▼ すべてのシャーシコンポーネントに対する CMM 電力割り当てを表示する	140
▼ CMM コンポーネント電力割り当てを表示する	141
▼ ILOM 3.0.10 でブレードスロットの許容電力または予約電力を表示する	142
▼ ILOM 3.0.10 でブレードの許容電力または許可制限を表示する	143
電力制限プロパティの構成	143
始める前に	144
▼ ブレードスロットの許容電力を構成する	144
▼ サーバーの電力割当量プロパティを構成する	145
▼ ILOM 3.0.10 でブレードの許可制限を構成する	147
CMM 電源冗長性プロパティの監視または設定	147
始める前に	147
▼ CMM 電源冗長性プロパティを監視または設定する	148
10. ILOM 設定のバックアップおよび復元	149
ILOM 設定のバックアップ	150
始める前に	150
▼ ILOM 設定のバックアップ	150
ILOM 設定の復元	151
始める前に	151
▼ ILOM 設定の復元	152
バックアップ XML ファイルを編集する	153

- 始める前に 153
  - ▼ バックアップ XML ファイルの編集 153
- ILOM 設定のリセット 156
  - 始める前に 156
    - ▼ ILOM 設定をデフォルトにリセットする 156
- 11. ILOM ファームウェアの更新 157
  - ILOM ファームウェアの更新 158
    - 始める前に 159
      - ▼ ILOM ファームウェアのバージョンを識別する 159
      - ▼ 新しい ILOM ファームウェアイメージをダウンロードする 160
      - ▼ ファームウェアイメージを更新する 160
      - ▼ ファームウェア更新時のネットワーク障害から回復する 162
    - ILOM SP または CMM のリセット 162
      - 始める前に 163
        - ▼ ILOM SP または CMM をリセットする 163
- 12. リモートホストのストレージリダイレクトの管理と ILOM リモートコンソールのセキュリティ保護 165
  - ストレージリダイレクトの初期セットアップタスクの実行 166
    - 始める前に 166
      - ▼ Mozilla Firefox Web ブラウザを使用して Storage Redirection サービスを起動する 167
      - ▼ Internet Explorer (IE) Web ブラウザを使用して Storage Redirection サービスを起動する 170
      - ▼ Storage Redirection クライアントをダウンロードしてインストールする 172
    - ストレージデバイスをリダイレクトするために Storage Redirection CLI を起動する 174
      - 始める前に 175
        - ▼ コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する 176

- ▼ Storage Redirection サービスが動作していることを確認する 177
  - ▼ Storage Redirection CLI のヘルプ情報を表示する 178
  - ▼ ストレージデバイスのリダイレクトを開始する 178
  - ▼ アクティブなストレージリダイレクトを表示する 179
  - ▼ ストレージデバイスのリダイレクトを停止する 180
  - ▼ Storage Redirection のデフォルトネットワークポート 2121 を変更する 181
- ILOM リモートコンソールのセキュリティ保護 182
- 始める前に 183
    - ▼ ILOM リモートコンソールのロックオプションを編集する 183
    - 有効なカスタムロックモードの例 185
13. リモートホストの電源状態、BIOS 起動デバイス、およびホストサーバーコンソールの管理 187
- ホストサーバーまたは CMM へのリモート電源状態コマンドの実行 188
    - サーバー SP または CMM CLI からリモート電源状態コマンドを実行する 188
  - x86 ホスト上の BIOS 起動デバイスの管理 190
    - 始める前に 191
      - ▼ BIOS ホスト起動デバイスのオーバーライドを設定する 191
  - ホストコンソールの管理 192
    - 始める前に 193
      - ▼ ホストコンソールプロパティを表示および設定する 193
      - ▼ ホストコンソールを起動し、コンソール履歴とブートログを表示する 195
14. SPARC サーバーでの TPM と LDom の状態の管理 197
- SPARC サーバーでの TPM の状態の制御 198
    - 始める前に 198
      - ▼ SPARC サーバー上の TPM の状態を制御する 198
  - SPARC サーバーでの LDom 設定の管理 201
    - 始める前に 201

- ▼ SPARC T3 シリーズのサーバーに格納されている LDom 設定のターゲットおよびプロパティを表示する 202
  - ▼ 格納されている LDom 設定に対してホストの電源を指定する 203
  - ▼ 制御ドメインのプロパティ値を有効または無効にする 203
15. リモートホストシステムの診断の実行 205
- x86 システムのハードウェア問題の診断 206
    - 始める前に 206
      - ▼ PC-Check 診断の設定と実行 206
      - ▼ マスク不可能割り込みを生成する 208
  - SPARC システムのハードウェア問題の診断 209
    - 始める前に 209
      - ▼ 診断モードを設定する 209
      - ▼ 診断トリガーを指定する 210
      - ▼ 診断のレベルを指定する 210
      - ▼ 診断出力の詳細度を指定する 211
  - システムの問題を診断するための SP データの収集 212
    - 始める前に 212
      - ▼ システムの問題を診断するために SP データを収集する 213
- A. CLI コマンドリファレンス 215
- B. Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法 241
- C. IPv4 または IPv6 の ILOM 接続に関する問題の診断 245
- D. ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動設定ガイドライン 247
- 索引 251

# このマニュアルの使用法

---

このコマンド行インタフェース (CLI) 手順ガイドでは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 をサポートする Oracle の Sun ラック搭載型サーバーまたはサーバーモジュールに共通する Oracle ILOM 3.0 の CLI 機能について説明します。

このガイドは、技術者、システム管理者、承認サービスプロバイダ、およびシステムハードウェアの管理経験があるユーザーを対象としています。

このガイドに記載されている情報を完全に理解するには、この CLI 手順ガイドとともに、ILOM 3.0 マニュアルセット内の他のガイドを使用してください。ILOM 3.0 マニュアルセットを構成するガイドについては、[xiii ページの「関連ドキュメント」](#)を参照してください。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- [xiii ページの「関連ドキュメント」](#)
- [xv ページの「マニュアル、サポート、およびトレーニング」](#)
- [xv ページの「ILOM 3.0 のバージョン番号」](#)
- [xvi ページの「ドキュメントのコメント」](#)

---

## 関連ドキュメント

このガイドに記載されている情報を完全に理解するには、このガイドとともに、次の表に示すマニュアルを使用してください。これらのマニュアルは、次の Web サイトからオンラインで入手できます。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

---

注 – ILOM 3.0 マニュアルセットを構成するマニュアルは、かつて Sun Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 ガイドと呼ばれていたものです。

---

タイトル	コンテンツ	パーツ番号	形式
『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』	ILOM の特長と機能に関する説明	820-7370	PDF HTML
『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』	ネットワーク接続、初回の ILOM へのログイン、およびユーザーアカウントやディレクトリサービスの設定の説明と手順	820-7382	PDF HTML
『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』	ILOM Web インタフェースを使用して ILOM 機能にアクセスするための説明と手順	820-7373	PDF HTML
『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド』	ILOM CLI を使用して ILOM 機能にアクセスするための説明と手順	820-7376	PDF HTML
『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコルリファレンスガイド』	SNMP または IPMI 管理ホストを使用して ILOM 機能にアクセスするための説明と手順	820-7379	PDF HTML
『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) CMM 管理ガイド - Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』	ILOM で CMM 機能を管理するための情報と手順	821-3083	PDF HTML
『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 機能更新およびリリースノート』	新しい ILOM 3.0 機能と、既知の問題および回避方法についての最新情報	821-0647	PDF HTML

ILOM 3.0 マニュアルセットに加えて、関連する ILOM の補足マニュアルまたはプラットフォームの管理マニュアルに、使用しているサーバープラットフォームに固有の ILOM 機能およびタスクが記載されています。ILOM 3.0 のマニュアルセットとともに、使用しているサーバープラットフォームに付属している ILOM の補足マニュアルまたはプラットフォームの管理マニュアルを使用してください。

ILOM マニュアルセット内の一部のガイドの翻訳版がマニュアルの Web サイトで利用できます。ILOM マニュアルセット内のガイドの英語版のほうが更新頻度は多く、翻訳されたマニュアルよりも新しい情報を掲載している可能性があります。

---

# マニュアル、サポート、およびトレーニング

- マニュアル: <http://docs.sun.com/>
- サポート: <http://www.sun.com/support/>
- トレーニング: <http://www.sun.com/training/>

---

## ILOM 3.0 のバージョン番号

ILOM 3.0 では、システムで動作している ILOM のバージョンを識別しやすいように、新しいバージョン番号方式を採用しています。この番号方式では、5つのフィールドがある文字列を使用しています。たとえば、a.b.c.d.e となります。

- a – ILOM のメジャーバージョンを示します。
- b – ILOM のマイナーバージョンを示します。
- c – ILOM の更新バージョンを示します。
- d – ILOM のマイクロバージョンを示します。マイクロバージョンは、プラットフォームまたはプラットフォームのグループ単位で管理されます。詳細は、使用しているプラットフォームの製品ノートを参照してください。
- e – ILOM のナノバージョンを示します。ナノバージョンは、マイクロバージョンの増分反復です。

たとえば、ILOM 3.1.2.1.a の意味は、次のとおりです。

- ILOM 3 は、ILOM のメジャーバージョンです。
- ILOM 3.1 は、ILOM3 のマイナーバージョンです。
- ILOM 3.1.2 は、ILOM 3.1 の 2 番目の更新バージョンです。
- ILOM 3.1.2.1 は、ILOM 3.1.2 のマイクロバージョンです。
- ILOM 3.1.2.1.a は、ILOM 3.1.2.1 のナノバージョンです。

---

## ドキュメントのコメント

このドキュメントに関するコメントは、次のサイトで「Feedback [+]」リンクをクリックしてお送りください。

<http://docs.sun.com>

ご意見をお寄せいただく際には、下記のタイトルとパーツ番号を記載してください。

『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド』、part number 820-7376-11。



# 第1章

## CLI の概要

---

項目	
説明	リンク
ILOM CLI でサポートされる業界標準モデル	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">2 ページの「ILOM CLI – DMTF Server Management Command-Line Protocol ユーザーインタフェース」</a></li></ul>
ILOM CLI の接続要件、インストール済みファームウェア、および CLI プロンプト	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">3 ページの「ILOM CLI 接続」</a></li><li>• <a href="#">3 ページの「ILOM CLI によって受け入れられるサーバー SP または CMM のネットワークアドレス」</a></li><li>• <a href="#">4 ページの「ILOM CLI ファームウェアと CLI プロンプト」</a></li></ul>
ILOM CLI の管理ネームスペースについて理解する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">5 ページの「ILOM CLI 管理ネームスペース」</a></li><li>• <a href="#">5 ページの「ILOM CLI のターゲットの種類」</a></li><li>• <a href="#">6 ページの「サーバー SP および CMM の CLI 管理ターゲット」</a></li><li>• <a href="#">7 ページの「サポートされる DMTF CLP コマンド」</a></li><li>• <a href="#">7 ページの「CLI コマンドのオプション」</a></li><li>• <a href="#">8 ページの「サーバー SP – CLI ターゲットツリー」</a></li></ul>
CLI コマンドを実行するための構文要件と例	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">9 ページの「CLI コマンド構文の入力とコマンドの実行」</a></li></ul>
代表的な CLI コマンドのクイックリファレンス	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">10 ページの「代表的な CLI コマンド」</a></li></ul>
以前の ILOM 2.0 のプロパティと新しい ILOM 3.0 のプロパティを比較する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">15 ページの「ILOM 3.0 のプロパティと ILOM 2.x のプロパティの比較」</a></li></ul>

## 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• ILOM の概要	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
• Web インタフェース	• Web インタフェースの概要	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)
• SNMP および IPMI のホスト	• SNMP の概要 • IPMI の概要	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコルリファレンスガイド』(820-7379)
• 機能更新	• 新規または更新された機能	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 機能更新およびリリースノート』(821-0647)

ILOM 3.0 のドキュメントコレクションは、次の Web サイトで入手できます。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

この章では、ILOM コマンド行インタフェース (command-line interface、CLI) を使用して手順を実行する前に知っておく必要のある基本的な情報を提供します。

# ILOM CLI – DMTF Server Management Command-Line Protocol ユーザーインタフェース

ILOM CLI は、Distributed Management Task Force の仕様である *Server Management Command-Line Protocol Specification, version 11.0a.8 Draft* (DMTF CLP) に基づいています。この仕様全体は、次のサイトで参照できます。

<http://www.dmtf.org/>

DMTF CLP には、サーバーの状態、アクセス方法、またはインストールされているオペレーティングシステムにかかわらず、1 つ以上のサーバーを対象にした管理用ユーザーインタフェースがあります。

DMTF CLP アーキテクチャーでは、階層的なネームスペースをモデル化しており、システム管理下にあるすべてのオブジェクトを含むツリーがあらかじめ定義されています。このモデルでは、少数のコマンドを使用してターゲットの大きなネームスペースを操作します。ターゲットは、オプションやプロパティで変更できます。このネームスペースでは、各コマンド動詞のターゲットが定義されています。

ILOM CLI ネームスペースでのオブジェクトの管理の詳細については、[5 ページの「ILOM CLI 管理ネームスペース」](#)を参照してください。

# ILOM CLI 接続

コマンド行インタフェースを使用し、ネットワーク接続を通じて、あるいはシャーシ監視モジュール (CMM) またはサーバーサービスプロセッサ (SP) 上のシリアルポートへの直接端末接続を通じて、CMM またはサーバー SP 上の ILOM にアクセスできます。また、一部の Oracle Sun サーバーでは、ILOM のローカル相互接続インタフェース機能を使用して、サーバーへの物理ネットワークまたはローカル接続を使用することなく、ホストオペレーティングシステムからサーバーを直接管理できます。

---

注 – ILOM のローカル相互接続インタフェース機能の使用の詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』を参照してください。サーバーにローカルシリアルデバイスを接続する方法、あるいはサーバーまたは CMM の NET MGT ポートにネットワークケーブルを接続する方法については、使用しているサーバーまたは CMM に付属のインストールガイドを参照してください。

---

この節で説明するトピックは次のとおりです。

- 3 ページの「ILOM CLI によって受け入れられるサーバー SP または CMM のネットワークアドレス」
- 4 ページの「ILOM CLI ファームウェアと CLI プロンプト」

## ILOM CLI によって受け入れられるサーバー SP または CMM のネットワークアドレス

ILOM 3.0.12 以降では、次のネットワークアドレスが ILOM サーバープロセッサ (SP) の CLI によって受け入れられます。

- IPv4 アドレス (10.8.183.106 など)
- IPv6 アドレス (fec0:a:8:b7:214:4fff:5eca:5f7e/64 など)
- リンクローカル IPv6 アドレス (fe80::214:4fff:feca:5f7e/64 など)
- DNS ホストドメインアドレス (company.com など)

## IPv6 アドレスの入力例

Web ブラウザの使用時に URL 内で IPv6 アドレスを使用するときや、ファイルを転送するとき、IPv6 アドレスを角かっこで囲む必要があります。例:

- Web ブラウザで URL を入力するときは、次のように入力します。

`https:// [ipv6address]`

- CLI の `load -source tftp` コマンドと `tftp` を使用してファイルを転送するときは、次のように入力します。

```
load -source tftp:// [ipv6address]filename.extension
```

ただし、SSH 接続を使用して ILOM にログインするために IPv6 アドレスを指定するときは、IPv6 アドレスを角かっこで囲まないようにします。例:

- SSH とデフォルトの ILOM root ユーザーアカウントを使用して ILOM CLI セッションを確立するときは、次のように入力します。

```
ssh root@ipv6address
```

IPv6 アドレスの入力の詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』を参照してください。IPv4 と IPv6 の接続に関する問題の診断のヘルプについては、[245 ページの「IPv4 または IPv6 の ILOM 接続に関する問題の診断」](#)を参照してください。

## ILOM CLI ファームウェアと CLI プロンプト

サーバー SP または CMM で CLI セッションへの接続を確立すると、システムにインストールされている ILOM ファームウェアのバージョンが識別され、著作権情報と CLI プロンプトが表示されます。

例:

```
Oracle(R) Integrated Lights Out Manager

Version 3.0.0.0 r54408

Copyright (c) 2010, Oracle and/or its affiliates. All rights
reserved.

->
```

---

**注** – ILOM 3.0.10 の時点で、CMM の CLI プロンプトを変更して、CMM の CLI プロンプトとサーバーモジュール (ブレード) の CLI プロンプトを区別することができます。新しい CLI プロンプトプロパティと、CLI プロンプトを CMM またはブレードに固有のものにする方法については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) CMM 管理ガイド – Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』を参照してください。

---

# ILOM CLI 管理ネームスペース

ILOM CLI 管理ネームスペースには、システム内のすべての管理対象オブジェクトを含む階層的な定義済みツリーが含まれます。ILOM CLI 内では、少数のコマンドが、オプションおよびプロパティによって修正されたターゲットの大規模なネームスペースに対して機能します。

この節で説明するトピックは次のとおりです。

- 5 ページの「ILOM CLI のターゲットの種類」
- 6 ページの「サーバー SP および CMM の CLI 管理ターゲット」
- 7 ページの「サポートされる DMTF CLP コマンド」
- 7 ページの「CLI コマンドのオプション」
- 8 ページの「サーバー SP - CLI ターゲットツリー」

## ILOM CLI のターゲットの種類

表 1-1 に、使用している Oracle Sun サーバープラットフォームに応じてアクセスできる ILOM CLI のターゲットの種類を示します。

表 1-1 ILOM のターゲットの種類

ターゲットの種類	説明
* /SP	このターゲットの種類の下にあるターゲットおよびプロパティは、ILOM サービスプロセッサ (SP) の設定や、ログおよびコンソールの表示に使用されます。
* /CMM	ブレードプラットフォームでは、このターゲットの種類が /SP の代わりになり、ILOM シャーシ監視モジュール (CMM) の設定に使用されます。
* /SYS	このターゲットの種類の下にあるターゲットおよびプロパティは、インベントリ、環境、およびハードウェアの管理を提供します。ターゲットは、すべてのハードウェアコンポーネントの命名法に直接対応しており、その一部は物理的なハードウェアに印字されています。
* /CH	ブレードプラットフォームでは、このターゲットの種類が /SYS の代わりになり、シャーシレベルのインベントリ、環境、およびハードウェアの管理を提供します。ターゲットの種類は、すべてのハードウェアコンポーネントの命名法に直接対応しており、その一部は物理的なハードウェアに印字されています。
* /HOST	このターゲットの種類の下にあるターゲットおよびプロパティは、ホストオペレーティングシステムの監視および管理に使用されます。

---

注 – 階層内のターゲットの種類にアクセスする方法は、使用している Sun サーバープラットフォームによって異なります。

---

## サーバー SP および CMM の CLI 管理ターゲット

ILOM CLI のサーバー SP からは、/SP ネームスペースと、/SYS や /HOST などのシステムネームスペースにアクセスできます。/SP ネームスペースでは、サービスプロセッサの管理および設定を行うことができます。/SYS ネームスペースまたは /HOST ネームスペースでは、管理対象システムハードウェアに関するその他の情報にアクセスできます。

ILOM CLI の CMM からは、/CMM ネームスペースと、/CH/BL*n*、/CH/BL*n*/Node*n*、/CH/NEM などのシャーシコンポーネントネームスペースにアクセスできます。/CMM ネームスペースでは、CMM の管理および設定を行うことができます。/CH ネームスペースでは、単一の SP サーバーモジュール (ブレード)、複数の SP サーバーモジュール、NEM などの管理対象シャーシコンポーネントのプロパティにアクセスし、それらを設定できます。

表 1-2 に、ILOM でナビゲートできる ILOM CLI のサーバーおよび CMM の管理ターゲットを示します。

表 1-2 CMM およびサーバー SP の CLI 管理ターゲット

ILOM 管理コンポーネント	CLI 管理ターゲットについての説明
サーバー SP	<ul style="list-style-type: none"><li>• /SP を使用して、サーバーモジュール SP を設定し、ログおよびコンソールを表示します。</li><li>• /SYS を使用して、サーバーモジュールレベルのインベントリ、環境、およびハードウェアの管理を提供します。</li></ul>
CMM、シャーシ、およびサーバーモジュール SP (ブレード)	<ul style="list-style-type: none"><li>• /CMM を使用して、CMM 上の ILOM を管理します。</li><li>• /CH を使用して、シャーシレベルのインベントリ、環境、およびハードウェアの管理を提供します。/CH アドレス空間は、Sun Blade モジュラーシステムで /SYS の代わりになります。</li><li>• /CH/BL<i>n</i> を使用して、CMM CLI セッションからサーバーモジュール SP のプロパティおよびオプションにアクセスし、それらを設定します。</li><li>• /CH/BL<i>n</i>/Node<i>n</i> を使用して、複数の SP をサポートするサーバーモジュール上の特定の SP のプロパティおよびオプションにアクセスし、それらを設定します。</li></ul>
Host	<ul style="list-style-type: none"><li>• /HOST を使用して、ホストサーバーのオペレーティングシステムの対話を監視および管理します。</li></ul>

# サポートされる DMTF CLP コマンド

ILOM CLI は、次の表に示す DMTF CLP コマンドをサポートしています。

---

注 – CLI コマンドの大文字と小文字は区別されます。

---

表 1-3 CLI コマンド

コマンド	説明
cd	オブジェクトのネームスペースを操作します。
create	ネームスペースにオブジェクトを作成します。
delete	ネームスペースからオブジェクトを削除します。
exit	CLI のセッションを終了します。
help	コマンドとターゲットに関するヘルプ情報を表示します。
load	指定されたソースから指定されたターゲットにファイルを転送します。
dump	ターゲットから URI で指定したリモート位置にファイルを転送します。
reset	ターゲットの状態をリセットします。
set	ターゲットのプロパティを指定した値に設定します。
show	ターゲットとプロパティについての情報を表示します。
start	ターゲットを起動します。
stop	ターゲットを停止します。
version	実行中のサービスプロセッサのバージョンを表示します。

## CLI コマンドのオプション

ILOM CLI は、次のオプションをサポートしていますが、コマンドによってはサポートしていないオプションがあります。help オプションは、どのコマンドでも使用できます。

表 1-4 CLI オプション

長文形式オプション	省略形式	説明
-default		コマンドのデフォルト機能のみを実行します。
-destination		データの宛先を指定します。
-display	-d	ユーザーが表示したいデータを表示します。
-force	-f	操作をただちに実行するように指定します。

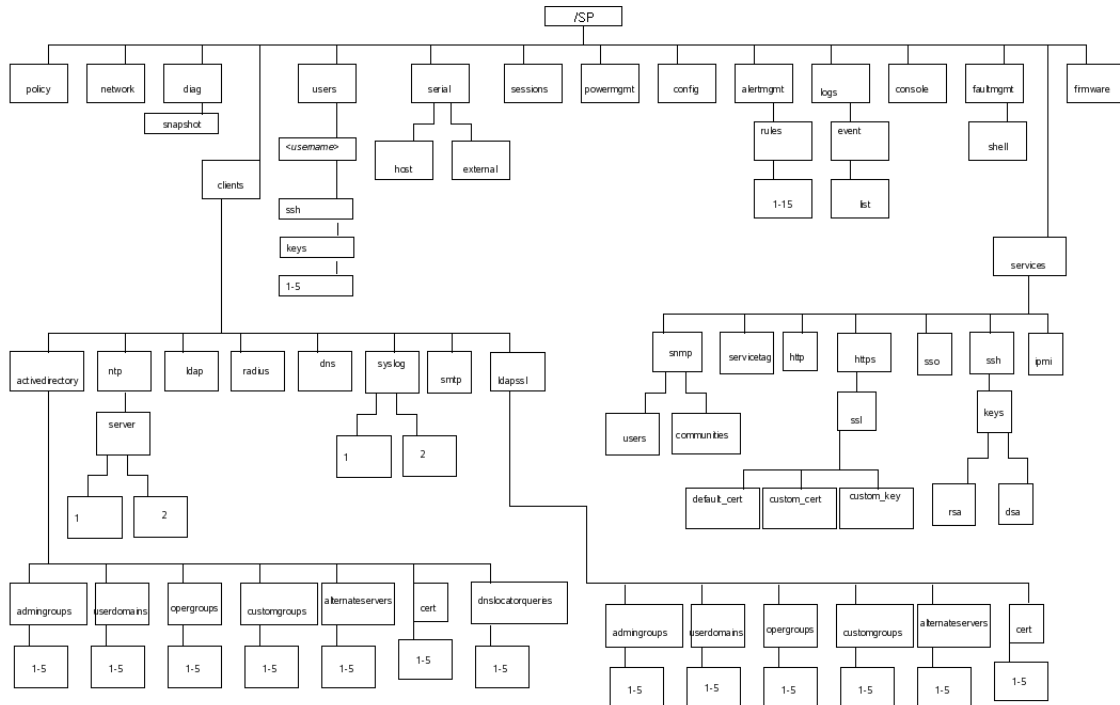
表 1-4 CLI オプション (続き)

長文形式オプション	省略形式	説明
-help	-h	ヘルプ情報を表示します。
-level	-l	現在のターゲットと、特定レベルのすべてのターゲットのコマンドを実行します。
-output	-o	コマンド出力の内容と形式を指定します。ILOM では、表形式でターゲットおよびプロパティを表示する <code>-o table</code> のみをサポートしています。
-script		コマンドに関連する通常の警告またはプロンプトをスキップします。
-source		ソースイメージの場所を表示します。

## サーバー SP – CLI ターゲットツリー

CLI ネームスペース内のすべてのオブジェクトはターゲットと見なされます。

図 1-1 ILOM CLI ターゲットツリーの /SP の例





---

# CLI コマンド構文の入力とコマンドの実行

ILOM でターゲットの場所を指定し、CLI コマンドを適切に実行するには、コマンドの入力時と実行時に、必要なコマンド行構文を適用する必要があります。詳細については、次のトピックを参照してください。

- 9 ページの「CLI コマンド構文の入力」
- 9 ページの「コマンドの実行」

## CLI コマンド構文の入力

ILOM CLI を使用するときは、次のコマンド構文で情報を入力します。

**command** [*options*] [*target*] [*properties*]

例:

```
-> set /SP/services/https port=portnumber servicestate=enabled|disabled
```

---

注 – この章の構文例では、/SP/ で始まるターゲットを使用しますが、使用しているサーバープラットフォームによっては、/CMM/ で始まるターゲットに置き換わる場合があります。サブターゲットは、すべてのサーバープラットフォームで共通です。

---

## コマンドの実行

ほとんどのコマンドでは、実行するにはターゲットの場所を指定してからコマンドを入力します。これらの操作は、個別に実行することも、同じコマンド行で組み合わせることもできます。

### ▼ コマンドを個別に実行する

1. cd コマンドを使用して、ネームスペースに移動します。

例:

```
cd /SP/services/http
```

2. コマンド、ターゲット、および値を入力します。

例:

```
-> set port=80
```

または

```
-> set prop1=x
```

```
-> set prop2=y
```

## ▼ 組み合わせたコマンドを実行する

- `<command><target>=value` という構文を使用して、単一のコマンド行でコマンドを入力します。

例:

```
-> set /SP/services/http port=80
```

または

```
-> set /SP/services/http prop1=x prop2=y
```

---

## 代表的な CLI コマンド

---

注 – ILOM CLI コマンドの詳細については、[215 ページの「CLI コマンドリファレンス」](#)を参照してください。

---

表 1-5 一般的なコマンド

説明	コマンド
コマンドとターゲットについての情報を表示します	<code>help</code>
特定のコマンドについての情報を表示します	<code>help &lt;string&gt;</code>
すべての有効なターゲットを表示します	<code>help targets</code>
現在のターゲットを変更して表示します	<code>cd</code>
ターゲットから URI で指定したリモート位置にファイルを転送します	<code>dump</code>
CLI からログアウトします	<code>exit</code>
ILOM で実行中の ILOM のファームウェアバージョンを表示します	<code>version</code>
ターゲットをリセットします	<code>reset</code>
クロック情報を表示します	<code>show /SP/clock</code>
アクティブな ILOM セッションを表示します	<code>show /SP/sessions</code>
ILOM と BIOS ファームウェアを更新します	<code>load -source ftp://newSPimage</code>
ILOM のイベントログのリストを表示します	<code>show /SP/logs/event/list</code>

表 1-6 ユーザーコマンド

説明	コマンド
ローカルユーザーを追加します	<code>create /SP/users/user1 password=password role=a u c r o s</code>
ローカルユーザーを削除します	<code>delete /SP/users/user1</code>
ローカルユーザーのプロパティを変更します	<code>set /SP/users/user1 role=operator</code>
すべてのローカルユーザーについての情報を表示します	<code>show -display [targets properties all] -level all /SP/users</code>
LDAP 設定についての情報を表示します	<code>show /SP/clients/ldap</code>
LDAP 設定を変更します	<code>set /SP/clients/ldap binddn=proxyuser bindpw=proxyuserpassword defaultrole=a u c r o s address=ipaddress</code>

表 1-7 ネットワークとシリアルポートの設定コマンド

説明	コマンド
ネットワーク設定情報を表示します	<code>show /SP/network</code>
ILOM のネットワークプロパティを変更します。IP アドレスなどの特定のネットワークプロパティを変更すると、アクティブセッションが切断されます	<code>set /SP/network pendingipaddress=ipaddress pendingipdiscovery=dhcp static pendingipgateway=ipgateway pendingipnetmask=ipnetmask commitpending=true</code>
外部シリアルポートについての情報を表示します	<code>show /SP/serial/external</code>
外部シリアルポート設定を変更します	<code>set /SP/serial/external pendingspeed=integer commitpending=true</code>
ホストへのシリアル接続についての情報を表示します	<code>show /SP/serial/host</code>
ホストのシリアルポート設定を変更します。	<code>set /SP/serial/host pendingspeed=integer commitpending=true</code>
注: この速度設定は、ホストのオペレーティングシステムのシリアルポート 0、COM1、または /dev/ttyS0 の速度設定と一致させてください	

表 1-8 警告管理コマンド

説明	コマンド
警告についての情報を表示 します。最大 15 件の警告を 構成できます	<code>show /SP/alertmgmt/rules/1...15</code>
IPMI PET 警告を構成します	<code>set /SP/alertmgmt/rules/1...15 type=ipmipet destination=<i>ipaddress</i> level= down critical major minor</code>
v3 SNMP トラップ警告を構 成します	<code>set /SP/alertmgmt/rules/1...15 type=snmptrap snmp_version=3 community_or_username=<i>username</i> destination=<i>ipaddress</i> level= down critical major minor</code>
メール警告を構成します	<code>set /SP/alertmgmt/rules/1...15 type=email destination=<i>email_address</i> level= down critical major minor</code>

表 1-9 システム管理アクセスコマンド

説明	コマンド
HTTP 設定についての 情報を表示します	<code>show /SP/services/http</code>
HTTPS への自動リダイレ クトを有効にするなどの HTTP 設定を変更します	<code>set /SP/services/http port=<i>portnumber</i> secureredirect= enabled disabled servicestate=enabled disabled</code>
HTTPS アクセスについ ての情報を表示します	<code>show /SP/services/https</code>
HTTPS 設定を変更します	<code>set /SP/services/https port=<i>portnumber</i> servicestate=enabled disabled</code>
SSH DSA 鍵の設定を表示 します	<code>show /SP/services/ssh/keys/dsa</code>
SSH RSA 鍵の設定を表示 します	<code>show /SP/services/ssh/keys/rsa</code>

表 1-10 クロック設定コマンド

説明	コマンド
ILOM のクロックを設定して、主 NTP サーバーと同期させます	<code>set /SP/clients/ntp/server/1 address=ntpIPAddress</code>
ILOM のクロックを設定して、副 NTP サーバーと同期させます	<code>set /SP/clients/ntp/server/2 address=ntpIPAddress2</code>

表 1-11 SNMP コマンド

説明	コマンド
SNMP 設定の情報を表示します。デフォルトの SNMP ポート番号は 161 で、v3 が有効です	<code>show /SP/services/snmp engineid=snmpengineid port=snmpportnumber sets=enabled disabled v1=enabled disabled v2c=enabled disabled v3=enabled disabled</code>
SNMP ユーザーを表示します	<code>show /SP/services/snmp/users</code>
SNMP ユーザーを追加します	<code>create /SP/services/snmp/users/snmpusername authenticationpassword=password authenticationprotocol=MD5 SHA permissions=rw ro privacypassword=password privacyprotocol=none DES</code>
SNMP ユーザーを削除します	<code>delete /SP/services/snmp/users/snmpusername</code>
SNMP MIB を表示します	<code>show /SP/services/snmp/mibs</code>
SNMP public (読み取り専用) コミュニティーについての情報を表示します	<code>show /SP/services/snmp/communities/public</code>
SNMP private (読み書き可能) コミュニティーについての情報を表示します	<code>show /SP/services/snmp/communities/private</code>
SNMP public コミュニティーを追加します	<code>create /SP/services/snmp/communities/public/comm1 permission=ro rw</code>
SNMP private コミュニティーを追加します	<code>create /SP/services/snmp/communities/private/comm2 permission=ro rw</code>
SNMP コミュニティーを削除します	<code>delete /SP/services/snmp/communities/comm1</code>

表 1-12 ホストシステムのコマンド

説明	コマンド
ホストシステムまたはシャーシの電源を起動します	<code>start /SYS</code> または <code>start /CH</code>
ホストシステムまたはシャーシの電源を停止します (正常な停止)	<code>stop /SYS</code> または <code>stop /CH</code>
ホストシステムまたはシャーシの電源を停止します (強制的に停止)	<code>stop [-f force] /SYS</code> または <code>stop [-f force] /CH</code>
ホストシステムまたはシャーシをリセットします	<code>reset /SYS</code> または <code>reset /CH</code>
ホストコンソールに接続するセッションを開始します	<code>start /SP/console</code>
ホストコンソールに接続していたセッションを停止します (正常な停止)	<code>stop /SP/console</code>
ホストコンソールに接続していたセッションを停止します (強制的に停止)	<code>stop [-f force] /SP/console</code>

表 1-13 コマンドの出力オプションのフィルタリング

説明	フィルタリングされたコマンド
7月 17日に開始されたアクティブな ILOM セッションを表示します	<code>show /SP/sessions -level all starttime=="*Jul 17*"</code>
Admin の役割を持つユーザーを表示します	<code>show /SP/users -level all role=="a"</code>
User の役割と Console の役割「のみ」を持つユーザーを表示します	<code>show /SP/users -level all role=="uc"</code>
すべての SNMP トラップ警告を表示します	<code>show /SP/alertmgmt -level all type=="snmptrap"</code>
すべての無効になっているサービスを表示します	<code>show /SP/services -level all servicestate==disabled</code>
IP 1.2.3.4 の NTP アドレスサーバーを使用する NTP クライアントを表示します	<code>show /SP/clients/ntp -level all address=="1.2.3.4"</code>
0D01B で始まるシリアル番号を持つすべての FRU を表示します	<code>show /SYS fru_serial_number=="0D01B*" -level all</code>

表 1-13 コマンドの出力オプションのフィルタリング (続き)

説明	フィルタリングされたコマンド
INFINEON によって製造されたすべてのメモリーモジュールを表示します	<code>show /SYS -level all type=="DIMM" fru_manufacturer=="INFINEON"</code>
アラームの状態が「メジャー」のすべての電源装置を表示します	<code>show /SYS -level all type=="Power Supply" alarm_status==major</code>
DIMM またはハードディスクであるすべてのコンポーネントを表示します	<code>show /SYS type==("Hard Disk",DIMM) -level all</code>
upper_nonrecov_threshold の値が 2.89 または 60V であるすべての電圧センサーを表示します	<code>show /SYS type==Voltage upper_nonrecov_threshold=="2.*", "60.*"</code>

## ILOM 3.0 のプロパティと ILOM 2.x のプロパティの比較

注 – プロパティは、設定可能な属性であり、各オブジェクトに固有です。

ILOM 2.x から ILOM 3.0 にアップグレードし、2.x スクリプトを更新する場合は、ILOM 3.0 コマンドを実装するために ILOM 3.0 が使用する新しい方法を理解する必要があります。表 1-14 に、ILOM 2.x のプロパティと、それらに代わる新しい ILOM 3.0 の実装を示します。

表 1-14 ILOM 2.x のプロパティと新しい ILOM 3.0 の実装

ILOM 2.x のプロパティ	ILOM 3.0 の実装
<code>/SP/clients/syslog/destination_ip1</code>	<code>/SP/clients/syslog/1/address</code>
<code>/SP/clients/syslog/destination_ip2</code>	<code>/SP/clients/syslog/2/address</code>
<code>/SP/clients/activedirectory/getcertfile</code> (証明書のロード)	次をターゲットとして load コマンドを使用 <code>/SP/clients/activedirectory/cert</code>
<code>/SP/clients/activedirectory/getcertfile</code> (証明書の削除)	次とともに set コマンドを使用 <code>/SP/client/activedirectory/cert clear_action=true</code>
<code>/SP/clients/activedirectory/getcertfile</code> (証明書の復元)	この機能はなくなりました

表 1-14 ILOM 2.x のプロパティと新しい ILOM 3.0 の実装 (続き)

ILOM 2.x のプロパティ	ILOM 3.0 の実装
/SP/clients/activedirectory/certfilestatus	/SP/clients/activedirectory/cert/certstatus
/SP/clients/activedirectory/ipaddress	/SP/clients/activedirectory/address
/SP/clients/activedirectory/alernativeservers/getcertfile (証明書のロード)	次をターゲットとして load を使用 /SP/clients/activedirectory/alernativeservers/cert
/SP/clients/activedirectory/alernativeservers/getcertfile (証明書の削除)	次とともに set コマンドを使用 /SP/client/activedirectory/alernativeservers/cert clear_action=true
/SP/clients/activedirectory/getcertfile/alernativeservers/ (証明書の復元)	この機能はなくなりました
/SP/clients/activedirectory/alernativeservers/certfilestatus	/SP/clients/activedirectory/alernativeservers/cert/certstatus
/SP/clients/activedirectory/alernativeservers/ipaddress	/SP/clients/activedirectory/alernativeservers/address
/SP/clients/radius/ipaddress	/SP/clients/radius/address
/SP/clients/ldap/ipaddress	/SP/clients/ldap/address
/SP/cli/commands	ターゲット名とともに help コマンドを使用
/SP/diag/state	/HOST/diag/state
/SP/diag/generate_host_nmi	/HOST/generate_host_nmi
/SP/diag/mode	/HOST/diag/mode
/SP/diag/level	/HOST/diag/level
/SP/diag/verbosity	/HOST/diag/verbosity



## 第2章

# ILOM へのログインと ILOM からのログアウト

---

項目	
説明	リンク
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">18 ページの「初回ログインの前に」</a></li></ul>
デフォルトのユーザーアカウントおよびパスワードを使用して ILOM にログインする	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">20 ページの「ILOM CLI にログインする – ILOM のデフォルトのユーザーアカウントおよびパスワードを使用」</a></li></ul>
ユーザーアカウントを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">21 ページの「ユーザーアカウントを設定する」</a></li></ul>
ILOM のユーザーアカウントおよびパスワードを使用して ILOM にログインする	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">21 ページの「ILOM CLI にログインする – ILOM のユーザー名およびパスワードを使用」</a></li></ul>
CLI セッションのタイムアウト値を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">22 ページの「CLI セッションのタイムアウト値を設定する」</a></li></ul>
ILOM でバナーメッセージを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">23 ページの「ILOM でバナーメッセージを設定する」</a></li></ul>
ILOM からのログアウト	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">24 ページの「ILOM からログアウトする」</a></li></ul>
失ったパスワードを回復する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">25 ページの「失ったパスワードを回復する」</a></li></ul>

## 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概要	• ILOM の使用開始 • CLI を使用した ILOM の初期セットアップ手順	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』(820-7382)
• Web インタフェース	• ILOM へのログインと ILOM からのログアウト	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

この章は、ILOM のログインおよびログアウト手順のクイックリファレンスとして使用してください。詳細は、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』に記載されている初回ログインのプロセスおよび手順を参照してください。

## 初回ログインの前に

この章の手順を開始する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』で、ILOM との通信を確立に関するトピックを確認します。
- ILOM と通信するには、システム (サーバー SP または CMM) 上で物理シリアル接続またはネットワーク管理接続を確立する必要があります。または、一部のサーバープラットフォームで提供されるローカル相互接続インタフェース機能を使用して、ホストオペレーティングシステムから ILOM に接続します。

サーバーの NET MGT ポートにネットワークケーブルを接続する方法、またはサーバーの SER MGT ポートにデバイスを接続する方法については、使用しているサーバーまたは CMM に付属のインストールガイドを参照してください。サーバーの SER MGT ポートまたは NET MGT ポートへの物理接続を必要とせずに、ホストオペレーティングシステムから ILOM に直接接続する方法の詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』のローカル相互接続インタフェースに関するトピックを参照してください。

- デフォルトで、ILOM は、DHCP を使用してサーバー SP (または CMM) の IPv4 アドレスを取得し、IPv6\_Stateless を使用してサーバー SP (または CMM) の IPv6 アドレスを取得します。サーバー SP (または CMM) の IP アドレスを取得するためのこれらのデフォルトのネットワーク設定が、使用しているネットワーク環境にあてはまらない場合は、ILOM にログインする前にこれらの設定を変更する必要があります。CLI を使用して ILOM のネットワーク設定を変更する方法については、28 ページの「[ネットワークの設定](#)」を参照してください。

---

注 - ILOM 3.0.12 以降では、IPv4 および IPv6 のデュアルスタック用のネットワーク設定が提供されます。ILOM 3.0.12 よりも前のバージョンでは、IPv4 用のネットワーク設定が提供されます。

---

- ILOM にログインするには、ユーザーアカウントとパスワードが必要です。ただし、システム管理者が ILOM に初めてログインする場合は、デフォルトのユーザーアカウント (root) とパスワード (password) を使用してログインできます。ILOM への初回のログイン後に、個々の ILOM ユーザーに対して新しい (root 以外の) ユーザーアカウントとパスワードを確立することを強くお勧めします。

CLI を使用した ILOM でのアカウントの作成および管理の詳細については、[55 ページの「ユーザーアカウントの管理」](#)を参照してください。

---

## ILOM へのログイン

### 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ILOM にログインしてユーザーアカウントを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">20 ページの「ILOM CLI にログインする - ILOM のデフォルトのユーザーアカウントおよびパスワードを使用」</a></li><li>• <a href="#">21 ページの「ユーザーアカウントを設定する」</a></li><li>• <a href="#">21 ページの「ILOM CLI にログインする - ILOM のユーザー名およびパスワードを使用」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li><li>• SPARC システムサーバー</li><li>• CMM</li></ul>
CLI セッションのタイムアウト値を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">22 ページの「CLI セッションのタイムアウト値を設定する」</a></li></ul>	

## ▼ ILOM CLI にログインする – ILOM のデフォルトのユーザーアカウントおよびパスワードを使用

1. Secure Shell (SSH) セッションを使用して、デフォルトの `root` ユーザーアカウントとサーバー SP または CMM の IP アドレスを指定し、ILOM CLI にログインします。

例:

```
$ ssh root@system_ipaddress
```

ILOM がデュアルスタックネットワーク環境で動作している場合は、IPv4 または IPv6 のアドレス形式を使用して `system_ipaddress` を入力できます。例:

- IPv4 のアドレス形式: 10.8.183.106

または

- IPv6 のアドレス形式: fec0:a:8:b7:214:4fff:5eca:5f7e/64

デュアルスタック環境での IP アドレスの入力に関する詳細は、[3 ページの「ILOM CLI によって受け入れられるサーバー SP または CMM のネットワークアドレス」](#)を参照してください。IPv4 と IPv6 の接続に関する問題の診断のヘルプについては、[245 ページの「IPv4 または IPv6 の ILOM 接続に関する問題の診断」](#)を参照してください。

パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

2. デフォルトのパスワードとして `changeme` と入力します。

例:

パスワード: **changeme**

ILOM CLI のプロンプト (->) が表示されます。

---

**注** – ILOM 3.0.4 以降では、CLI セッションがアイドルになってからタイムアウトで終了するまでの時間を設定できます。詳細は、[22 ページの「CLI セッションのタイムアウト値を設定する」](#)を参照してください。

---

## ▼ ユーザーアカウントを設定する

ILOM にログインしたら、一般の (root 以外の) ユーザーアカウントを作成する必要があります。

ユーザーアカウントを設定するには、次の手順を実行します。

- 次の 5 つのユーザークラスのいずれかでユーザーアカウントを設定します。
  - ローカルユーザー
  - Active Directory ユーザー
  - LDAP ユーザー
  - LDAP/SSL ユーザー
  - RADIUS ユーザー

ローカルユーザーアカウントを最大 10 個まで作成するか、1 つのディレクトリサービスを設定することができます。ユーザーアカウントの設定に関する詳細は、[55 ページ](#)の「[ユーザーアカウントの管理](#)」を参照してください。

## ▼ ILOM CLI にログインする – ILOM のユーザー名およびパスワードを使用

---

注 – ここに示す手順を使用して、ILOM にログインし、ユーザーアカウントまたはディレクトリサービスが正常に機能していることを確認します。

---

1. Secure Shell (SSH) セッションを使用して、ユーザー名とサーバー SP または CMM の IP アドレスを指定し、ILOM にログインします。

例:

```
$ ssh username@ipaddress
```

ILOM のパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

2. ILOM のパスワードを入力します。

パスワード: *password*

ILOM CLI のプロンプト (->) が表示されます。

## ▼ CLI セッションのタイムアウト値を設定する

---

注 - cli timeout 設定変数を変更するには、Admin (a) の役割が必要です。また、ILOM 3.0.4 以降のバージョンの ILOM を使用している必要があります。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 現在の設定を表示するには、次のように入力します。  
-> `show /SP/cli`
3. タイムアウト値を設定するには、次のコマンドを入力します。  
-> `set /SP/cli timeout=n`  
*n* は、0 - 1440 の数値です。

---

注 - 0 (ゼロ) を指定すると CLI セッションのタイムアウトは無効となり、セッションがアイドル状態になっている時間が経っても CLI セッションは終了しません。

---

たとえば、タイムアウト値を 60 分に設定するには、次のように入力します。

```
-> set /SP/cli timeout=60
Set 'timeout' to '60'
```

---

## バナーメッセージの設定

項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">22 ページの「始める前に」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li></ul>
ILOM でバナーメッセージを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">23 ページの「ILOM でバナーメッセージを設定する」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• SPARC システムサーバー</li><li>• CMM</li></ul>

### 始める前に

- ILOM のバナーメッセージを設定するには、Admin (a) の役割が必要です。
- ILOM 3.0.8 以降のバージョンの ILOM を使用する必要があります。

## ▼ ILOM でバナーメッセージを設定する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. `show` コマンドを使用して、現在のバナープロパティとサポートされるコマンドを表示します。

例:

```
-> show /SP/preferences/banner

/SP/preferences/banner
Targets:

Properties:
  connect_message = (none)
  login_message = (none)
  login_message_acceptance = disabled

Commands:
  cd
  set
  show
```

3. バナーメッセージを作成するには、次のいずれかのタスクを実行します。

タスク	指示書
「Login」ページに表示されるバナーメッセージを作成する	次のように入力します。 -> <b>set /SP/preferences/banner connect_message=message</b> <i>message</i> には、ログインページに表示する内容を指定します。
ILOM へのログイン後のダイアログボックスに表示されるバナーメッセージを作成する	次のように入力します。 -> <b>set /SP/preferences/banner login_message=message</b> <i>message</i> には、ILOM へのログイン後に表示する内容を指定します。

注 - メッセージは 1,000 文字以内で指定します。メッセージ内で改行するには、次の `/r` または `/n` の CLI 文字を使用します。

4. システムがバナーメッセージを表示できるようにするには、次のように入力します。  
-> `set /SP/preferences/banner/ login_message_acceptance=enabled`
5. システムがバナーメッセージを表示できないようにするには、次のように入力します。  
-> `set /SP/preferences/banner/ login_message_acceptance=disabled`

---

## ILOM からのログアウトと失ったパスワードの回復

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ILOM からのログアウト	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">24 ページの「ILOM からログアウトする」</a></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• x86 システムサーバー SP</li> <li>• SPARC システムサーバー</li> </ul>
失ったパスワードを回復する	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">25 ページの「失ったパスワードを回復する」</a></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• CMM</li> </ul>

### ▼ ILOM からログアウトする

ILOM からログアウトするには、次の手順を実行します。

- コマンドプロンプトで、次のように入力します。  
-> `exit`



## ▼ 失ったパスワードを回復する

### 始める前に

- この手順は、実際にサーバーのある場所で実行する必要があります。

事前に設定された default ユーザーアカウントを使用して、失ったパスワードを回復するか、root ユーザーアカウントを再作成できます。root ユーザーアカウントと default ユーザーアカウントの詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』の「root および default ユーザーアカウント」を参照してください。

失ったパスワードを回復するには、次の手順を実行します。

1. default ユーザーアカウントを使用して ILOM シリアルコンソールにログインします。

例:

```
SUNSP-0000000000 login: default  
Press and release the physical presence button.  
Press return when this is completed...
```

2. サーバーのある場所に実際にいることを証明します。

サーバーのある場所にいることの証明方法については、使用しているプラットフォームのマニュアルを参照してください。

3. シリアルコンソールに戻り、Enter キーを押します。

パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

4. default ユーザーアカウントのパスワードを入力します: **defaultpassword**

---

注 – この時点でパスワードをリセットすることをお勧めします。58 ページの「[ユーザーアカウントのパスワードを変更する](#)」を参照してください。

---

## 次の手順

ILOM にログインしてユーザーアカウントを設定したら、ILOM の機能を設定できます。『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド』の残りの章では、ILOM の機能にアクセスするために実行できるタスクについて説明します。



## 第3章

# ILOM の通信設定

---

項目	
説明	リンク
ネットワークの設定	<ul style="list-style-type: none"><li>• 30 ページの「IPv4 のネットワーク設定を表示および構成する」</li><li>• 32 ページの「ILOM の既存 IPv4 アドレスを編集する」</li><li>• 33 ページの「Pv4/IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成する」</li><li>• 38 ページの「IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストする」</li><li>• 39 ページの「ホスト名およびシステム識別子を割り当てる」</li><li>• 40 ページの「DNS の設定を表示および構成する」</li><li>• 41 ページの「シリアルポート設定を表示および構成する」</li><li>• 42 ページの「HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする」</li><li>• 44 ページの「シリアルポート出力を切り替える」</li></ul>
Secure Shell の設定	<ul style="list-style-type: none"><li>• 45 ページの「セキュリティー保護されたりリモート SSH 接続を確立する」</li><li>• 46 ページの「SSH を有効または無効にする」</li><li>• 46 ページの「現在の鍵を表示する」</li><li>• 47 ページの「新しい SSH 鍵を生成する」</li><li>• 48 ページの「SSH サーバーを再起動する」</li></ul>
ローカル相互接続インタフェースの設定	<ul style="list-style-type: none"><li>• 50 ページの「ローカル相互接続インタフェースの設定」</li></ul>

---

## 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• ILOM のネットワーク設定	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
• 概要	• ILOM への接続	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』(820-7382)
• Web インタフェース	• ILOM の通信設定	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)
• IPMI ホストおよび SNMP ホスト	• ILOM の通信設定	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコルリファレンスガイド』(820-7379)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。

[http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights\\_mgr30#hic](http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights_mgr30#hic)

# ネットワークの設定

## 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	• <a href="#">29 ページの「始める前に」</a>	• x86 システムサーバー SP
IPv4 のネットワーク設定を表示および構成する	• <a href="#">30 ページの「IPv4 のネットワーク設定を表示および構成する」</a>	• SPARC システムサーバー
既存の IPv4 アドレスを編集する	• <a href="#">32 ページの「ILOM の既存 IPv4 アドレスを編集する」</a>	• CMM
IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成する	• <a href="#">33 ページの「IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成する」</a>	
IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストする	• <a href="#">38 ページの「IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストする」</a>	

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ホスト名およびシステム識別子を割り当てる	<ul style="list-style-type: none"> <li>39 ページの「ホスト名およびシステム識別子を割り当てる」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>x86 システムサーバー SP</li> <li>SPARC システムサーバー</li> <li>CMM</li> </ul>
DNS の設定を表示および構成する	<ul style="list-style-type: none"> <li>40 ページの「DNS の設定を表示および構成する」</li> </ul>	
シリアルポートの設定を表示および構成する	<ul style="list-style-type: none"> <li>41 ページの「シリアルポート設定を表示および構成する」</li> </ul>	
HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする	<ul style="list-style-type: none"> <li>42 ページの「HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする」</li> </ul>	
SP コンソールとホストコンソールの間でシリアルポート出力を切り替える	<ul style="list-style-type: none"> <li>44 ページの「シリアルポート出力を切り替える」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>x86 システムサーバー SP</li> </ul>

## 始める前に

ILOM のネットワーク設定を表示または構成する前に、次の情報について確認してください。

ネットワーク環境	始める前に
IPv4 のみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>ネットワーク設定を構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。</li> <li>ILOM の通信設定を構成する前に、同一 IP アドレスが常に ILOM に割り当てられるようにしてください。これは、初期設定後に静的 IP アドレスを ILOM に割り当てるか、または DHCP サーバーを設定して常に同一 IP アドレスを ILOM に割り当てることによって行います。これにより、ネットワーク上で ILOM を簡単に検出できるようになります。デフォルトで、ILOM は、DHCP を使用してネットワーク設定を取得しようとします。</li> </ul>
IPv4/IPv6 デュアルスタック	<ul style="list-style-type: none"> <li>ネットワーク設定を構成またはテストするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。</li> <li>サーバーまたは CMM に ILOM ファームウェア 3.0.12 以降がインストールされていることを確認してください。</li> <li>IPv6 の設定オプションに対するサポートを、プラットフォームの ILOM 補足マニュアルまたは管理マニュアルで確認してください。</li> <li>『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370) の第 2 章で説明されている IPv6 の拡張機能について確認してください。</li> </ul>

- ILOM は、デフォルトで、デュアルモードの TCP/IP スタックをサポートしており、IPv4 と IPv6 の両方の状態が有効に設定されて工場から出荷されます。必要に応じて、IPv6 ネットワークの状態を無効にすることができます (オプション)。ただし、IPv4 ネットワーク環境または IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境で ILOM を動作させるには、IPv4 ネットワークの状態を常に有効にする必要があります。
- ILOM は、IPv4 と IPv6 の両方のネットワーク環境用に、静的ネットワークおよび DHCP ネットワークの設定をサポートしています。
- IPv6 のステートレス自動設定を使用する場合、ILOM (3.0.12 以降) では、ネットワークルーターを IPv6 用に設定する必要があります。
- DHCPv6 の自動設定オプションを使用する場合、ILOM (3.0.14 以降) では、デバイスの IPv6 アドレスと DNS 情報を提供するネットワーク DHCPv6 サーバーが必要です。  
注 - DHCP と DHCPv6 は別々のプロトコルです。デュアルスタックネットワーク環境では、DHCP と DHCPv6 が次のように動作します。(1) DHCPv6 サーバーは、IPv6 アドレスをネットワークノードに提供することができます。ネットワークノードは、常に IPv6 プロトコルを使用して DHCPv6 サーバーと通信します。(2) DHCP サーバーは、IPv4 アドレスをネットワークノードに提供することができます。ネットワークノードは、常に IPv4 プロトコルを使用して DHCP サーバーと通信します。
- DHCP および DHCPv6 の自動設定を使用する場合、IPv6 の DHCP サーバーまたは IPv4 の DHCP サーバーのいずれか (両方ではない) から DNS 情報を受信するように選択する必要があります。  
DNS ネームサーバーの設定は、ILOM のネットワーク DNS のターゲットで手動で構成することができます。DNS 情報を指定する場合の手順については、[40 ページの「DNS の設定を表示および構成する」](#)を参照してください。

この節で説明するその他のネットワーク設定

- サーバー SP または CMM のネットワークプロパティまたはオプションを変更するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ IPv4 のネットワーク設定を表示および構成する

注 - ここでは、ILOM を IPv4 のみのネットワーク環境で動作するように設定する場合の手順について説明します。この手順は、ILOM 3.0.10 以前のバージョンの ILOM でサポートされています。ILOM を IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境で動作するように設定する場合の手順については、[33 ページの「IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成する」](#)を参照してください。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、次のように入力します。  
-> `show /SP/network`
3. `set` コマンドを使用して、変更するすべての設定を入力します。  
これらのコマンドは、組み合わせたコマンドで実行することができます。[10 ページの「組み合わせたコマンドを実行する」](#)を参照してください。

---

注 - 一連のプロパティをすべて変更し、保留されているすべての値がコマンドに  
入力された場合にのみ、true に確定します。

---

---

注 - 設定は、commitpending=true と設定するとすぐに有効になります。ネット  
ワーク経由で ILOM に接続している場合、ネットワーク設定を行うと、アクティブ  
なセッションが切断されることがあります。変更を確定する前にすべてのシステムを  
設定してください。変更を確定したら、ILOM に再接続する必要があります。

---

## 例

複数のネットワーク設定を DHCP から静的に割り当てた設定に変更するには、次の  
ように入力します。

```
-> set /SP/network pendingipdiscovery=static pendingipaddress=  
    mmm.mmm.mmm.mmm pendingipgateway=mmm.mmm.mmm.mmm pendingipnetmask=mmm.mmm.mmm.mmm  
    commitpending=true
```

## ターゲット、プロパティ、および値

ILOM のネットワーク設定では、次のターゲット、プロパティ、および値が有効  
です。

表 3-1 ネットワーク設定の ILOM ターゲット、プロパティ、および値

対象	プロパティ	値	デフォルト値
/SP/network	ipaddress	読み取り専用 (値はシステ ムによって更新される)	
	ipdiscovery		
	ipgateway		
	ipnetmask		
	macaddress	ILOM の MAC アドレス	
	commitpending	true none	none
	pendingipaddress	<IP アドレス なし>	none
	pendingipdiscovery	dhcp static	dhcp
	pendingipgateway	<IP アドレス なし>	none
	pendingipnetmask	<ipdotteddecimal>	255.255.255.0
	dhcp_server_ip	読み取り専用 (値は SP が DHCP アドレスを受け 取ったときに更新される)	
state	enabled disabled	none	

## ▼ ILOM の既存 IPv4 アドレスを編集する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 次のいずれかのコマンドを入力して、SP の作業用ディレクトリを設定します。
  - ラック搭載型のスタンドアロンサーバーの場合: `cd /SP/network`
  - シャーシブレードサーバーモジュールの場合: `cd /SP/network`
  - シャーシ CMM の場合: `cd /CMM/network`
3. `show` コマンドを入力して、割り当てられている IP アドレスを表示します。
4. 次のコマンドを入力して、既存の設定を変更します。

コマンド	説明および例
<code>set pendingipaddress=&lt;ipaddress&gt;</code>	このコマンドに続けて、サーバー SP または CMM に割り当てる静的 IP アドレスを入力します。
<code>set pendingipnetmask=&lt;ipnetmask&gt;</code>	このコマンドに続けて、サーバー SP または CMM に割り当てる静的ネットマスクアドレスを入力します。
<code>set pendingipgateway=&lt;ipgateway&gt;</code>	このコマンドに続けて、サーバー SP または CMM に割り当てる静的ゲートウェイアドレスを入力します。
<code>set pendingipdiscovery=&lt;ipdiscovery&gt;</code>	このコマンドを入力して、サーバー SP または CMM で静的 IP アドレスを設定します。
<code>set commitpending=true</code>	このコマンドを入力して、指定したネットワーク設定を割り当てます。

例:

```
set pendingipaddress=129.144.82.26
set pendingipnetmask=255.255.255.0
set pendingipgateway=129.144.82.254
set pendingipdiscovery=static
set commitpending=true
```

**注** – 遠隔 SSH 接続を使用して ILOM に接続した場合、以前の IP アドレスを使用して確立された ILOM への接続はタイムアウトします。ILOM に接続するには、新しく割り当てた設定を使用します。



## ▼ Pv4/IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成する

---

注 – ここでは、ILOM を IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境で動作するように設定する場合の手順について説明します。ILOM を IPv4 のみのネットワーク環境で動作するように設定する場合の手順については、[30 ページの「IPv4 のネットワーク設定を表示および構成する」](#)を参照してください。この手順は、ILOM 3.0.10 以前のバージョンの ILOM でサポートされています。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。  
サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 使用中のネットワーク環境に適用するネットワーク構成手順を実行します。
  - IPv4 のネットワーク設定を構成するには、この手順の[手順 3 - 手順 5](#)を実行します。
  - IPv6 のネットワーク設定を構成するには、この手順の[手順 6 - 手順 10](#)を実行します。
3. IPv4 のネットワーク構成の場合は、`cd` コマンドを使用して、デバイスの作業用ディレクトリ `/x/network` に移動します。  
例:
  - ラック搭載型サーバー SP の場合、`cd /SP/network` と入力します。
  - シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/network` と入力します。
  - シャーシブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLn/network` と入力します。
  - SP ノードが複数あるシャーシブレードサーバーの場合、`cd /CH/BLn/Noden/network` と入力します。
4. `show` コマンドを入力して、デバイスで構成されている IPv4 のネットワーク設定を表示します。
5. DHCP IPv4 または静的 IPv4 のネットワーク設定を行うには、次のいずれかを実行します。

- DHCP IPv4 のネットワーク設定を行うには、次のプロパティの値を設定します。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
state	set state=enabled	IPv4 の場合、デフォルトのネットワークの state は enabled です。 注 - IPv4 の DHCP ネットワークオプションを有効にするには、state を enabled に設定する必要があります。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=dhcp	IPv4 の場合、デフォルトの ipdiscovery のプロパティ値は dhcp に設定されます。 注 - デフォルトの dhcp のプロパティ値が static に変更された場合は、プロパティ値を dhcp に設定する必要があります。
commitpending=	set commitpending=true	state および ipdiscovery のプロパティ値に対して行われた変更を確定するには、commitpending=true と入力します。

- 静的 IPv4 のネットワーク設定を行うには、次のプロパティの値を設定します。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
state	set state=enabled	IPv4 の場合、デフォルトのネットワークの state は enabled です。 注 - 静的 IPv4 のネットワークオプションを有効にするには、state を enabled に設定する必要があります。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=static	静的 IPv4 のネットワーク構成を有効にするには、pendingipdiscovery プロパティの値を static に設定する必要があります。 注 - IPv4 の場合、デフォルトの ipdiscovery のプロパティ値は dhcp に設定されます。
pendingipaddress pendingipnetmask pendingipgateway	set pendingipaddress= <ip_address> pendingipnetmask= <netmask> pendingipgateway= <gateway>	複数の静的なネットワーク設定を割り当てるには、set コマンドに続けて、プロパティ値 (IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイ) ごとに pending コマンドを入力し、割り当てる静的な値を入力します。
commitpending=	set commitpending=true	IPv4 ネットワークのプロパティに対して行われた変更を確定するには、set commitpending=true と入力します。

6. IPv6 のネットワーク構成の場合は、`cd` コマンドを使用して、デバイスの作業用ディレクトリ `/x/network/ipv6` に移動します。

例:

- ラック搭載型サーバー SP の場合、`cd /SP/network/ipv6` と入力します。
- シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/network/ipv6` と入力します。
- シャーシブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLn/network/ipv6` と入力します。
- SP ノードが複数あるシャーシブレードサーバーの場合、`cd /CH/BLn/Noden/network/ipv6` と入力します。

7. `show` コマンドを入力して、デバイスで構成されている IPv6 のネットワーク設定を表示します。

サーバー SP デバイスの IPv6 プロパティの出力値の例を次に示します。

```
-> show

/SP/network/ipv6
Targets:

Properties:
  state = enabled
  autoconfig = stateless
  dhcpv6_server_ duid = (none)
  link_local_ipaddress = fe80::214:4fff:feca:5f7e/64
  static_ipaddress = ::/128
  ipgateway = fe80::211:5dff:febe:5000/128
  pending_static_ipaddress = ::/128
  dynamic_ipaddress_1 = fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

Commands:
  cd
  show
```

---

**注** – `autoconfig=` プロパティが `dhcpv6_stateful` または `dhcpv6_stateless` に設定されている場合、読み取り専用の `dhcpv6_server_ duid` プロパティによって、ILOM が DHCP 情報を取得するために最後に使用した、DHCPv6 サーバーの一意の DHCP ID が特定されます。

---

---

**注** – ILOM 3.0.14 以降で提供されている IPv6 の `autoconfig` プロパティのデフォルト値は、`autoconfig=stateless` です。ただし、CMM またはサーバーに ILOM 3.0.12 がインストールされている場合、`autoconfig` プロパティのデフォルト値は `autoconfig=stateless_only` になります。

---

8. IPv6 の自動設定オプションを設定するには、set コマンドを使用して、次の自動設定プロパティ値を指定します。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。IPv6 の自動設定オプションを有効にするには、この状態を enabled に設定する必要があります。
autoconfig	set autoconfig=<value>	<p>このコマンドに続けて、autoconf の設定値を指定します。オプションには次のものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• stateless (ILOM 3.0.14 以降で提供されるデフォルト設定) または stateless_only (ILOM 3.0.12 で提供されるデフォルト設定) IPv6 のネットワークルーターから学習した IP アドレスを自動的に割り当てます。</li><li>• dhcpv6_stateless DHCP サーバーから学習した DNS 情報を自動的に割り当てます。 dhcpv6_stateless プロパティの値は、ILOM 3.0.14 以降で使用できます。</li><li>• dhcpv6_stateful DHCPv6 サーバーから学習した IPv6 アドレスを自動的に割り当てます。 dhcpv6_stateful プロパティの値は、ILOM 3.0.14 以降で使用できます。</li><li>• disable 自動設定プロパティの値をすべて無効にし、リンクローカルアドレスの読み取り専用プロパティの値を設定します。</li></ul>

**注** – IPv6 の設定オプションは、設定されたあとに有効になります。これらの変更を /network ターゲットで確定する必要はありません。

**注** – デバイス用に学習した IPv6 自動設定アドレスは、デバイスに対するアクティブな ILOM セッションに影響しません。新しく学習した自動設定アドレスは、/network/ipv6 ターゲットで確認できます。

**注** – ILOM 3.0.14 以降では、stateless 自動設定オプションを有効にすると、dhcpv6\_stateless のオプションが有効になったとき、または dhcpv6\_stateful のオプションが有効になったときに、それと同時に実行することができます。ただし、同時に実行する目的で、dhcpv6\_stateless および dhcpv6\_stateful の自動設定オプションを有効にしないでください。

9. 次の手順を実行して、静的 IPv6 アドレスを設定します。

- a. 保留中の静的 IPv6 アドレスを設定するには、次のプロパティ値を指定します。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。静的 IP アドレスを有効にするには、この状態を enabled に設定する必要があります。
pendingipaddress	set pending_static_ipaddress=<ip6_address>/<subnet mask length in bits>	このコマンドに続けて、デバイスに割り当てる静的 IPv6 アドレスおよびネットマスクのプロパティ値を入力します。 IPv6 アドレスの例: fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

- b. 保留中の IPv6 静的ネットワークのパラメータを確定 (保存) するには、次の表の手順を実行します。

手順	説明
1	cd コマンドを使用して、ディレクトリをデバイスの network ターゲットに変更します。 例: <ul style="list-style-type: none"><li>ラック搭載型サーバーの場合、cd /SP/network と入力します。</li><li>シャーシ CMM の場合、cd /CMM/network と入力します。</li><li>シャーシブレードサーバー SP の場合、cd /CH/BLn/network と入力します。</li><li>ノードが複数あるシャーシブレードサーバー SP の場合、cd /CH/BLn/NodeN/network と入力します。</li></ul>
2	IPv6 用に変更されたプロパティ値を確定するには、次のコマンドを入力します。 set commitpending=true

注 – 新しい静的 IP アドレスをデバイス (SP または CMM) に割り当てると、デバイスに対するアクティブな ILOM セッションがすべて終了します。ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいブラウザセッションを作成する必要があります。

10. ILOM で IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストするには、ネットワークテストツール (Ping および Ping6) を使用します。詳細は、[38 ページの「IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストする」](#)を参照してください。

## ▼ IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストする

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。  
サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. `cd` コマンドを使用して、デバイスの作業用ディレクトリ `/x/network/test` に移動します。例:
  - ラック搭載型サーバー SP の場合、`cd /SP/network/test` と入力します。
  - シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/network/test` と入力します。
  - シャーシブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLn/network/test` と入力します。
  - SP ノードが複数あるシャーシブレードサーバーの場合、`cd /CH/BLn/Noden/network/test` と入力します。
3. `show` コマンドを入力して、ネットワークの `test` ターゲットとプロパティを表示します。  
CMM デバイスでの `test` ターゲットのプロパティの出力例を次に示します。

```
-> show

/CMM/network/test
Targets:

Properties:
  ping = (Cannot show property)
  ping6 = (Cannot show property)

Commands:
  cd
  set
  show
```

4. `set ping` または `set ping6` コマンドを使用して、ネットワークテストをデバイスから指定したネットワークの宛先に送信します。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
ping	<code>set ping=&lt;IPv4_address&gt;</code>	コマンドプロンプトで <code>set ping=</code> コマンドを入力し、続けてテストの宛先の IPv4 アドレスを入力します。 例: <code>-&gt; set ping=10.8.183.106</code> <code>Ping of 10.8.183.106 succeeded</code>

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
ping6	set ping6=<IPv6_address>	set ping6= コマンドに続けて、テストの宛先の IPv6 アドレスを入力します。 例: -> set ping6=fe80::211:5dff:febe:5000 Ping of fe80::211:5dff:febe:5000 succeeded

## ▼ ホスト名およびシステム識別子を割り当てる

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. SP ホスト名およびシステム識別子のテキストを設定するには、コマンドプロンプトで次のように入力します。

```
-> set /SP hostname=text_string
```

```
-> set /SP system_identifier=text_string
```

各エントリの内容は次のとおりです。

- ホスト名には英数字を使用でき、ハイフンを含めることができます。ホスト名は最大 60 文字まで入力できます。
- システム識別子には、標準的なキーボードの任意のキーを使用したテキスト文字列を使用できます。ただし、引用符は除きます。

例:

```
-> set /SP hostname=Lab2-System1
```

```
-> set /SP system_identifier=DocSystemforTesting
```

この設定の場合、show コマンドの出力は次のようになります。

```
-> show /SP
/SP
  Targets:
    alertmgmt
    .
    .
    users
  Properties:
    check_physical_presence = false
    hostname = Lab2-System1
    system_contact = (none)
    system_description = SUN BLADE X8400 SERVER MODULE, ILOM
                        v3.0.0.0, r31470
    system_identifier = DocSystemforTesting
```

```

system_location = (none)
Commands:
  cd
  reset
  set
  show
  version

```

## ▼ DNS の設定を表示および構成する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで次のコマンドを入力して、外部シリアルポートの設定を表示します。

```
-> cd /SP/clients/dns
```

3. `set` コマンドを使用して、DNS 設定のプロパティと値を変更します。コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/dns [propertyname=value]
```

例:

```
-> set /SP/clients/dns searchpath=abcdefg.com
```

## ターゲット、プロパティ、および値

DNS 設定では、次のターゲット、プロパティ、および値が有効です。

表 3-2 DNS 設定で有効なターゲット、プロパティ、および値

対象	プロパティ	値	デフォルト値
/SP/clients/dns	auto_dns	enabled disabled	disabled
	nameserver	ip_address	
	retries	0 - 4 の整数	
	searchpath	1 - 10 の整数	
	timeout	最大 6 つのコンマで区切られた検索接尾辞	



## ▼ シリアルポート設定を表示および構成する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、次のように入力します。
  - 外部シリアルポートの設定を表示するには、次のコマンドを入力します。  
-> `show /SP/serial/external`
  - ホストのシリアルポートの設定を表示するには、次のコマンドを入力します。  
-> `show /SP/serial/host`
3. `set` コマンドを使用すると、シリアルポート設定のプロパティと値を変更できます。ポート設定には、`pending` と `active` という 2 つのプロパティセットがあります。コマンドプロンプトで、次のように入力します。  
-> `set target [propertyname=value] commitpending=true`

### 例

ホストシリアルポートの速度 (ボーレート) を 9600 から 57600 に変更するには、次のように入力します。

- x86 ベースのシステムの場合  
-> `set /SP/serial/host pendingspeed=57600 commitpending=true`
- SPARC ベースのシステムの場合  
-> `set /SP/serial/external pendingspeed=57600 commitpending=true`

---

注 - x86 ベースのシステムでは、ILOM がホストと適切に通信するために、ホストシリアルポートの速度を、ホストのオペレーティングシステムのシリアルポート 0、COM1、または `/dev/ttyS0` の速度設定と一致させてください。

---

## ターゲット、プロパティ、および値

ILOM のシリアルポート設定では、次のターゲット、プロパティ、および値が有効です。

表 3-3 ILOM のシリアルポート設定で有効なターゲット、プロパティ、および値

対象	プロパティ	値	デフォルト値
/SP/serial/external	commitpending	true   (なし)	(none)
	flowcontrol	software	software
	pendingspeed	<整数>	9600
	speed	読み取り専用の値 (pendingspeed プロパティによって設定される)	
/SP/serial/host	commitpending	true   (なし)	(none)
	pendingspeed	<整数>	(none)
	speed	読み取り専用の値 (pendingspeed プロパティによって設定される)	

## ▼ HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にする

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、次のように入力します。  
-> `set /SP/services/http [propertyname=value]`  
プロパティは /SP/services/http および /SP/services/https にあります。

## ターゲット、プロパティ、および値

表 3-4 に、HTTP 接続および HTTPS 接続で有効なターゲット、プロパティ、および値を示します。

表 3-4 HTTP 接続および HTTPS 接続で有効なターゲット、プロパティ、および値

対象	プロパティ	値	デフォルト値
/SP/services/http	securerredirect	enabled  disabled	enabled
	servicestate	enabled  disabled	disabled
	port	<ポート番号>	80
/SP/services/https	servicestate	enabled  disabled	enabled
	port	<ポート番号>	443

表 3-5 に、HTTP、HTTPS、および自動リダイレクトで使用可能な設定を示します。

表 3-5 HTTP、HTTPS、および自動リダイレクトで使用可能な設定

目的の状態	対象	プロパティ	値
HTTP のみを有効にする	/SP/services/http	securerredirect	disabled
	/SP/services/http	servicestate	enabled
	/SP/services/https	servicestate	disabled
HTTP および HTTPS を有効にする	/SP/services/http	securerredirect	disabled
	/SP/services/http	servicestate	enabled
	/SP/services/https	servicestate	enabled
HTTPS のみを有効にする	/SP/services/http	securerredirect	disabled
	/SP/services/http	servicestate	disabled
	/SP/services/https	servicestate	enabled
HTTP を HTTPS に自動的にリダイレクトする	/SP/services/http	securerredirect	enabled
	/SP/services/http	servicestate	disabled
	/SP/services/https	servicestate	enabled

## ▼ シリアルポート出力を切り替える

---

**注** – シリアルポートの共有がサーバーでサポートされているかどうかを確認するには、サーバーに付属している、プラットフォームの ILOM 補足マニュアルまたは管理マニュアルを参照してください。

---



**注意** – SP 上でネットワークを設定してから、シリアルポートの所有者をホストサーバーに切り替えるようにしてください。ネットワークが設定されていない状態でシリアルポートの所有者をホストサーバーに切り替えると、CLI または Web インタフェースを使用して接続できないため、シリアルポートの所有者を SP に戻すことができなくなります。シリアルポートの所有者の設定を SP に返すには、サーバーでシリアルポートへのアクセスを復元する必要があります。サーバーでシリアルポートへのアクセスを復元する方法の詳細については、サーバーに付属している、プラットフォームのマニュアルを参照してください。

---

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. シリアルポートの所有者を設定するには、次のように入力します。  
-> `set /SP/serial/portsharing/owner=host`

---

**注** – シリアルポートのデフォルトの共有値は `owner=SP` です。

---

3. シリアルホストをサーバーに接続するには、ドングルまたはマルチポートケーブルを使用します。  
サーバーにデバイスを接続する方法の詳細については、サーバーに付属している、プラットフォームのインストールマニュアルを参照してください。

# Secure Shell の設定

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Secure Shell の設定	<ul style="list-style-type: none"><li>45 ページの「セキュリティー保護されたりリモート SSH 接続を確立する」</li><li>46 ページの「SSH を有効または無効にする」</li><li>46 ページの「現在の鍵を表示する」</li><li>47 ページの「新しい SSH 鍵を生成する」</li><li>48 ページの「SSH サーバーを再起動する」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

## 始める前に

- Secure Shell (SSH) の設定を行うには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ セキュリティー保護されたりリモート SSH 接続を確立する

- 遠隔 SSH クライアントからサーバー SP へのセキュリティー保護された接続を確立する必要があります。セキュリティー保護された接続を確立するには、次のように入力します。

```
$ ssh -l username server_ipaddress
```

```
Password: *****
```

デフォルトの CLI プロンプトが表示され、システムではネットワーク設定を確立する CLI コマンドを実行する準備ができました。

## ▼ SSH を有効または無効にする

---

注 – ILOM では、SSH がデフォルトで有効になっています。

---

次の手順に従って、SSH を有効または無効にします。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ネットワーク経由でのアクセスを提供しない場合、または SSH を使用しない場合は、次のように入力します。

```
-> set /SP/services/ssh state=enabled | disabled
```

## ▼ 現在の鍵を表示する

---

注 – /SP/services/ssh/keys/rsa|dsa の下のプロパティはすべて読み取り専用です。鍵を表示するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

---

次のいずれかの手順に従って、現在の鍵を表示します。

- RSA 鍵を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/services/ssh/keys/rsa
  For example:
  /SP/services/ssh/keys/rsa
  Targets:
  Properties:
    fingerprint =
ca:c0:05:ff:b7:75:15:a0:30:df:1b:a1:76:bd:fe:e5
    length = 1024
    publickey
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAthvlggXbPIxN4OEvkukKupdFPr8GDaOsKGg
BESVlnny4nX8yd8JC/hrw3qDHmXIZ8JAFwoLQgjtZCbEsgpn9nNIMb6nSfu6Y1t
TtUZXSgFBZ48R0mU0SqqfR3i3bgDUR0siphlpvV6Yu0Zd1h3549wQ+RWk3vxqHQ
Ffzhv9c=
  Commands:
    cd
    show
```

- DSA 鍵を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/services/ssh/keys/dsa
For example:
  /SP/services/ssh/keys/dsa
  Targets:

  Properties:
    fingerprint =
6a:90:c7:37:89:e6:73:23:45:ff:d6:8e:e7:57:2a:60
    length = 1024
    publickey =
AAAAB3NzaC1kc3MAAACBAInrYecNH86imBbUqE+3FoUfm/fei2ZZtQzqrMx5zBm
bHFIAFdRQKeoQ7gqjc9jQbO7ajLxwk2vZzkg3ntnmqHz/hwHvdho2KaolBtAFGc
fLIIdzGVxi4I3phVb6anmTlbqI2AILAa7JvQ8dEGbyATYR9A/pf5VTac/TQ700/J
AAAAFQCIUavkex7wtEhC0CH3s25ON0I3CwAAAIbNfHUop6ZN7i46ZuQOKhD7Mkj
gdHy+8MTBkupVfXqfRE9Zw9yrBZCNsoD8XEeIeyP+pu05k5dJvkzqSqrTVoAXyY
qewyZMFE7stutugw/XEmyjq+XqBWaiOAQskdiMvNHa3MSg8PKJyWP8eIMxD3rIu
PTzkV632uBxzwSwfAQAAAIAtA8/3odDJUprnxLgHTowc8ksGBj/wJDgPfpGGJHB
B1FDBMhSsRbwh6Z+s/gAf1f+S67HJBTUPsVSMz+czmamc1oZeOazT4+zeNG6uCl
u/5/JmJSdkguc1FcoxtBFqfO/fKjyR0ecWauU7L4kjjvWoSsydHJ0pMHasEecEBER
lg==

  Commands:
    cd
    show
```

## ▼ 新しい SSH 鍵を生成する

次の手順に従って、新しい SSH 鍵を生成します。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 次のように入力して、鍵の種類を設定します。

```
-> set /SP/services/ssh generate_new_key_type=dsa|rsa
```

3. 操作を true に設定します。

```
-> set /SP/services/ssh generate_new_key_action=true
```

フィンガプリントと鍵は異なって見えます。新しい鍵は、新しい接続が確立されるとすぐに有効になります。

## ▼ SSH サーバーを再起動する

---

注 – SSH サーバーを再起動すると、既存の SSH 接続がすべて終了します。

---

次の手順に従って、SSH サーバーを再起動します。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. SSH サーバーを再起動するには、次のように入力します。

```
-> set /SP/services/ssh restart_sshd_action=true
```

---

## ローカル相互接続インタフェースの設定

### 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">48 ページの「始める前に」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li></ul>
ローカル相互接続インタフェースの設定	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">50 ページの「ローカル相互接続インタフェースの設定」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• SPARC システムサーバー</li></ul>

## 始める前に

この節で説明されている手順を実行して、ローカル相互接続インタフェースを ILOM で設定するためには、次の要件を満たす必要があります。

- ILOM SP とホスト OS の間でのローカル相互接続インタフェースの使用に関する概念を確認します。詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』の「ローカル相互接続インタフェース: ホストオペレーティングシステムから ILOM へのローカル接続」を参照してください。
- ローカルホスト相互接続の設定に関する ILOM の説明を確認します。詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』の「ILOM のローカルホスト相互接続の設定」を参照してください。
- サーバーで ILOM 3.0.12 以降のバージョンの ILOM が実行されていることを確認します。
- プラットフォームでローカル相互接続インタフェースがサポートされていることを確認します。プラットフォームサーバーの ILOM 補足マニュアルまたは管理マニュアルを参照してください。



---

注 – ILOM のローカル相互接続インタフェースに関する設定は、CMM ではサポートされません。

---

- ローカル相互接続インタフェースを自動で設定するには、ILOM で「Host Managed」(hostmanaged) の設定を有効にする (True に設定する) 必要があります。また、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアをサーバーにインストールする必要があります。Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 ソフトウェアのインストールの詳細については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』(821-2181) を参照してください。
- ILOM SP とホストオペレーティングシステム間のローカル相互接続インタフェースを手動で設定するには、ILOM で「Host Managed」(hostmanaged) の設定を無効にする (False に設定する) 必要があります。また、ホストオペレーティングシステムで、その他の設定を行う必要があります。

ローカル相互接続インタフェース上でホスト OS 接続ポイントを設定するためのガイドラインについては、[247 ページの「ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動設定ガイドライン」](#)を参照してください。

- ホストオペレーティングシステムは、ILOM SP から提示される内部 USB Ethernet デバイスをサポートする必要があります。そのため、ILOM でローカル相互接続インタフェースを設定する前に、内部 USB Ethernet デバイスのドライバが、オペレーティングシステムのディストリビューションに含まれていたか、およびサーバーにインストールされているかを確認する必要があります。内部 USB Ethernet デバイスのドライバがオペレーティングシステムのディストリビューションによってインストールされていない場合は、使用中のオペレーティングシステム用のデバイスドライバを Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 ソフトウェアから取得できます。詳細については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』(821-2181) を参照してください。
- ILOM のローカル相互接続インタフェースに関する設定のネットワークパラメータの変更は、ILOM で変更を確定するまで保留中とみなされます。たとえば、ILOM CLI では、`commitpending=true` コマンドを発行して、`pendingipaddress` および `pendingipnetmask` を `network/interconnect` ターゲットの下に保存する必要があります。ILOM Web インタフェースでは、「Configure USB Ethernet Parameters」ダイアログで入力したネットワークパラメータの変更が、「Save」をクリックしたあとに確定されます。
- ILOM のローカル相互接続インタフェースに関する設定を変更するためには、Administrator (a) の役割の特権を持っている ILOM ユーザーアカウントが必要です。
- サーバーでサポートされているオペレーティングシステムを確認するには、プラットフォームサーバーのインストールマニュアルまたはオペレーティングシステムマニュアルを参照してください。

## ▼ ローカル相互接続インタフェースの設定

1. ILOM SP CLI にログインします。

サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。

2. `cd` コマンドを使用して、サーバーの作業用ディレクトリ `/x/network/interconnect` に移動します。

例:

- ラック搭載型サーバー SP の場合、`cd /SP/network/interconnect` と入力します。
- シャーシブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLM/network/interconnect` と入力します。

3. `show` コマンドを入力して、ネットワークの `interconnect` ターゲットとプロパティを表示します。

出力例:

- `network/interconnect` プロパティの下の `hostmanaged` プロパティが `true` に設定されています。この設定例では、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアによる自動設定について、ホストの管理対象の状態が有効になっています。

```
-> show

/SP/network/interconnect
  Targets:
Properties:
  hostmanaged = true
  type = USB Ethernet
  ipaddress = 169.254.182.76
  ipnetmask = 255.255.255.0
  spmacaddress = 02:21:28:57:47:16
  hostmacaddress = 02:21:28:57:47:17
Commands:
  cd
  set
  show
```

- network/interconnect プロパティの下での hostmanaged プロパティが false に設定されています。この設定例では、ホストの管理対象の状態が無効になっており、ローカル相互接続インタフェース上の ILOM SP およびホスト OS の接続ポイントを手動で設定できます。

```
-> show

/SP/network/interconnect
  Targets:
Properties:
  hostmanaged = false
  state = enabled
  type = USB Ethernet
  ipaddress = 169.254.182.76
  ipnetmask = 255.255.255.0
  spmacaddress = 02:21:28:57:47:16
  hostmacaddress = 02:21:28:57:47:17
  pendingipaddress = 169.254.182.76
  pendingipnetmask = 255.255.255.0
  commitpending = (Cannot show property)
Commands:
  cd
  set
  show
```

4. ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェース上の接続ポイントに割り当てる設定を行う場合、次のいずれかの方法を選択できます。

- hostmanaged プロパティを true に設定して、ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェース上の各接続ポイントに自動的に割り当てます。

```
-> set hostmanaged=true
```

hostmanaged プロパティを true に設定する場合は、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 (以降) ソフトウェアをサーバーにインストールし、インストールのデフォルトを受け入れて、ローカル ILOM 相互接続を有効にする必要もあります。詳細については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』(821-2181) のローカル ILOM 相互接続の設定に関する節を参照してください。

または

- hostmanaged プロパティを false に設定して、ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェース上の各接続ポイントに手動で割り当てます。

```
-> set hostmanaged=false
```

hostmanaged プロパティを false に設定する場合は、次の /network/interconnect プロパティの値も手動で設定する必要があります。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
state	set state=enabled	ILOM SP とホスト OS の間のローカル相互接続インタフェースを手動で有効にするには、set state=enabled と入力します。 デフォルトでは、interconnect ターゲットの state プロパティは disabled に設定されています。
pendingipaddress	set pendingipaddress=169.254.182.76	デフォルトでは、ローカル相互接続インタフェース上の ILOM SP 接続ポイントに対して、ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスが ILOM から提供されます。 この IPv4 アドレスがホスト OS 上で競合しない場合は、このデフォルトの IPv4 アドレス (169.254.182.76) を変更しないでください。 デフォルトの IPv4 アドレスを変更するには、set pendingipaddress= コマンドに続いて、ローカル相互接続インタフェース上の ILOM SP 接続ポイントに割り当てる内部 IPv4 アドレスを入力します。
pendingipnetmask	set pendingipnetmask=255.255.255.0	デフォルトでは、ローカル相互接続インタフェース上の ILOM SP 接続ポイントに対して、IPv4 ネットマスクアドレスが ILOM から提供されます。 このアドレスがネットワーク環境で競合しない場合は、このデフォルトの IPv4 ネットマスク (255.255.255.0) アドレスを変更しないでください。 デフォルトのネットマスクアドレスを変更するには、set pendingipnetmask= コマンドに続いて、ローカル相互接続インタフェース上の ILOM SP 接続ポイントに割り当てる内部 IPv4 ネットマスクを入力します。
commitpending	set commitpending=<value>	network/interconnect ターゲットの pendingipaddress と pendingipnetmask の両方に対する変更は、確定されるまで保留中とみなされます。 変更を確定するには、次のように入力します。 set commitpending=true 変更をキャンセルするには、次のように入力します。 set commitpending=false

手動のローカルホスト相互接続の設定プロパティに必要な値の詳細を参照するには、help を入力します。例:

```
-> help hostmanaged
-> help state
-> help pendingipaddresss
-> help pendingipnetmask
-> help commitpending
```

読み取り専用プロパティの詳細を参照するには、次のように入力します。

```
-> help type  
-> help ipaddress  
-> help ipnetmask  
-> help spmacaddress  
-> help hostmacaddress
```

Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 ソフトウェアを使用せずに、ローカル相互接続インタフェースを ILOM で手動で設定するように選択した場合、ホストオペレーティングシステムで追加設定をいくつか実行する必要があります。このホスト OS での追加設定に関する一般的な詳細については、[247 ページの「ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動設定ガイドライン」](#)を参照してください。

---

**注** – Oracle Hardware Management Pack ソフトウェアでローカル相互接続インタフェース上の接続ポイントが自動的に設定されないようにするには、hostmanaged プロパティの値を False に設定する必要があります。ILOM SP とホスト OS の間でローカル相互接続インタフェースが使用されないようにするには、state プロパティの値を disabled に設定し、hostmanaged プロパティの値を False に設定する必要があります。

---



## 第4章

# ユーザーアカウントの管理

---

項目	
説明	リンク
ユーザーアカウントを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">57 ページの「シングルサインオンを設定する」</a></li><li>• <a href="#">58 ページの「ユーザーアカウントを追加する」</a></li><li>• <a href="#">58 ページの「ユーザーアカウントのパスワードを変更する」</a></li><li>• <a href="#">59 ページの「ユーザーアカウントに役割を割り当てる」</a></li><li>• <a href="#">59 ページの「ユーザーアカウントを削除する」</a></li><li>• <a href="#">60 ページの「個別のユーザーアカウントを表示する」</a></li><li>• <a href="#">60 ページの「ユーザーアカウントのリストを表示する」</a></li><li>• <a href="#">61 ページの「ユーザーセッションのリストを表示する」</a></li><li>• <a href="#">61 ページの「個別のユーザーセッションを表示する」</a></li></ul>
SSH ユーザー鍵を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">63 ページの「SSH 鍵を追加する」</a></li><li>• <a href="#">63 ページの「SSH 鍵を削除する」</a></li></ul>
Active Directory を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">64 ページの「Active Directory の strictcertmode を有効にする」</a></li><li>• <a href="#">65 ページの「Active Directory の certstatus をチェックする」</a></li><li>• <a href="#">67 ページの「Active Directory 証明書を削除する」</a></li><li>• <a href="#">67 ページの「Active Directory 設定を表示および構成する」</a></li><li>• <a href="#">75 ページの「Active Directory の認証と承認のトラブルシューティング」</a></li></ul>
LDAP を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">76 ページの「LDAP サーバーを設定する」</a></li><li>• <a href="#">77 ページの「LDAP 用の ILOM の設定」</a></li></ul>

---

## 項目

説明	リンク
LDAP/SSL を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>78 ページの「LDAP/SSL の stritcertmode を有効にする」</li><li>79 ページの「LDAP/SSL の certstatus をチェックする」</li><li>80 ページの「LDAP/SSL 証明書を削除する」</li><li>80 ページの「LDAP/SSL 設定を表示および構成する」</li><li>86 ページの「LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング」</li></ul>
RADIUS を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>88 ページの「RADIUS を設定する」</li></ul>

## 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
<ul style="list-style-type: none"><li>概念</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ユーザーアカウントの管理</li><li>ユーザーアカウントの管理のガイドライン</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
<ul style="list-style-type: none"><li>Web インタフェース</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ユーザーアカウントの管理</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)
<ul style="list-style-type: none"><li>IPMI ホストおよび SNMP ホスト</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ユーザーアカウントの管理</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコルリファレンスガイド』(820-7379)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

**注** – この章の構文例では、/SP/ で始まるターゲットを使用しますが、使用している Oracle サーバプラットフォームによっては、/CMM/ で始まるターゲットに置き換わる場合があります。サブターゲットは、すべての Oracle Sun サーバプラットフォームで共通です。



# ユーザーアカウントの設定

## 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ユーザーアカウントを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>57 ページの「シングルサインオンを設定する」</li><li>58 ページの「ユーザーアカウントを追加する」</li><li>59 ページの「ユーザーアカウントに役割を割り当てる」</li><li>59 ページの「ユーザーアカウントを削除する」</li><li>60 ページの「ユーザーアカウントのリストを表示する」</li><li>61 ページの「個別のユーザーセッションを表示する」</li><li>61 ページの「ユーザーセッションのリストを表示する」</li><li>61 ページの「個別のユーザーセッションを表示する」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

## 始める前に

- シングルサインオンを無効または有効にするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- ユーザーアカウントプロパティを追加もしくは編集する、または役割を割り当てるには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ シングルサインオンを設定する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. シングルサインオンを無効または有効にするには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/services/sso state=disabled|enabled
```

## ▼ ユーザーアカウントを追加する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ローカルユーザーアカウントを追加するには、次のコマンドを入力します。

```
-> create /SP/users/username password=password
```

例:

```
-> create /SP/users/user5
Creating user...
Enter new password: *****
Enter new password again: *****
Created /SP/users/user5
```

---

注 – ユーザーアカウントを追加する場合、役割やパスワードのプロパティを指定する必要はありません。役割はデフォルトで Read Only (o) に設定され、CLI はパスワードの入力と確認を要求します。

---

## ▼ ユーザーアカウントのパスワードを変更する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ユーザーアカウントのパスワードを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/users/user password
```

例:

```
-> set /SP/users/user5 password
Enter new password: *****
Enter new password again: *****
```

## ▼ ユーザーアカウントに役割を割り当てる

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ユーザーアカウントに役割を割り当てるには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/users/<username> password=<password> role=  
<administrator|operator|a|u|c|r|o|s>
```

例:

```
-> set /SP/users/user5 role=auc  
Set 'role' to 'auc' -> show /SP/users/user5  
/SP/users/user5  
Targets:  
ssh  
  
Properties:  
role = auco  
password = *****  
  
Commands:  
cd  
set  
show
```

## ▼ ユーザーアカウントを削除する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ローカルユーザーアカウントを削除するには、次のコマンドを入力します。

```
-> delete /SP/users/username
```

例:

```
-> delete /SP/users/user5
```

3. プロンプトに対し、削除する場合は y、取り消す場合は n を入力します。

例:

```
Are you sure you want to delete /SP/users/user5 (y/n)? y
```

```
Deleted /SP/users/user5
```

## ▼ 個別のユーザーアカウントを表示する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 1 つの特定のユーザーアカウントに関する情報を表示するには、次のコマンドを入力します。

-> `show /SP/users/username`

例:

```
-> show /SP/users/user1

/SP/users/user1
  Targets:
    ssh

  Properties:
    role = aucros
    password = *****

  Commands:
    cd
    set
    show
```

## ▼ ユーザーアカウントのリストを表示する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. すべてのローカルユーザーアカウントに関する情報を表示するには、次のコマンドを入力します。

-> `show /SP/users`

例:

```
-> show /SP/users

/SP/users
  Targets:
    user1
    user2
    user3
    user4
```

## ▼ ユーザーセッションのリストを表示する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. すべてのローカルユーザーセッションに関する情報を表示するには、次のコマンドを入力します。

→ `show /SP/sessions`

例:

```
-> show /SP/sessions

/SP/sessions
Targets:
    12 (current)

Properties:

Commands:
    cd
    show
```

## ▼ 個別のユーザーセッションを表示する

---

注 – 個別のユーザーの役割を表示するには、ILOM 3.0.4 またはそれ以降のバージョンの ILOM を使用している必要があります。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 個別のユーザーセッションに関する情報を表示するには、次のコマンドを入力します。

→ `show /SP/sessions/session_number`

例:

```
-> show /SP/sessions/12

/SP/sessions/12
Targets:

Properties:
  username = user4
  role = aucro
  starttime = Mon Apr 13 06:25:19 2009
  type = shell
  mode = normal

Commands:
  cd
  show
```

---

## SSH ユーザー鍵の設定

項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
SSH ユーザー鍵を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>63 ページの「SSH 鍵を追加する」</li><li>63 ページの「SSH 鍵を削除する」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

### 始める前に

- 他のユーザーの SSH 鍵を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。ただし、自分自身の SSH 鍵は Read-Only (o) の役割の権限で設定することができます。

SSH 鍵を使用すると、パスワード認証を自動化できます。この項の手順に従い、SSH 鍵を追加および削除します。

## ▼ SSH 鍵を追加する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ユーザーの SSH 鍵があるディレクトリに移動するには、次のように入力します。  
-> `cd /SP/users/user1/ssh/keys/1`
3. 鍵をユーザーのアカウントに追加するには、次のように入力します。  
-> `set load_uri=`  
`transfer_method://username:password@ipaddress_or_hostname/directorypath/filename`  
各エントリの内容は次のとおりです。
  - `transfer_method` には、`tftp`、`ftp`、`sftp`、`scp`、`http`、または `https` を指定できます。
  - `username` は、リモートシステムでのユーザーアカウントの名前です (`username` は、`scp`、`sftp`、および `ftp` では必須です。 `username` は `tftp` では使用されず、`http` および `https` では省略可能です)。
  - `password` は、リモートシステムでのユーザーアカウントのパスワードです (`password` は、`scp`、`sftp`、および `ftp` では必須です。 `password` は `tftp` では使用されず、`http` および `https` では省略可能です)。
  - `ipaddress_or_hostname` は、リモートシステムの IP アドレスまたはホスト名です。
  - `directorypath` は、リモートシステム上の SSH 鍵の場所です。
  - `filename` は、SSH 鍵ファイルに割り当てられた名前です。例:

```
-> set load_uri=scp://adminuser:userpswd@1.2.3.4/keys/sshkey_1.pub
Set 'load_uri' to 'scp://adminuser:userpswd@1.2.3.4/keys/sshkey_1.pub'
```

## ▼ SSH 鍵を削除する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ユーザーの SSH 鍵があるディレクトリに移動するには、次のように入力します。  
-> `cd /SP/users/user1/ssh/keys/1`
3. ユーザーのアカウントから鍵を削除するには、次のように入力します。  
-> `set clear_action=true`  
次の確認プロンプトが表示されます。  
Are you sure you want to clear /SP/users/user1/ssh/keys/1  
(y/n)?
4. `y` と入力します。  
SSH 鍵が削除され、削除を確認する次のメッセージが表示されます。  
Set 'clear\_action' to 'true'

# Active Directory の設定

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Active Directory を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">64 ページの「Active Directory の strictcertmode を有効にする」</a></li><li>• <a href="#">65 ページの「Active Directory の certstatus をチェックする」</a></li><li>• <a href="#">67 ページの「Active Directory 証明書を削除する」</a></li><li>• <a href="#">67 ページの「Active Directory 設定を表示および構成する」</a></li><li>• <a href="#">75 ページの「Active Directory の認証と承認のトラブルシューティング」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li><li>• SPARC システムサーバー</li><li>• CMM</li></ul>

## 始める前に

- Active Directory を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ Active Directory の strictcertmode を有効にする

注 – デフォルトでは、strictcertmode は無効になっています。この変数が無効になっている場合、チャンネルはセキュリティ保護されますが、証明書に対して限定的な検査が実行されます。strictcertmode が有効になっている場合は、サーバーの証明書が提供されたときに証明書の署名を検証できるように、サーバーの証明書がサーバーにすでにアップロードされている必要があります。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 次のパスを入力して、Active Directory の証明書設定にアクセスします。  
->cd /SP/clients/activedirectory/cert



3. 証明書をロードするには、次のように入力します。

```
-> set load_uri=tftp://IP address/file-path/filename
```

---

注 – TFTP、FTP、または SCP を使用して証明書をロードできます。あるいは、CLI で `load -source` コマンドを使用して、Active Directory 用の SSL 証明書をどこからでもロードできます。例:

```
-> load -source URI_to_SSL_certificate target
```

4. `strictcertmode` を使用可能にするには、次のように入力します。

```
-> set strictcertmode=enabled
```

---

注 – `strictcertmode` が無効の場合でも、データは常に保護されます。

---

## ▼ Active Directory の `certstatus` をチェックする

---

注 – `certstatus` は、現在の証明書の状態を反映する操作変数です。 `strictcertmode` が無効になっている場合は、どちらも存在する必要はありません。ただし、 `strictcertmode` が有効になっている場合は、証明書を読み込む必要があります。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。

2. 証明書の状態を確認するには、次のように入力します。

-> **show /SP/clients/activedirectory/cert**

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory/cert
Targets:

Properties:
  certstatus = certificate present
  clear_action = (none)
  issuer = /DC=com/DC=oracle/DC=east/DC=sales/CN=CAforActiveDirectory
  load_uri = (none)
  serial_number = 08:f3:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
  subject = /DC=com/DC=oracle/DC=east/DC=sales/CN=CAforActiveDirectory
  valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
  valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
  version = 3 (0x02)

Commands:
  cd
  load
  reset
  set
  show
```

## ▼ Active Directory 証明書を削除する

---

注 – 認証サーバー証明書は、`strictcertmode` が無効な場合にのみ削除できます。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。  
`-> cd /SP/clients/activedirectory/cert`
3. 証明書を削除するには、次のいずれかのコマンドを入力します。
  - `-> set clear_action=true`
  - `->reset <target>`例:  
`-> reset /SP/clients/activedirectory/cert`
4. 画面に表示されるプロンプトに対して `y` または `n` を入力し、証明書を削除するかどうかを確定します。  
アップロードされた既存の証明書ファイルは削除されます。

## ▼ Active Directory 設定を表示および構成する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. `show` および `set` コマンドを使用して、Active Directory プロパティを表示および変更します。
  - `admingroups` ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。  
`-> show /SP/clients/activedirectory/admingroups/n`  
`n` には、1 から 5 を指定できます。例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory/admingroups/1
/SP/clients/activedirectory/admingroups/1
Targets:
Properties: name = CN=SpSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,
DC=east,DC=oracle,DC=com
```

次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/clients/activedirectory/admingroups/1/ name=CN=
spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,
DC=com'
```

- opergroups ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/opergroups/1
```

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory/opergroups/1
/SP/clients/activedirectory/opergroups/1
Targets:
Properties: name = CN=SpSuperOper,OU=Groups,DC=sales,
DC=east,DC=oracle,DC=com
```

次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/clients/activedirectory/opergroups/1 name=CN=
spSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com'
```

- customgroups ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/customgroups/1
```

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory/customgroups/1
/SP/clients/activedirectory/customgroups/1
Targets:

Properties:
  name = custom_group_1
  roles = aucro
```

次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/clients/activedirectory/customgroups/1 name=CN=
spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com'
-> set /SP/clients/activedirectory/customgroups/1 roles=au
Set 'roles' to 'au'
```

- userdomains ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/userdomains/1
```

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory/userdomains/1
/SP/clients/activedirectory/userdomains/1
Targets:

Properties:
  domain= <USERNAME>@sales.example.oracle.com
```

次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/clients/activedirectory/userdomains/1 domain=
<USERNAME>@sales.example.oracle.com
Set 'domain' to '<username>@sales.example.oracle.com'
```

---

注 - 上記の例で、<USERNAME> は、ユーザーのログイン名に置き換えられます。認証時に、ユーザーのログイン名が <USERNAME> に置き換わります。名前は、完全修飾識別名 (FQDN)、domain\name (NT)、または単純名をとることができます。

---

- alternateservers ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1
```

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1
/SP/clients/activedirectory/alternateservers/1
  Targets:
    cert

  Properties:
    address = 10.8.168.99
    port = 0
```

---

注 - address プロパティには、IP アドレスまたは DNS (ホスト名) のいずれかを指定できます。DNS を使用する場合は、DNS が有効である必要があります。DNS の有効化の詳細については、[40 ページの「DNS の設定を表示および構成する」](#)を参照してください。

---

次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1 port=636
```

また、show コマンドを使用して、代替サーバーの証明書の情報も表示できます。

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1/cert
/SP/clients/activedirectory/alternateservers/1/cert
Targets:

Properties:
  certstatus = certificate present
  clear_action = (none)
  issuer = /DC=com/DC=oracle/DC=east/DC=sales/CN CAforActiveDirectory
  load_uri = (none)
  serial_number = 08:f3:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
  subject = /DC=com/DC=oracle/DC=east/DC=sales/CN=CAforActiveDirectory
  valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
  valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
  version = 3 (0x02)
```

代替サーバーの証明書をコピーするには、次のように入力します。

```
-> cd /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1
-> set load_uri=
<tftp|ftp|scp>:[//<username:password>]@//<ipAddress|HostName>/<filePath>/
<fileName>
```

次は、tftp を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set load_uri=tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert
Set 'load_uri' to 'tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert'
```

---

注 – TFTP 転送方法では、ユーザー名とパスワードは不要です。

---

次は、ftp を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set load_uri=
ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert
Set 'load_uri' to
'ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert'
```

次は、scp を使用してコピーした証明書の例です。

```
> set
load_uri=
scp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/home/dc150698/8275_put/cert
.cert
```

代替サーバーの証明書を削除するには、次のように入力します。

```
-> cd /SP/clients/activedirectory/alternateservers/1
-> set clear_action=true
```

例:

```
-> set clear_action=true
Are you sure you want to clear /SP/clients/activedirectory/cert
(y/n)? y
Set 'clear_action' to 'true'
```

- dnslocatorqueries ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory/dnslocatorqueries/1
```

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory/dnslocatorqueries/1
/SP/clients/activedirectory/dnslocatorqueries/1
Targets:

Properties:
    service = _ldap._tcp.gc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:3269>

Commands:
    cd
    set
    show
```

---

**注** – DNS ロケータクエリーが機能するには、DNS および DNS ロケータモードが有効である必要があります。DNS の有効化の詳細については、[40 ページの「DNS の設定を表示および構成する」](#)を参照してください。

---

DNS ロケータサービスクエリーは、名前付き DNS サービスを特定します。通常、ポート ID はレコードに含まれますが、<PORT:636> 形式を使用してオーバーライドできます。また、認証されるドメイン固有の名前付きサービスは、<DOMAIN> 置換マーカーを使用して指定できます。

次に、set コマンドを使用して、dnslocatorqueries ターゲットのプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/clients/activedirectory/dnslocatorqueries/1 service=<string>
```



- expsearchmode プロパティを表示および変更するには、次のように入力します。

---

注 - expsearchmode プロパティを表示および設定するには、ILOM 3.0.4 以降を使用している必要があります。

---

```
-> show /SP/clients/activedirectory
```

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory

/SP/clients/activedirectory
  Targets:
    admingroups
    alternateservers
    cert
    customgroups
    dnslocatorqueries
    opergroups
    userdomains
  Properties:
    address = 0.0.0.0
    defaultrole = (none)
    dnslocatormode = disabled
    expsearchmode = disabled
    logdetail = none
    port = 0
    state = disabled
    strictcertmode = disabled
    strictcredentialerrormode = disabled
    timeout = 4

  Commands:
    cd
    set
    show
```

次に、set コマンドを使用して、プロパティを有効または無効にします。

例:

```
-> set /SP/clients/activedirectory expsearchmode=enabled
Set 'expsearchmode' to 'enabled'
```

- `strictcredentialerrormode` プロパティを表示および変更するには、次のように入力します。

---

注 – ILOM 3.0.10 以降、`strictcredentialalerrormode` を使用してユーザー資格エラーの処理方法を制御できるようになりました。このモードが有効な場合、どのサーバーから報告された資格エラーでも、これらのユーザー資格は無効になります。このモードが無効な場合 (デフォルト設定)、認証のため他のサーバーへこれらのユーザー資格を提供することができます。

---

```
-> show /SP/clients/activedirectory
```

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory

/SP/clients/activedirectory
Targets:
  admingroups
  alternateservers
  cert
  customgroups
  dnslocatorqueries
  opergroups
  userdomains

Properties:
  address = 0.0.0.0
  defaultrole = (none)
  dnslocatormode = disabled
  expsearchmode = disabled
  logdetail = none
  port = 0
  state = disabled
  strictcertmode = disabled
  strictcredentialerrormode = disabled
  timeout = 4

Commands:
  cd
  set
  show
```

次に、set コマンドを使用して、プロパティを有効または無効にします。

例:

```
-> set /SP/clients/activedirectory strictcredentialerrormode=
enabled
Set 'strictcredentialerrormode' to 'enabled'
```

## ▼ Active Directory の認証と承認のトラブルシューティング

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。

2. 次のコマンドを入力します。

```
-> cd /SP/clients/activedirectory
/SP/clients/activedirectory

-> set logdetail=trace
Set 'logdetail' to 'trace'
```

3. ILOM CLI をログアウトしてもう一度ログインし、次のコマンドを入力してもう一度承認を行います。

```
-> show /SP/logs/event/list Class==(ActDir) Type==(Log) Severity==(Trace)
```

例:

```
-> show /SP/logs/event/list Class==(ActDir) Type==(Log)

ID      Date/Time                Class      Type      Severity
-----  -----
26      Thu Jul 10 09:40:46 2008 ActDir     Log       minor
      (ActDir) authentication status: auth-OK
25      Thu Jul 10 09:40:46 2008 ActDir     Log       minor
      (ActDir) server-authenticate: auth-success idx 100/0 dns-
server 10.8.143          .231
24      Thu Jul 10 09:40:46 2008 ActDir     Log       debug
      (ActDir) custRoles
23      Thu Jul 10 09:40:46 2008 ActDir     Log       debug
      (ActDir) role-name administrator
```

イベントログの詳細の設定については、100 ページの「ILOM イベントログを表示およびクリアする」を参照してください。

# LDAP の設定

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
LDAP を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>76 ページの「LDAP サーバーを設定する」</li><li>77 ページの「LDAP 用の ILOM の設定」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

## 始める前に

- LDAP を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ LDAP サーバーを設定する

- ILOM に対して認証を行うすべてのユーザーが、「crypt」形式か、または一般的には「MD5 crypt」と呼ばれる、crypt の GNU 拡張で保存されたパスワードを使用していることを確認します。

ILOM は、これらの 2 種類の crypt 形式で保存されたパスワードによる LDAP 認証のみをサポートしています。

例:

```
userPassword: {CRYPT}ajCa2He4PJhNo
```

または

```
userPassword: {CRYPT}$1$pzKng1$du1Bf0NWBjh9t3FbUgf46
```

- オブジェクトクラス `posixAccount` および `shadowAccount` を追加し、このスキーマ (RFC 2307) に必要なプロパティ値を入力します。

必須プロパティ	説明
uid	ILOM にログインするためのユーザー名
uidNumber	任意の固有の数字
gidNumber	任意の固有の数字

必須プロパティ	説明
userPassword	パスワード
homeDirectory	任意の値 (このプロパティは、ILOM では無視される)
loginShell	任意の値 (このプロパティは、ILOM では無視される)

- LDAP サーバーを設定して、ILOM のユーザーアカウントにアクセスできるようにします。

LDAP サーバーが匿名バインドを許可するようにするか、または LDAP サーバーにプロキシユーザーを作成します。LDAP サーバーは、ILOM により認証されるすべてのユーザーアカウントに読み取り専用アクセスができます。

詳細は、LDAP サーバーのマニュアルを参照してください。

## ▼ LDAP 用の ILOM の設定

- ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- プロキシユーザー名とパスワードを入力します。次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldap binddn="cn=proxyuser, ou=people, ou=sales, dc=oracle, dc=com" bindpw=password
```

- LDAP サーバーの IP アドレスを入力します。次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldap address=ldapipaddress |DNS name
```

---

注 – DNS 名を使用する場合、DNS は構成済みで機能している必要があります。

---

- LDAP サーバーとの通信に使用するポートを割り当てます。デフォルトのポートは 389 です。次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldap port=ldapport
```

- ユーザーとグループを含む LDAP ツリー分岐の識別名を入力します。たとえば、次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldap searchbase="ou=people, ou=sales, dc=oracle, dc=com"
```

これは、ユーザー認証を検索する LDAP ツリーの場所です。

- LDAP サービスの状態を enabled に設定します。次のように入力します。

```
-> set /SP/clients/ldap state=enabled
```

7. LDAP 認証の動作を確認するには、LDAP ユーザー名とパスワードを使用して、ILOM にログインします。

---

注 – ILOM は、LDAP ユーザーの前にローカルユーザーを検索します。LDAP ユーザー名がローカルユーザーとして存在する場合は、ILOM は認証にローカルアカウントを使用します。

---

---

## LDAP/SSL の設定

### 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
LDAP/SSL を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>78 ページの「LDAP/SSL の <code>strictcertmode</code> を有効にする」</li><li>79 ページの「LDAP/SSL の <code>certstatus</code> をチェックする」</li><li>80 ページの「LDAP/SSL 証明書を削除する」</li><li>80 ページの「LDAP/SSL 設定を表示および構成する」</li><li>86 ページの「LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

## 始める前に

- LDAP/SSL を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ LDAP/SSL の `strictcertmode` を有効にする

---

注 – デフォルトでは、`strictcertmode` は無効になっています。この変数が無効になっている場合、チャンネルはセキュリティ保護されますが、証明書に対して限定的な検査が実行されます。`strictcertmode` が有効になっている場合は、サーバーの証明書が提供されたときに証明書の署名を検証できるように、サーバーの証明書がサーバーにすでにアップロードされている必要があります。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 次のパスを入力して、LDAP/SSL の証明書の設定にアクセスします。  
-> `cd /SP/clients/ldapssl/cert`
3. 証明書をロードするには、次のように入力します。  
-> `set load_uri=tftp://IP address/file-path/filename`

---

注 – TFTP、FTP、または SCP を使用して証明書をロードできます。

---

4. `strictcertmode` を使用可能にするには、次のように入力します。  
-> `set strictcertmode=enabled`

## ▼ LDAP/SSL の certstatus をチェックする

---

注 – `certstatus` が無効になっている場合、`strictcertmode` は、証明書の現在の状態を反映する操作変数です。ただし、`strictcertmode` が有効になっている場合は、証明書を読み込む必要があります。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 証明書の状態を確認するには、次のように入力します。  
-> `show /SP/clients/ldapssl/cert`

例:

```
-> show /SP/clients/ldapssl/cert

Targets:

Properties:
    certstatus = certificate present
    clear_action = (none)
issuer = /C=US/O=Entrust PKI Demonstration Cerificates
    load_uri = (none)
    serial_number = 08:f23:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
    subject = /C=US/O=Entrust PKI Demonstration Cerificates/OU=Entrust/Web
Connector/OU=No Liability as per http://freecerts.entrust
    valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
    valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
    version = 3 (0x02)
```

## ▼ LDAP/SSL 証明書を削除する

---

注 – 認証サーバー証明書は、`strictcertmode` が無効のときにのみ削除できます。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。  
`-> cd /SP/clients/ldapssl/cert`
3. 証明書を削除するには、次のように入力します。  
`-> set clear_action=true`
4. 画面に表示されるプロンプトに対して `y` (yes) または `n` (no) を入力するし、証明書を削除するかどうかを確定します。  
アップロードされた既存の証明書ファイルは削除されます。

## ▼ LDAP/SSL 設定を表示および構成する

---

注 – `optionalUserMapping` ターゲットを表示および構成するには、ILOM 3.0.4 またそれ以降のバージョンの ILOM を使用している必要があります。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. `show` コマンドおよび `set` コマンドを使用して、プロパティを表示および変更します。
  - `admingroups` ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。  
`-> show /SP/clients/ldapssl/admingroups/n`  
`n` には、1 から 5 を指定できます。  
例:

```
-> show /SP/clients/ldapssl/admingroups/1

/SP/clients/ldapssl/admingroups/1

Targets:

Properties: name = CN=SpSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=
east,DC=oracle,DC=com
```



次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/clients/ldapssl/admingroups/1/ name=CN=
spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,
DC=com'
```

- opergroups ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/opergroups/1
```

例:

```
-> show /SP/clients/ldapssl/opergroups/1

/SP/clients/ldapssl/opergroups/1

Targets:

Properties: name = CN=SpSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=
east,DC=oracle,DC=com
```

次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/clients/ldapssl/opergroups/1 name=CN=spSuperOper,OU=
Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com'
```

- customgroups ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/customgroups/1
```

例:

```
/SP/clients/ldapssl/customgroups/1
Targets:

Properties:
  name = <fully qualified distinguished name only>
  roles = (none)

Commands:
  cd
  set
  show
```

次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/clients/ldapssl/customgroups/1 name=CN=
spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com

Set 'name' to 'CN=spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com'

-> set /SP/clients/ldapssl/customgroups/1 roles=au

Set 'roles' to 'au'
```

- userdomains ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/userdomains/1
```

例:

```
-> show /SP/clients/ldapssl/userdomains/1
Targets:

Properties:
    domain = uid=<USERNAME>,ou=people,dc=oracle,dc=com

Commands:
    cd
    set
    show
```

次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set SP/clients/ldapssl/userdomains1 domain=uid=<USERNAME>,
ou=people,dc=oracle,dc=oracle
```

---

注 - 上記の例で、<USERNAME> は、認証時にユーザーのログイン名に置き換えられます。名前は、完全修飾識別名 (FQDN) の形式をとることができます。

---

- alternateservers ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/alternateservers/1
```

例:

```
-> show /SP/clients/ldapssl/alternateservers/1

/SP/clients/ldapssl/alternateservers/1
Targets:
    cert

Properties:
    address = 10.8.168.99
    port = 0
```

---

注 – 上記の例で、address には、IP アドレスまたは DNS 名のいずれかを指定できます。DNS を使用する場合は、DNS が有効である必要があります。DNS の有効化の詳細については、40 ページの「DNS の設定を表示および構成する」を参照してください。

---

次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set /SP/clients/ldapssl/alternateservers/1 port=636
```

また、show コマンドを使用して、代替サーバーの証明書の情報も表示できます。

例:

```
-> show /SP/clients/ldapssl/alternateservers/1/cert

/SP/clients/ldapssl/alternateservers/1/cert
Targets:

Properties:
    certstatus = certificate present
    clear_action = (none)
issuer = /C=US/O=Entrust PKI Demonstration Certificates
    load_uri = (none)
    serial_number = 08:f23:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
    subject = /C=US/O=Entrust PKI Demonstration Certificates/OU=Entrust/Web
Connector/OU=No Liability as per http://freecerts.entrust
    valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
    valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
    version = 3 (0x02)
```

代替サーバーの証明書をコピーするには、次のように入力します。

```
-> set load_uri=
<tftp|ftp|scp>:[<username:password>]@//<ipAddress|HostName>/<filePath>/
<fileName>
```

次は、tftp を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set load_uri=tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert
Set 'load_uri' to 'tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert'
```

---

注 - TFTP 転送方法では、ユーザー名とパスワードは不要です。

---

次は、tftp を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set load_uri=  
ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert  
Set 'load_uri' to  
'ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert'
```

次は、scp を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set  
load_uri  
scp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/home/dc150698/8275_put/cert.cert
```

代替サーバーの証明書を削除するには、次のように入力します。

```
-> set clear_action=true
```

例:

```
-> set clear_action=true  
Are you sure you want to clear /SP/clients/ldapssl/cert (y/n)? y  
Set 'clear_action' to 'true'
```

- optionalUserMapping ターゲットの情報を表示および変更するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/ldapssl/optionalUserMapping
```

例:

```
-> show

/SP/clients/ldapssl/optionalUserMapping
Targets:

Properties:
  attributeInfo = (&(objectclass=person)(uid=<USERNAME>))
  binddn = cn=Manager,dc=oracle,dc=com
  bindpw = (none)
  searchbase = ou=people,dc=oracle,dc=com
  state = disabled

Commands:
  cd
  set
  show
```

次に、set コマンドを使用してプロパティを変更します。

例:

```
-> set state=enabled
Set 'state' to 'enabled'
```

## ▼ LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
-> cd /SP/clients/ldapssl
/SP/clients/ldapssl

-> set logdetail=trace
Set 'logdetail' to 'trace'
```

3. ILOM CLI をログアウトしてもう一度ログインし、次のように入力してもう一度承認を行います。

```
-> show /SP/logs/event/list Class==(ldapssl) Type==(Log) Severity=
=(Trace)
```

例:

```
-> show /SP/logs/event/list Class==(ldapssl) Type==(Log)

ID      Date/Time                Class      Type      Severity
-----
3155    Thu Nov 13 06:21:00 2008  LdapSsl   Log       critical
        (LdapSSL) authentication status: auth-ERROR
3154    Thu Nov 13 06:21:00 2008  LdapSsl   Log       major
        (LdapSSL) server-authenticate: auth-error idx 0 cfg-server
        10.8.xxx.xxx
3153    Thu Nov 13 06:21:00 2008  LdapSsl   Log       major
        (LdapSSL) ServerUserAuth - Error 0, error binding user to
        ActiveDirectory server
```

イベントログの詳細の設定については、100 ページの「ILOM イベントログを表示およびクリアする」を参照してください。

---

## RADIUS の設定

項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
RADIUS を設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>88 ページの「RADIUS を設定する」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

### 始める前に

- RADIUS を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ RADIUS を設定する

---

注 – 10 個を超えるローカルユーザーアカウントに ILOM アクセスを提供する必要がある場合は、RADIUS サーバーを適切に設定したあとで、RADIUS 認証を使用するように ILOM を設定できます。

---

1. 使用している RADIUS 環境に関する適切な情報を収集します。
2. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインし、`cd` コマンドを使用して `/SP/clients/radius` に移動します。  
たとえば、次のように入力します。  
`cd /SP/clients/radius`
3. `show` コマンドを使用して、`radius` のプロパティを表示します。  
たとえば、次のように入力します。  
`-> show /SP/clients/radius`

```
-> show /SP/clients/radius

/SP/clients/radius
Targets:

Properties:
  defaultrole = Operator
  address = 129.144.36.142
  port = 1812
  secret = (none)
  state = enabled
Commands:
  cd
  set
  show
```



4. set コマンドを使用して、表 4-1 で説明されている radius プロパティを構成します。

構文:

```
set /SP/clients/radius [defaultrole=
[Administrator|Operator|a|u|c|r|s] address=radius_server_IPaddress
port=port# secret=radius_secret state=[enabled|disabled]]
```

例:

```
-> set /SP/clients/radius state=enabled address=10.8.145.77
Set 'state' to 'enabled'
Set 'address' to '10.8.145.77'
```

表 4-1 Radius プロパティの説明

プロパティ (CLI)	デフォルト値	説明
state	Disabled	Enabled   Disabled RADIUS クライアントを有効にするか無効にするかを指定します。
defaultrole a u c r s Administrator  Operator	Operator	Administrator   Operator   Advanced Roles 認証されたすべての RADIUS ユーザーに付与されるアクセスの役割。このプロパティでは、旧バージョンの Administrator 役割や Operator 役割、または個々の役割 ID 「a」、「u」、「c」、「r」、「o」、「s」の任意の組み合わせがサポートされます。たとえば、aucros と指定した場合、a=Admin、u=User Management、c=Console、r=Reset and Host Control、s=Service です。
ipaddress	0.0.0.0	RADIUS サーバーの IP アドレスまたは DNS 名。DNS 名を使用する場合は、DNS が設定され機能していなければなりません。
port	1812	RADIUS サーバーとの通信に使用するポート番号を指定します。デフォルトのポートは 1812 です。
secret	(none)	機密データを保護しクライアントとサーバーの相互認識を可能にするために使われる共有シークレットを指定します。



## 第5章

# システムコンポーネントの管理

---

### 項目

説明	リンク
システムコンポーネントを管理する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">92 ページの「コンポーネント情報を表示する」</a></li><li>• <a href="#">93 ページの「コンポーネントを取り外す準備をする」</a></li><li>• <a href="#">94 ページの「コンポーネントをサービスに復帰させる」</a></li><li>• <a href="#">94 ページの「コンポーネントを有効または無効にする」</a></li></ul>

---

### 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• 障害管理について	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』 (820-7370)
• Web インタフェース	• システムコンポーネントの管理	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』 (820-7373)
• IPMI ホストおよび SNMP ホスト	• インベントリとコンポーネントの管理	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコルリファレンスガイド』 (820-7379)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

---

注 – この章の構文例では、/SP/ で始まるターゲットを使用しますが、使用しているサーバープラットフォームによっては、/CMM/ で始まるターゲットに置き換わる場合があります。サブターゲットは、すべての Oracle Sun サーバープラットフォームで共通です。

---

# コンポーネント情報の表示およびシステムコンポーネントの管理

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
システムコンポーネントを管理する	<ul style="list-style-type: none"><li>93 ページの「コンポーネントを取り外す準備をする」</li><li>94 ページの「コンポーネントをサービスに復帰させる」</li><li>94 ページの「コンポーネントを有効または無効にする」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

## 始める前に

- システムコンポーネントを管理するには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ コンポーネント情報を表示する

次の手順に従って、コンポーネント情報を表示します。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. プロンプトで、次のように入力します。

```
-> show component_name type
```

例:

```
-> show /SYS/MB type
Properties:
  type = Motherboard
Commands:
  show
```

インベントリ情報を表示するプロパティのリストを次に示します。表示できるプロパティは、使用するターゲットの種類によって異なります。

- fru\_part\_number
- fru\_manufacturer

- fru\_serial\_number
- fru\_name
- fru\_description
- fru\_version
- chassis\_serial\_number
- chassis\_part\_number
- product\_name
- product\_serial\_number
- product\_part\_number
- customer\_fru\_data

## ▼ コンポーネントを取り外す準備をする

次の手順に従って、コンポーネントを取り外す準備をします。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ILOM コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> set target prepare_to_remove_action=true
```

例:

```
-> set /CH/RFM0 prepare_to_remove_action=true
Set 'prepare_to_remove_action' to 'true'
```

コンポーネントを取り外す準備ができれば、物理的に取り外せるようになっているかどうかを確認できます。

3. ILOM コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> show target prepare_to_remove_status
```

例:

```
-> show /CH/RFM0 prepare_to_remove_status
Properties:
  prepare_to_remove_status = Ready|NotReady
Commands:
  cd
  set
  show
  start
  stop
```

この例の Ready|NotReady 文は、デバイスを取り外す準備ができたかどうかを示します。

## ▼ コンポーネントをサービスに復帰させる

次の手順に従って、コンポーネントをサービスに復帰させます。

---

注 – コンポーネントを取り外す準備が完了してから、この操作を取り消す場合は、リモートで実行できます。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ILOM コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> set target return_to_service_action=true
```

例:

```
-> set /CH/RFM0 return_to_service_action=true
Set 'return_to_service_action' to 'true'
```

## ▼ コンポーネントを有効または無効にする

次の手順に従って、コンポーネントを有効または無効にします。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ILOM コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> set <target> component_state=enabled|disabled
```

例:

```
-> set /SYS/MB/CMP0/P0/C0 component_state=enabled
Set 'component_state' to 'enabled'
```

## 第6章

# システムコンポーネントの監視

---

項目	
説明	リンク
LED とシステムインジケータを表示および設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">97 ページの「センサー測定値を表示する」</a></li><li>• <a href="#">98 ページの「システムインジケータを設定する」</a></li></ul>
クロックとタイムゾーンを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">99 ページの「クロック設定を構成する」</a></li></ul>
イベントログをフィルタリング、表示、およびクリアする	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">100 ページの「イベントログ出力をフィルタリングする」</a></li><li>• <a href="#">100 ページの「ILOM イベントログを表示およびクリアする」</a></li></ul>
リモートの syslog 受信 IP アドレスを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">103 ページの「リモートの syslog 受信 IP アドレスを設定する」</a></li></ul>
障害を表示またはクリアする	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">104 ページの「CLI を使用して障害を表示およびクリアする」</a></li></ul>
SP コンソールの履歴ログを表示する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">106 ページの「ILOM CLI を使用して SP コンソールの履歴ログエントリを表示および管理する」</a></li></ul>

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• システム監視と警告管理	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
• Web インタフェース	• システムセンサー、インジケータ、および ILOM イベントログの監視	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)
• IPMI ホストおよび SNMP ホスト	• インベントリとコンポーネントの管理	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコルリファレンスガイド』(820-7379)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

## システムセンサー、インジケータ、および ILOM イベントログの監視

項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
LED とシステムインジケータを表示および設定する	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">97 ページの「センサー測定値を表示する」</a></li> <li>• <a href="#">98 ページの「システムインジケータを設定する」</a></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• x86 システムサーバー SP</li> <li>• SPARC システムサーバー</li> <li>• CMM</li> </ul>
クロックとタイムゾーンを設定する	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">99 ページの「クロック設定を構成する」</a></li> </ul>	
イベントログをフィルタリング、表示、およびクリアする	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">100 ページの「イベントログ出力をフィルタリングする」</a></li> <li>• <a href="#">100 ページの「ILOM イベントログを表示およびクリアする」</a></li> <li>• <a href="#">103 ページの「リモートの syslog 受信 IP アドレスを設定する」</a></li> </ul>	
障害の状態を表示する	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">104 ページの「CLI を使用して障害を表示およびクリアする」</a></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ほとんどの x86 システムサーバー SP</li> <li>• ほとんどの SPARC システムサーバー SP</li> <li>• CMM</li> </ul>



## ▼ センサー測定値を表示する

次の手順に従って、センサー測定値を表示します。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力して、センサーターゲットに移動し、センサープロパティを表示します。

```
->cd target
```

```
->show
```

たとえば、一部のサーバープラットフォームでは、次のパスを指定して、サーバーの外気の吸気温度測定値を表示します。

```
->cd /SYS/T_AMB
```

```
->show
```

センサーターゲットを説明するプロパティが表示されます。例:

```
type = Temperature
class = Threshold Sensor
value = 27.000 degree C
upper_nonrecov_threshold = 45.00 degree C
upper_critical_threshold = 40.00 degree C
upper_noncritical_threshold = 35.00 degree C
lower_noncritical_threshold = 10.00 degree C
lower_critical_threshold = 4.00 degree C
lower_nonrecov_threshold = 0.00 degree C
alarm_status = cleared
```

アクセス可能なしきい値センサーターゲットの種類とそれらにアクセスするためのパスの詳細は、Sun サーバープラットフォームに付属のユーザーマニュアルを参照してください。

3. ディスクリットセンサー測定値を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
->cd target
```

```
->show
```

たとえば、一部の Sun サーバープラットフォームでは、次のパスを指定して、ハードディスクドライブがスロット 0 に存在するかどうかを判断できます。

```
->cd /SYS/HDD0_PRSENT
```

```
->show
```

ディスクリットセンサーターゲットを説明するプロパティが表示されます。例:

- Type = Entity Presence
- Class = Discrete Indicator
- Value = Present

アクセス可能なディスクリットセンサーのターゲットの種類とそれらにアクセスするためのパスの詳細は、Sun サーバープラットフォームに付属のユーザーマニュアルを参照してください。

## ▼ システムインジケータを設定する

### 始める前に

- システムインジケータを設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、システムインジケータを設定します。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. システムインジケータの状態を変更できるかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
->cd /SYS or cd /CH
```

```
->show
```

システムインジケータに関連付けられたターゲット、プロパティ、およびコマンドが表示されます。

例:

```
/SYS
Targets:
  BIOS
  OK2RM
  SERVICE

Properties:
  type = Host System
  chassis_name = SUN BLADE 8000 CHASSIS
  chassis_part_number = 602-3235-00
  chassis_serial_number = 00:03:BA:CD:59:6F
  chassis_manufacturer = SUN MICROSYSTEMS
  fault_state = OK
  clear_fault_action = (none)
  power_state = Off

Commands:
  cd
  reset
  set
  show
  start
  stop
```

Commands の一覧に set コマンドが表示された場合は、システムインジケータの状態を変更できます。

3. システムインジケータの状態を変更するには、次のコマンドを入力します。

```
->set property=state_name
```

使用しているシステムでサポートされているシステムインジケータとそれらにアクセスするためのパスの詳細は、Sun サーバプラットフォームに付属のユーザーマニュアルを参照してください。

## ▼ クロック設定を構成する

### 始める前に

- クロック設定を表示および構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、クロック設定を構成します。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ILOM のクロック設定を表示するには、次のように入力します。

```
->show /SP/clock
```

3. ILOM のクロック設定を手動で設定するには、次のように入力します。

```
-> set target property_name=value
```

例:

```
-> set /SP/clock datetime=MMDDhhmmYYYY
```

4. NTP サーバーの IP アドレスを設定して、ネットワーク上のほかのシステムと同期するように ILOM のクロック設定を構成するには、次の手順を実行します。

- a. NTP サーバーの IP アドレスを設定するには、次のコマンドを入力します。

```
->set /SP/clients/ntp/server/1 address=ip_address
```

- b. NTP の同期を有効にするには、次のように入力します。

```
->set /SP/clock usentpserver=enabled
```

次の内容に関するプラットフォーム固有のクロック情報は、Sun サーバプラットフォームのユーザーマニュアルを参照してください。

- ILOM の現在の時間は SP を再起動しても維持されるかどうか。
- ILOM の現在の時間をホストの起動時にホストと同期させることができるかどうか。
- 時刻を格納するリアルタイムクロック要素があるかどうか。

## ▼ イベントログ出力をフィルタリングする

次の手順に従って、イベントログ出力をフィルタリングします。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで次のように入力します。

```
-> show /SP/logs/event/list Class==(value) Type==(value)  
Severity==(value)
```

## ▼ ILOM イベントログを表示およびクリアする

始める前に

- イベントログを表示またはクリアするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、ILOM イベントログを表示およびクリアします。

1. サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
  - ラック搭載型サーバー SP の場合: `cd /SP/logs/event`
  - シャーシ内のブレードサーバー SP の場合: `cd /CH/BLn/SP/logs/event`
  - CMM の場合: `cd /CMM/logs/event`

3. 次のコマンドを入力して、イベントログのリストを表示します。

->show list

イベントログの内容が表示されます。

例:

ID	Date/Time	Class	Type	Severity
578	Wed Jun 11 06:39:47 2008	Audit	Log	minor
user1 : Open Session : object = /session/type : value = shell : success				
577	Wed Jun 11 06:34:53 2008	Audit	Log	minor
user1 : Set : object = /clients/activedirectory/userdomains/3/domain : value = <USERNAME>@joe.customer.example.sun.com : success				
576	Wed Jun 11 06:25:06 2008	Audit	Log	minor
user1 : Open Session : object = /session/type : value = www : success				
575	Wed Jun 11 06:07:29 2008	Audit	Log	minor
user1 : Close Session : object = /session/type : value = www : success				
574	Wed Jun 11 06:02:01 2008	Audit	Log	minor
root : Set : object = /clients/activedirectory/dnslocatorqueries/2/service : value = _ldap._tcp.pc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:636> : success				
573	Wed Jun 11 06:01:50 2008	Fault	Fault	critical
Fault detected at time = Wed Jun 11 06:01:41 2008. The suspect component:/CH/PS3/EXTERNAL/AC_INPUT has fault.powersupply.no_ac with probability=100 Please consult the Sun Blade 8000 Fault Diagnosis Document (Document ID: 85878) at <a href="http://sunsolve.sun.com">http://sunsolve.sun.com</a> to determine the correct course of action.				

#### 4. イベントログで、次のいずれかのタスクを実行します。

- リストを下にスクロールしてエントリを表示する – 「q」以外の任意のキーを押します。次の表で、ログに表示される各列について説明します。

列のラベル	説明
Event ID (イベント ID)	(1 番から順番に付けられた) イベントの番号。
Class/Type	<ul style="list-style-type: none"><li>• Audit/Log – 設定が変更されるコマンド。説明には、ユーザー、コマンド、コマンドパラメータ、成功と失敗が記述されます。</li><li>• IPMI/Log – IPMI SEL に記録されたイベントは、管理ログにも記録されます。</li><li>• Chassis/State – インベントリの変更および全般的なシステム状態の変更。</li><li>• Chassis/Action – サーバーのモジュール/シャーシの停止イベント、FRU コンポーネントのホットインサート/リムーバブル、および押された「Reset Parameters」ボタンのカテゴリ。</li><li>• Fault/Fault – 障害管理の障害。説明には、障害が検出された時刻と原因と思われるコンポーネントが表示されます。</li><li>• Fault/Repair – 障害管理の修復。説明にはコンポーネントが表示されます。</li></ul>
重要度	「Debug」、「Down」、「Critical」、「Major」、または「Minor」。
Date (日付)/ Time	イベントが発生した日時。時間情報プロトコル (NTP) サーバーで ILOM 時間を設定できる場合、ILOM クロックは協定世界時 (UTC) を使用します。
説明	イベントの説明。

#### 5. イベントログを閉じる (ログの表示を中止する) には、「q」キーを押します。

#### 6. イベントログ内のエントリをクリアするには、次の手順を実行します。

- a. **set clear=true** と入力します。  
確認のメッセージが表示されます。
- b. 次のいずれかを入力します。
  - エントリをクリアするには、**y** と入力します。
  - ログのクリアを取り消すには、**n** と入力します。

---

**注** – ILOM イベントログには、IPMI エントリのコピーを含むさまざまな種類のイベントが蓄積されます。ILOM イベントログをクリアすると、IPMI エントリを含むログ内のすべてのエントリがクリアされます。ただし、ILOM イベントログエントリをクリアしても、IPMI ログに直接送信された実際のエントリはクリアされません。

---

## ▼ リモートの syslog 受信 IP アドレスを設定する

### 始める前に

- リモートの syslog 受信 IP アドレスを設定するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順に従って、リモートの syslog 受信 IP アドレスを設定します。

1. サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
  - ラック搭載型サーバー SP の場合: `cd /SP/clients/syslog`
  - シャーシ内のブレードサーバー SP の場合: `cd /CH/BLn/SP/clients/syslog`
  - CMM の場合: `cd /CMM/clients/syslog`
3. syslog プロパティを表示するには、show コマンドを入力します。  
プロパティが表示されます。たとえば、SP ではじめて syslog プロパティにアクセスすると、次のように表示されます。

```
/SP/clients/syslog/1
Targets:
Properties:
  address = 0.0.0.0

Commands:
  cd
  set
  show
```

4. set コマンドを使用して、IP 1 (さらに、該当する場合は IP 2) の宛先 IP アドレスを特定します。  
たとえば、宛先の IP を IP アドレス 111.222.33.4 に設定するには、次のように入力します。  
`->set destination_ip1=111.222.33.4`
5. Enter を押して、設定を有効にします。  
IP アドレスの設定の結果が表示されます。たとえば、宛先の IP アドレスを 111.222.33.4 に設定した場合は、次のように表示されます。  
`Set 'destination_ip1' to '111.222.33.4'`

## ▼ CLI を使用して障害を表示およびクリアする

### 始める前に

- ILOM で障害をクリアするには、Admin (a) の役割が有効で、サーバー SP または CMM に ILOM ファームウェア 3.0.3 以降がインストールされている必要があります。

次の手順に従って、ILOM CLI を使用して障害を表示およびクリアします。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. 障害が発生したコンポーネントのリストを表示するには、次のように入力します。
  - サーバーから:  
`->show /SP/faultmgmt`
  - CMM から:  
`->show /CMM/faultmgmt`
3. ILOM イベントログの障害メッセージを表示するには、次のように入力します。
  - サーバーから:  
`->show /SP/logs/event/list`
  - CMM から:  
`->show /CMM/logs/event/list`
4. 障害が発生したコンポーネントを修復または交換します。
5. コンポーネントの障害をクリアするには、次のコマンドを入力します。

```
->set component_path clear_fault_action=true
Are you sure you want to clear component_path (y/n)? y
Set 'clear_fault_action' to 'true'
```

*component\_path* は、障害が発生した次のいずれかのコンポーネントです。

- プロセッサ
- メモリー
- マザーボード
- ファンモジュール
- 電源
- CMM
- NEM
- PCI カード



たとえば、プロセッサの障害をクリアするには、次のように入力します。

```
->set /SYS/MB/P0 clear_fault_action=true
Are you sure you want to clear /SYS/MB/P0 (y/n)? y
Set 'clear_fault_action' to 'true'
```

---

## SP コンソールの履歴ログを表示する

項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>105 ページの「始める前に」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li></ul>
SP コンソールの履歴ログを表示する	<ul style="list-style-type: none"><li>106 ページの「ILOM CLI を使用して SP コンソールの履歴ログエントリを表示および管理する」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>SPARC システムサーバー</li></ul>

---

**注** – SP コンソールの履歴ログ機能は、ILOM Web インタフェースからは利用できません。

---

SP コンソールの履歴ログファイルのログエントリを表示する方法については、次の手順を参照してください。

### 始める前に

- SP コンソールの履歴ログファイルに格納されたエントリを表示するには、Console (c) の役割のユーザーアカウントが必要です。
- Oracle x86 サーバーで SP コンソールの履歴ログを表示するには、ILOM 3.0.8 以降のバージョンの ILOM を使用している必要があります。ILOM 3.0.8 よりも前のバージョンでは、SP コンソールの履歴ログファイルは Oracle SPARC サーバー上の ILOM でのみ表示できました。

## ▼ ILOM CLI を使用して SP コンソールの履歴ログエントリを表示および管理する

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. show コマンドを使用して、SP コンソールのターゲット、プロパティ、およびコマンドを表示します。

例:

```
-> show /SP/console

/SP/console
  Targets:
    history

  Properties:
    line_count = 0
    pause_count = 0
    start_from = end

  Commands:
    cd
    show
    start
    stop

->
```

3. help コマンドを使用して、SP コンソールのターゲットおよびプロパティに関する詳細を表示します。

例:

```
-> help /SP/console

/SP/console: Redirection of console stream to SP
Targets:
  history: console history

Properties:
  line_count: total number of lines to display
  line_count: Possible values = 0-2048 where 0 means no limit
  line_count: User role required for set = c

  pause_count: number of lines to display before each pause
  pause_count: Possible values = 0-2048 where 0 means no limit
  pause_count: User role required for set = c

  start_from: from which end of the available history to list
  start_from: Possible values = beginning,end
  start_from: User role required for set = c
```

4. set コマンドを使用して、SP コンソールの履歴ログファイルのエントリを表示するときに ILOM で使用するプロパティ値を指定します。

例:

- set コマンドの使用例:

```
set [target] <property>=<value> [<property>=<value>...]
```

- プロンプトで、SP コンソールのターゲットと、1 つ以上の表示プロパティ値を次のように入力します。

```
-> set /SP/console property=value
```

```
-> set /SP/console property=value property=value
```

```
-> set /SP/console property=value property=value property=value
```

*property* と *value* には、次の表に示すいずれかのパラメータを指定できます。

プロパティ	値	例:
line_count	<p>行の値を 0 - 2048 の範囲で指定できます。0 は、無制限を意味します。</p> <p><b>注</b> - line_count のデフォルト値は 0 です。</p>	<p>ILOM に対して、SP コンソールの履歴ログの 4 行を表示するように指定するには、次のように入力します。</p> <pre>-&gt; set /SP/console line_count=4</pre>
pause_count	<p>一時停止の値を 0 - 2048 の範囲で指定できます。0 は、表示を一時停止しないことを意味します。</p> <p><b>注</b> - pause_count のデフォルト値は 0 です。</p>	<p>ILOM で SP コンソールの履歴ログの 4 行を表示し、そのうちの 2 行を表示したら表示を一時停止するように指定するには、次のように入力します。</p> <pre>-&gt; set /SP/console line_count=4 pause_count=2</pre>
start_from	<p>次の値を指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• end - 履歴ログの最後の行 (最新)。</li> <li>• beginning - 履歴ログの最初の行。</li> </ul> <p><b>注</b> - start_from のデフォルト値は end です。</p>	<p>ILOM で SP コンソールの履歴ログの最初の 4 行を表示し、そのうちの 2 行を表示したら表示を一時停止するように指定するには、次のように入力します。</p> <pre>-&gt; set /SP/console line_count=4 pause_count=2 start_from=beginning</pre>

SP コンソールの履歴ログに記録されている UTC タイムスタンプは、サーバーに設定されているローカル時刻です。

## 第7章

# ストレージコンポーネントおよび Zone Manager の監視

---

### 項目

説明	リンク
HDD および RAID コントローラのストレージの詳細を表示および監視する	<ul style="list-style-type: none"><li>111 ページの「HDD および RAID コントローラのプロパティの詳細を表示する」</li></ul>
Zone Manager を有効化または無効化する	<ul style="list-style-type: none"><li>114 ページの「Zone Manager の有効化または無効化」</li></ul>

---

### 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
<ul style="list-style-type: none"><li>概念</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ストレージ監視およびゾーン管理</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
<ul style="list-style-type: none"><li>Web インタフェース</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ストレージコンポーネントおよび Zone Manager の監視</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)

---

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

---

# ストレージコンポーネントの表示および監視

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>110 ページの「始める前に」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li></ul>
HDD および RAID コントローラのプロパティの詳細を表示する	<ul style="list-style-type: none"><li>111 ページの「HDD および RAID コントローラのプロパティの詳細を表示する」</li></ul>	

## 始める前に

- 使用している Sun サーバーでストレージ監視機能がサポートされていることを確認します。詳細については、使用しているサーバーの ILOM の補足マニュアルまたはプラットフォームの管理マニュアルを参照してください。
- ILOM 3.0.6 以降のバージョンの ILOM を使用している必要があります。
- ストレージ監視機能をサポートする Sun サーバーの場合、ILOM のストレージ監視機能を使用する前に、System Management Pack をダウンロードしてインストールする必要があります。この管理パックのダウンロード方法については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』(821-2181) を参照してください。
- 一部の Sun サーバーでは、この章で説明するストレージ監視機能のサポートが有効にならない場合があります。サーバーのストレージ監視サポートが有効になっているかどうかを判断するには、使用しているサーバーの ILOM の補足マニュアルまたはプラットフォームの管理マニュアルを参照してください。
- ILOM のストレージ監視機能をサポートする Sun サーバーの場合、ストレージ監視機能を使用するには、System Management Pack をインストールする必要があります。この管理パックのダウンロード方法については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』(821-2181) を参照してください。
- ストレージコンポーネントの表示および監視の概念情報と例については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370) を参照してください。

## ▼ HDD および RAID コントローラのプロパティの詳細を表示する

1. ILOM SP CLI にログインします。

---

注 – または、ILOM CMM CLI にログインし、/SYS 以下の HDD の詳細または /STORAGE/raid 以下の RAID ディスクコントローラの詳細を表示できる SP ターゲットに移動します。

---

2. cd コマンドを使用して /SYS ターゲットまたは /STORAGE/raid ターゲットに移動します。

例:

- ->cd /SYS

または

- ->cd /STORAGE/raid

3. サーバーにインストールされている HDD のプロパティの詳細を表示するには、show コマンドを使用します。

例:

- システムで構成されている特定の HDD のストレージの詳細を表示するには、次のように入力します。

-> show /SYS/DBP/HDD0

0 は、HDD がインストールされているサーバー上の HD スロット位置です。

CLI 出力例:

```
-> show /SYS/DBP/HDD0
```

```
/SYS/DBP/HDD0
Targets:
  OK2RM
  PRSNT
  SERVICE

Properties:
  type = Hard Disk
  ipmi_name = DBP/HDD0
  fru_name = H101414SCSUN146G
  fru_manufacturer = HITACHI
  fru_version = SA25
  fru_serial_number = 000852E6LJYA          P4X6LJYA
  controller_id = 0d:00.0
  disk_id = 0
  capacity = 136
  device_name = /dev/sg8
  disk_type = sata
  wwn = 5764832510609242989
  raid_status = OK
  raid_ids = 0

Commands:
  cd
  show
```

4. RAID コントローラおよび関連するディスク ID についてのプロパティの詳細を表示するには、show コマンドを使用します。

例:

- a. 構成されている RAID コントローラターゲットを一覧表示するには、次のように入力します。

```
-> show /STORAGE/raid
```

CLI ストレージ RAID ターゲットの出力例:

```
-> show /STORAGE/raid

/STORAGE/raid
Targets:
  controller@0d:00.0

Properties:

Commands:
  cd
  show
```

- b. コントローラに関連するプロパティの詳細を表示し、構成されている raid\_id ターゲットを一覧表示するには、次のように入力します。

```
-> show /STORAGE/raid/controller@od:00.0
```

od:00.0 は、コントローラの PCI アドレスに対応する ID です。

CLI RAID コントローラターゲットおよびプロパティの出力例:

```
-> show /STORAGE/raid/controller@0d:00.0

/STORAGE/raid/controller@0d:00.0
Targets:
  raid_id0
  disk_id0
  disk_id1
  disk_id2
  disk_id3
  disk_id4
  disk_id5
  disk_id6
  disk_id7
  raid_id1

Properties:
  fru_manufacturer = Adaptec
  fru_model = 0x0285
  pci_vendor_id = 36869
  pci_device_id = 645
  pci_subvendor_id = 645
  pci_subdevice_id = 645
  raid_levels = 0, 1, 1E, 5, 5EE, 10, 50, Spanned, RAID,
  max_disks = 0
  max_raids = 24
  max_hot_spare = 64
  max_global_hot_spare = 64
  min_stripe_size = 16
  max_stripe_size = 1024
```



- c. 使用可能な disk\_id ターゲットを一覧表示し、コントローラの raid\_id に関連するプロパティを表示するには、次のように入力します。

```
-> show /STORAGE/raid/controller@od:00.0/raid_id0
```

- od:00.0 は、システムにインストールされていることが確認されたコントローラの PCI アドレスです。
- raid\_id0 は、コントローラで構成されているターゲット RAID ディスクです。

raid\_id の CLI RAID コントローラ出力例:

```
-> show /STORAGE/raid/controller@0d:00.0/raid_id0

/STORAGE/raid/controller@0d:00.0/raid_id0
Targets:
  disk_id0

Properties:
  level = Simple
  status = OK
  disk_capacity = 136
  device_name = /dev/sda
  mounted = true

Commands:
  cd
  show
```

- d. コントローラ上の raid\_id に関連する disk\_id のプロパティの詳細を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /STORAGE/raid/controller@od:00.0/raid_id0/disk_id0
```

- od:00.0 は、システムにインストールされていることが確認されたコントローラの PCI アドレスです。
- raid\_id0 は、コントローラで構成されているターゲット RAID ディスクです。
- disk\_id0 は、raid\_id に関連するターゲットディスクです。

raid\_id および disk\_id の CLI RAID コントローラ出力例:

```
-> show /STORAGE/raid/controller@0d:00.0/raid_id0/disk_id0

/STORAGE/raid/controller@0d:00.0/raid_id0/disk_id0
Targets:

Properties:
  fru_manufacturer = HITACHI
  fru_serial_number = 000852E6LJYA      P4X6LJYA
  fru_version = SΛ25
  status = OK
  capacity = 136
  device_name = /dev/sg8
  disk_type = sata
  wwn = 5764832510609242989
  raid_ids = 0
  system_drive_slot = /SYS/DBP/HDD0

Commands:
  cd
  show
```

5. `exit` を入力して CLI を終了します。

---

## Zone Manager の有効化または無効化

Oracle Sun Blade 6000 または Sun Blade 6048 モジュラーシステムを使用している場合、ILOM 3.0.10 の時点で新しいゾーン管理機能が追加されています。ゾーン管理機能は、Oracle Sun Blade 6000 または Sun Blade 6048 モジュラーシステムにインストールされている SAS-2 ストレージデバイスに対して使用できます。ILOM から SAS-2 シャーシストレージデバイスを管理する方法の詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) CMM 管理ガイド – Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』(821-3083) を参照してください。

## 第8章

# システム警告の管理

項目	
説明	リンク
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">116 ページの「始める前に」</a></li></ul>
警告ルール設定を管理する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">117 ページの「警告ルールの作成または編集」</a></li><li>• <a href="#">118 ページの「警告ルールの無効化」</a></li></ul>
テスト警告を生成して、警告設定が機能していることを確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">118 ページの「テスト警告の生成」</a></li></ul>
警告ルールを保存する前に、テスト電子メール警告を送信する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">119 ページの「特定の宛先へのテスト電子メール警告の送信」</a></li></ul>
警告ルール設定を管理する場合に使用する必要がある CLI コマンドを確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">119 ページの「警告ルール設定を管理するための CLI コマンド」</a></li></ul>
電子メールを使用してシステム警告を受信者に通知する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">122 ページの「SMTP クライアントの有効化」</a></li></ul>
SNMP MIB を ILOM から直接ダウンロードする	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">123 ページの「SNMP MIB のダウンロード」</a></li></ul>

関連項目		
ILOM	章または節	ガイド
<ul style="list-style-type: none"><li>• 概念</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• システム監視と警告管理</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』 (820-7370)
<ul style="list-style-type: none"><li>• Web インタフェース</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• システム警告の管理</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』 (820-7373)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

## 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• IPMI ホストおよび SNMP ホスト	• インベントリとコンポーネントの管理	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコルリファレンスガイド』(820-7379)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。

[http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights\\_mgr30#hic](http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights_mgr30#hic)

# 警告ルール設定の管理

## 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	• <a href="#">116 ページの「始める前に」</a>	• x86 システムサーバー SP
警告設定を構成する	• <a href="#">117 ページの「警告ルールの作成または編集」</a> • <a href="#">118 ページの「警告ルールの無効化」</a>	• SPARC システムサーバー • CMM
テスト警告を生成して、警告設定が機能していることを確認する	• <a href="#">118 ページの「テスト警告の生成」</a>	
警告ルールを保存する前に、テスト電子メール警告を特定の宛先に送信する	• <a href="#">119 ページの「特定の宛先へのテスト電子メール警告の送信」</a>	
電子メールでシステム警告を受信者に通知する	• <a href="#">122 ページの「SMTP クライアントの有効化」</a>	

## 始める前に

- 電子メール通知警告を定義する場合は、電子メール通知の送信に使用する送信電子メールサーバーを ILOM で設定する必要があります。送信電子メールサーバーが設定されていないと、ILOM は正常に電子メール通知警告を生成できません。
- バージョンを SNMP v3 に設定して SNMP トラップ警告を定義する場合は、ILOM で SNMP ユーザーとして SNMP ユーザー名が定義されている必要があります。ILOM でユーザーが SNMP ユーザーとして定義されていないと、SNMP 警告の受信者は SNMP 警告メッセージを復号化できません。

- 警告ルール設定を管理するための CLI コマンドを確認します。119 ページの「警告ルール設定を管理するための CLI コマンド」を参照してください。
- 警告ルール設定を管理するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- テスト電子メール警告を送信するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。また、ILOM 3.0.4 以降のバージョンの ILOM を使用している必要があります。

## ▼ 警告ルールの作成または編集

次の手順に従って、警告ルールを設定します。

1. サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドパスを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
  - ラック搭載型サーバーの場合: `cd /SP/alertmgmt`
  - ブレードサーバーモジュールの場合: `cd /SP/alertmgmt`
  - シャーシ CMM の場合: `cd /CMM/alertmgmt`
3. 警告ルールに関連付けられているプロパティを表示するには、`show` コマンドを入力します。

たとえば、最初の警告ルールに関連付けられているプロパティを表示するには、次のいずれかを入力します。

  - ラック搭載型サーバーの場合: `show /SP/alertmgmt/rules/1`
  - ブレードサーバーモジュールの場合: `show /CH/BLn/SP/alertmgmt/rules/1`
  - シャーシ CMM の場合: `show /CMM/alertmgmt/CMM/rules/1`
4. 警告ルールに関連付けられているプロパティに値を割り当てるには、`set` コマンドを入力します。

たとえば、ルール 1 の警告の種類として IPMI PET を設定するには、次のようにコマンドパスを入力します。

```
->set /SP/alertmgmt/rules/1 type=ipmipet
```

---

注 – 警告ルール設定を有効にするには、警告の種類、警告レベル、および警告の宛先に値を指定する必要があります。SNMP 警告の種類を定義する場合は、SNMP トラップ警告の受信を認証するための値を任意で定義できます。

---

## ▼ 警告ルールの無効化

次の手順に従って、警告ルールを無効にします。

1. サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドパスを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
  - ラック搭載型サーバー SP の場合、`cd /SP/alertmgmt/rules/n` と入力します。
  - ブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLn/SP/alertmgmt/rules/n` と入力します。
  - シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/alertmgmt/CMM/rules/n` と入力します。  
*n* は特定の警告ルール番号に相当し、1 - 15 の値になります。  
[BL*n* は、サーバーモジュール (ブレード) のスロット番号を表します。]
3. 警告ルールを無効にするには、次のコマンドを入力します。

```
->set level=disable
```

## ▼ テスト警告の生成

次の手順に従って、テスト警告を生成します。

1. サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドパスを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
  - ラック搭載型サーバー SP の場合、`cd /SP/alertmgmt/rules` と入力します。
  - ブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLn/SP/alertmgmt/rules` と入力します。
  - シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/alertmgmt/CMM/rules` と入力します。
3. 有効な警告ルール設定ごとにテスト警告を生成するには、次のコマンドを入力します。

```
->set testalert=true
```

## ▼ 特定の宛先へのテスト電子メール警告の送信

次の手順に従って、テスト電子メール警告を送信します。

1. サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドパスを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
  - ラック搭載型サーバー SP の場合、`cd /SP/alertmgmt/rules` と入力します。
  - ブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLn/SP/alertmgmt/rules` と入力します。
  - シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/alertmgmt/CMM/rules` と入力します。
3. 警告ルール設定ごとにテスト電子メール警告を送信するには、次のコマンドを入力します。

```
->set testrule=true
```

---

## 警告ルール設定を管理するための CLI コマンド

次の表に、ILOM CLI を使用して警告ルール設定を管理する場合に使用する必要がある CLI コマンドを示します。

表 8-1 警告ルール設定を管理するための CLI コマンド

CLI コマンド	説明
show	<p>show コマンドを使用すると、フルパスまたは相対パスのいずれかを指定して、任意のレベルの警告管理コマンドツリーを表示できます。</p> <p><b>例:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>フルパスを使用して警告ルールとともにそのプロパティを表示するには、コマンドプロンプトで次のように入力します。            -&gt; <b>show /SP/alertmgmt/rules/1</b>            /SP/alertmgmt/rules/1            Properties:                community_or_username = public                destination = 129.148.185.52                level = minor                snmp_version = 1                type = snmptrap            Commands:                cd                set                show</li> <li>フルパスを使用して1つのプロパティを表示するには、コマンドプロンプトで次のように入力します。            -&gt; <b>show /SP/alertmgmt/rules/1 type</b>            /SP/alertmgmt/rules/1            Properties:                type = snmptrap            Commands:                set                show</li> <li>現在のツリーの場所が /SP/alertmgmt/rules である場合の相対パスを指定するには、コマンドプロンプトで次のように入力します。            -&gt; <b>show 1/</b>            /SP/alertmgmt/rules/1            Targets:            Properties:                community_or_username = public                destination = 129.148.185.52                level = minor                snmp_version = 1                type = snmptrap            Commands:                cd                set                show</li> </ul>



表 8-1 警告ルール設定を管理するための CLI コマンド (続き)

CLI コマンド	説明
cd	cd コマンドを使用すると、作業用ディレクトリを設定できます。サーバー SP の作業用ディレクトリとして警告管理を設定するには、コマンドプロンプトで次のようにコマンドを入力します。 -> <code>cd /SP/alertmgmt</code>
set	set コマンドを使用すると、ツリー内の任意の場所からプロパティに値を設定できます。ツリーの場所に応じて、プロパティのフルパスまたは相対パスのいずれかを指定できます。例: <ul style="list-style-type: none"> <li>フルパスの場合は、コマンドプロンプトで次のように入力します。 -&gt; <code>set /SP/alertmgmt/rules/1 type=ipmipet</code></li> <li>相対パス (ツリーの場所が /SP/alertmgmt) の場合、コマンドプロンプトで次のようにコマンドパスを入力します。 -&gt; <code>set rules/1 type=ipmipet</code></li> <li>相対パス (ツリーの場所が /SP/alertmgmt/rules/1) の場合、コマンドプロンプトで次のようにコマンドパスを入力します。 -&gt; <code>set type=ipmipet</code></li> </ul>

## 電子メール通知警告用の SMTP クライアントの設定

項目	リンク	プラットフォーム機能のサポート
電子メールを使用してシステム警告を受信者に通知する	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">122 ページの「SMTP クライアントの有効化」</a></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>x86 システムサーバー SP</li> <li>SPARC システムサーバー</li> <li>CMM</li> </ul>

### 始める前に

- SMTP クライアントを有効にするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- 設定済みの電子メール通知警告を生成するには、ILOM クライアントが SMTP クライアントとして動作し、電子メール警告メッセージを送信できるようにする必要があります。
- ILOM クライアントを SMTP クライアントとして有効にする前に、電子メール通知を処理する送信 SMTP 電子メールサーバーの IP アドレスとポート番号を指定しておく必要があります。

## ▼ SMTP クライアントの有効化

次の手順に従って、SMTP クライアントを有効にします。

1. サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
2. 次のいずれかのコマンドパスを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
  - ラック搭載型サーバー SP の場合、`cd /SP/clients/smtp` と入力します。
  - ブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLn/SP/clients/smtp` と入力します。
  - シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/clients/smtp` と入力します。
3. SMTP プロパティを表示するには、`show` コマンドを入力します。

たとえば、SP ではじめて SMTP プロパティにアクセスすると、次のように表示されます。

```
-> show
/SP/clients/smtp
Targets
  Properties
    address = 0. 0. 0. 0
    port = 25
    state = enabled
Commands:
  cd
  set
  show
```

4. `set` コマンドを使用して、SMTP クライアントの IP アドレスを指定するか、ポートまたは状態プロパティ値を変更します。

例:

```
->set address=222.333.44.5
```
5. Enter を押して、変更を有効にします。

たとえば、`set address=222.333.44.5` と入力した場合、次のような結果が表示されます。

```
Set 'address=222.333.44.5'
```

# SNMP MIB の ILOM からの直接ダウンロード

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
SNMP MIB を ILOM から直接ダウンロードする	<ul style="list-style-type: none"><li>123 ページの「SNMP MIB のダウンロード」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

## 始める前に

- SNMP MIB を ILOM からダウンロードするには、Reset and Host Control (r) の役割が必要です。
- また、ILOM 3.0.4 以降のバージョンの ILOM を使用している必要があります。

## ▼ SNMP MIB のダウンロード

次の手順に従って、SNMP MIB をダウンロードします。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. `show` コマンドを使用して、SNMP MIB を表示します。

例:

```
-> show /SP/services/snmp/mibs

/SP/services/snmp/mibs
Targets:

Properties:
  dump_uri = (Cannot show property)

Commands:
  cd
  dump
  set
  show
```

3. ファイルをダウンロードするには、次のいずれかのコマンドを入力します。

```
-> dump -destination URI /SP/services/snmp/mibs
```

または

```
-> set /SP/services/snmp/mibs dump_uri=URI
```

*URI* には、ファイルのダウンロード先のターゲットを指定します。

MIB が含まれている zip ファイルは、宛先のサーバーに転送されます。

## 第9章

# ハードウェアインタフェースの電力の監視および管理

### 項目

説明	リンク
ILOM ファームウェアのポイントリリースごとに電力の監視および管理機能の更新を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>126 ページの「電力管理機能の更新の概要」</li></ul>
ハードウェアインタフェースの電力の監視および管理のための CLI 手順	<ul style="list-style-type: none"><li>128 ページの「システムの消費電力の監視」</li><li>136 ページの「サーバーの電力使用を管理する電力ポリシー設定の構成」</li><li>137 ページの「消費電力しきい値通知の構成」</li><li>138 ページの「コンポーネント割り当て配電の監視」</li><li>143 ページの「電力制限プロパティの構成」</li><li>147 ページの「CMM 電源冗長性プロパティの監視または設定」</li></ul>

### 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
<ul style="list-style-type: none"><li>概念</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>消費電力管理インタフェース</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
<ul style="list-style-type: none"><li>Web インタフェース</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>消費電力の監視</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

関連項目

ILOM	章または節	ガイド
<ul style="list-style-type: none"> <li>IPMI ホスト および SNMP ホスト</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>消費電力の監視</li> </ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコルリファレンスガイド』(820-7379)
<ul style="list-style-type: none"> <li>機能更新</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>電力管理機能の更新</li> </ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 機能更新およびリリースノート』(821-0647)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

## 電力管理機能の更新の概要

表 9-1 に、ILOM 3.0 以降に加えられた代表的な電力管理機能の拡張とマニュアルの更新を示します。

表 9-1 ILOM ファームウェアのポイントリリースごとの電力管理機能の更新

新規または拡張された機能	ファームウェアのポイントリリース	ドキュメントの変更予定	更新された CLI 手順の参照先
消費電力メトリックを監視する	ILOM 3.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>消費電力メトリックの新しい用語および定義</li> <li>新しいシステム監視 --&gt; 消費電力管理メトリックのプロパティ</li> <li>デバイスの消費電力を監視するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>128 ページの「システムの消費電力の監視」</li> </ul>
電力ポリシープロパティを構成する	ILOM 3.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい電力ポリシープロパティについての説明</li> <li>電力ポリシー設定を構成するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>136 ページの「サーバーの電力使用を管理する電力ポリシー設定の構成」</li> </ul>
消費電力履歴を監視する	ILOM 3.0.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい消費電力履歴メトリック</li> <li>消費電力を監視するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>132 ページの「消費電力履歴を監視する」</li> </ul>
消費電力通知しきい値を構成する	ILOM 3.0.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい消費電力通知しきい値設定</li> <li>消費電力しきい値を構成するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>137 ページの「消費電力しきい値通知の構成」</li> </ul>

表 9-1 ILOM ファームウェアのポイントリリースごとの電力管理機能の更新 (続き)

新規または拡張された機能	ファームウェアのポイントリリース	ドキュメントの変更予定	更新された CLI 手順の参照先
割り当て配電メトリックを監視する	ILOM 3.0.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しいコンポーネント割り当てメトリック</li> <li>電力割り当てを監視するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順</li> <li>ブレードスロットに対する許容電力を構成するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>138 ページの「コンポーネント割り当て配電の監視」</li> </ul>
電力割当量プロパティを構成する	ILOM 3.0.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい電力割当量プロパティ</li> <li>電力割当量プロパティを構成するために追加された新しい CLI 手順と Web プロパティ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>143 ページの「電力制限プロパティの構成」</li> </ul>
CMM システムの電源冗長性プロパティを構成する	ILOM 3.0.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>CMM システムの新しい電源冗長性プロパティ</li> <li>CMM システムで電源冗長性プロパティを構成するために追加された新しい CLI 手順と Web 手順</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>147 ページの「CMM 電源冗長性プロパティの監視または設定」</li> </ul>
CMM 電力管理用の CLI の更新	ILOM 3.0.10	<ul style="list-style-type: none"> <li>電力管理のために ILOM Web インタフェースに追加された新しい最上位タブ</li> <li>CMM 用の改定された CLI コマンド</li> <li>CMM の ILOM Web インタフェースから「Power Management Metrics」タブを削除</li> <li>ブレードスロットの許可制限 (以前の割り当て可能電力) を構成するための更新された CLI 手順</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>142 ページの「ILOM 3.0.10 でブレードスロットの許容電力または予約電力を表示する」</li> <li>143 ページの「ILOM 3.0.10 でブレードの許容電力または許可制限を表示する」</li> <li>147 ページの「ILOM 3.0.10 でブレードの許可制限を構成する」</li> </ul>

# システムの消費電力の監視

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
消費電力を監視する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">129 ページの「システムの合計消費電力を監視する」</a></li><li>• <a href="#">130 ページの「実際の消費電力を監視する」</a></li><li>• <a href="#">130 ページの「個々の電源の消費電力を監視する」</a></li><li>• <a href="#">131 ページの「使用可能な電力を監視する」</a></li><li>• <a href="#">132 ページの「ハードウェア構成の最大消費電力を監視する」</a></li><li>• <a href="#">132 ページの「許容消費電力を監視する」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li><li>• SPARC システムサーバー</li><li>• CMM</li></ul>
消費電力履歴を監視する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">132 ページの「消費電力履歴を監視する」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li><li>• SPARC システムサーバー</li><li>• CMM</li></ul>

## 始める前に

- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』で定義されている電力監視用語を確認してください。

注 – この章で説明する消費電力機能は、使用しているプラットフォームサーバーまたは CMM で実装されていない場合があります。この節で説明する消費電力機能がサーバーまたは CMM でサポートされているかどうかを判断するには、使用しているサーバー用の ILOM の補足マニュアルまたは管理マニュアルを参照してください。

- ILOM によって提供される消費電力メトリックにアクセスするには、ILOM 3.0 以降を実行している必要があります。消費電力履歴にアクセスするには、ILOM 3.0.3 以降を実行している必要があります。

注 – 消費電力履歴は、ILOM の CLI および Web インタフェースを使用して提供されます。この情報は、IPMI または SNMP を通じて使用することはできません。

- プラットフォームサーバーによっては、付加的なプラットフォーム固有の電力メトリックが `/SP/powermgmt/advanced` ノード以下で提供される場合があります。使用しているシステムが付加的なプラットフォーム固有の電力メトリックをサポートしているかどうかを判断するには、使用しているサーバー用の ILOM の補足マニュアルまたは管理マニュアルを参照してください。



## ▼ システムの合計消費電力を監視する

1. ILOM SP CLI または ILOM CMM CLI にログインします。
2. 合計消費電力を表示するには、show コマンドを入力します。

例:

- サーバー SP で、次のように入力します。  
-> **show /SYS/VPS**
- CMM で、次のように入力します。  
-> **show /CH/VPS**

```
/CH/VPS
Targets:
  history

Properties:
  type = Power Unit
  ipmi_name = VPS
  class = Threshold Sensor
  value = 898.503 Watts
  upper_nonrecov_threshold = N/A
  upper_critical_threshold = N/A
  upper_noncritical_threshold = N/A
  lower_noncritical_threshold = N/A
  lower_critical_threshold = N/A
  lower_nonrecov_threshold = N/A
  alarm_status = cleared

Commands:
  cd
  show
```

次の表に、CLI の合計消費電力センサーのプロパティを示します。

プロパティ	値
type	しきい値はプラットフォームに固有です。詳細については、使用しているプラットフォームのマニュアルを参照してください。
class	
value	
upper_nonrecov_threshold	
upper_critical_threshold	
upper_noncritical_threshold	
lower_noncritical_threshold	
lower_critical_threshold	
lower_nonrecov_threshold	

## ▼ 実際の消費電力を監視する

1. ILOM サーバー SP CLI または ILOM CMM CLI にログインします。
2. 実際の消費電力を表示するには、`show` コマンドを入力します。

例:

- サーバー SP の場合は、次のように入力します。  
-> `show /SP/powermgmt actual_power`
- CMM の場合は、次のように入力します。  
-> `show /CMM/powermgmt actual_power`

---

注 - `actual_power` は、`/SYS/VPS` と同じです。`actual_power` は、センサーによって返される値です。

---

## ▼ 個々の電源の消費電力を監視する

1. ILOM サーバー SP CLI または ILOM CMM CLI にログインします。
2. 個々の電源の消費電力を表示するには、`show` コマンドを入力します。

例:

- ラック搭載型システム上の CLI の場合:  
-> `show /SYS/platform_path_to_powersupply/INPUT_POWER | OUTPUT_POWER`

- CMM 上の CLI の場合:

-> `show /CH/platform_path_to_powersupply/INPUT_POWER|OUTPUT_POWER`

次の表に、CLI センサーのプロパティを示します。INPUT\_POWER および OUTPUT\_POWER のどちらのセンサーにも同じプロパティがあります。

プロパティ	値
type	電力装置
class	しきい値センサー
value	<合計消費電力 (W 単位)。たとえば、「1400」>
upper_nonrecov_threshold	該当なし
upper_critical_threshold	該当なし
upper_noncritical_threshold	該当なし
lower_noncritical_threshold	該当なし
lower_critical_threshold	該当なし
lower_nonrecov_threshold	該当なし

注 - 電力センサーは、サーバーモジュール (ブレード) ではサポートされていません。

## ▼ 使用可能な電力を監視する

1. ILOM サーバーの SP CLI または ILOM CMM CLI にログインします。
2. 使用可能電力を表示するには、`show` コマンドを入力します。

例:

- ラック搭載型システム上の CLI の場合:

-> `show /SP/powermgmt available_power`

- CMM 上の CLI の場合:

-> `show /CMM/powermgmt available_power`

## ▼ ハードウェア構成の最大消費電力を監視する

1. ILOM サーバー SP CLI にログインします。
2. ハードウェア構成の最大消費電力を表示するには、`show` コマンドを入力します。

例:

```
-> show /SP/powermgmt hwconfig_power
```

## ▼ 許容消費電力を監視する

1. ILOM サーバー SP CLI または ILOM CMM CLI にログインします。
2. 許容消費電力を表示するには、`show` コマンドを入力します。

例:

- ラック搭載型システム上の CLI の場合:

```
-> show /SP/powermgmt permitted_power
```

- CMM 上の CLI の場合:

```
-> show /CMM/powermgmt permitted_power
```

## ▼ 消費電力履歴を監視する

1. ILOM サーバー SP CLI または ILOM CMM CLI にログインします。
2. 実際の消費電力を表示するには、`show` コマンドを使用します。

例:

- サーバー SP から:

```
->show /SYS/VPS
```

- シャーシ内のサーバーモジュールから:

```
->show /CMM/BLn/VPS
```

- CMM から:

```
->show /CH/VPS
```

```
->show /CH/VPS
```

```
/CH/VPS
```

```
Targets:  
  history
```

```
Properties:  
  type = Power Unit  
  ipmi_name = VPS  
  class = Threshold Sensor  
  value = 1400.000 Watts  
  upper_nonrecov_threshold = N/A  
  upper_critical_threshold = N/A  
  upper_noncritical_threshold = N/A  
  lower_noncritical_threshold = N/A  
  lower_critical_threshold = N/A  
  lower_nonrecov_threshold = N/A  
  alarm_status = cleared
```

```
Commands:  
  cd  
  show
```

3. 15、30、および 60 秒ごとの平均使用電力を表示して、平均消費履歴のターゲットの選択を表示するには、show コマンドを使用します。

例:

- サーバー SP から、次のように入力します。  
->show /SYS/VPS/history
- CMM から、次のように入力します。  
->show /CH/VPS/history

```
->show /CH/VPS/history
```

```
/CH/VPS/history
```

```
Targets:  
  0 (1 Minute Average, 1 Hour History)  
  1 (1 Hour Average, 14 Day History)
```

```
Properties:  
  15sec_average = 1210.000  
  30sec_average = 1400.000  
  60sec_average = 1800.000
```

```
Commands:  
  cd  
  show
```

4. 1分ごとまたは1時間ごとの平均消費履歴をそれぞれ表示するには、show コマンドを使用します。適切なターゲットを指定して、次のコマンドを入力します。

例:

- サーバー SP から、次のように入力します。

```
->show /SYS/VPS/history/0
```

- CMM から:

```
->show /CH/VPS/history/0
```

例:

```
->show /CH/VPS/history/0

/CH/VPS/history/
  Targets:
    list

  Properties:
    average = 1500.000
    minimum = 1500.000 at Mar  4 08:51:24
    maximum = 1500.000 at Mar  4 08:51:23
    period = 1 Minute Average
    depth = 1 Hour History

  Commands:
    cd
    show
```

5. タイムスタンプやワット単位での消費電力など、サンプルセットの詳細を表示するには、`show` コマンドを使用します。

例:

- サーバー SP から、次のように入力します。  
`->show /SYS/VPS/history/0/list`
- CMM から、次のように入力します。  
`->show /CH/VPS/history/0/list`

```
->show /CH/VPS/history/0/list

/CH/VPS/history/0/list
Targets:

Properties:
  Mar  4 08:52:23 = 1500.000
  Mar  4 08:51:24 = 1500.000
  Mar  4 08:50:24 = 1500.000
  Mar  4 08:49:24 = 1500.000
  Mar  4 08:48:24 = 1500.000
  Mar  4 08:47:23 = 1500.000

Commands:
  cd
  show
```

# サーバーの電力使用を管理する電力ポリシー設定の構成

## 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
電力ポリシーを構成する	<ul style="list-style-type: none"><li>136 ページの「サーバー SP の電力ポリシーを設定する」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP (ILOM 3.0.4 よりも前のバージョン)</li><li>SPARC システムサーバー</li></ul>

## 始める前に

- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』で定義されている電力監視用語を確認してください。

注 – この章で説明する電力ポリシー機能は、使用しているプラットフォームサーバーまたは CMM によっては実装されていない場合があります。この節で説明する消費電力機能がサーバーまたは CMM でサポートされているかどうかを判断するには、使用しているサーバー用の ILOM の補足マニュアルまたは管理マニュアルを参照してください。

- ILOM で x86 サーバーの電力ポリシープロパティを構成するには、Administrator (a) の役割の権限が必要であり、ILOM 3.0.3 以前を実行している必要があります。
- ILOM で SPARC サーバーの電力ポリシープロパティを構成するには、Administrator (a) の役割の権限が必要であり、ILOM 3.0 以降を実行している必要があります。

## ▼ サーバー SP の電力ポリシーを設定する

1. ILOM サーバー SP CLI にログインします。
2. 電力ポリシーを設定するには、次のように set コマンドを入力します。  
-> `set /SP/powermgmt policy=Performance|Elastic`
3. 電力ポリシーを表示するには、次のように show コマンドを入力します。  
-> `show /SP/powermgmt policy`



# 消費電力しきい値通知の構成

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
消費電力通知のしきい値を表示または構成する	<ul style="list-style-type: none"><li>137 ページの「CLI を使用して通知しきい値を表示および構成する」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

## 始める前に

- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』で定義されている電力監視用語を確認してください。
- 使用しているサーバーまたは CMM に ILOM 3.0.4 以降がインストールされている必要があります。
- 消費電力の構成変数を変更するには、ILOM の Administrator (a) 権限が必要です。

## ▼ CLI を使用して通知しきい値を表示および構成する

1. ILOM サーバー SP CLI または ILOM CMM CLI にログインします。
2. 現在の設定を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/powermgmt
```

または

```
-> show /CMM/powermgmt
```
3. 通知しきい値の値を設定するには、次のように入力します。

```
-> set threshold1|2=n
```

 $n$  は、ワットを表します。

---

注 – 通知しきい値を 0 (ゼロ) に設定すると、通知しきい値オプションが無効になります。

---

# コンポーネント割り当て配電の監視

## 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
サーバーまたは CMM のコンポーネント割り当てメトリックを表示する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">139 ページの「すべてのサーバーコンポーネントのサーバー電力割り当てを表示する」</a></li><li>• <a href="#">139 ページの「サーバーコンポーネントの電力割り当てを表示する」</a></li><li>• <a href="#">140 ページの「すべてのシャーシコンポーネントに対する CMM 電力割り当てを表示する」</a></li><li>• <a href="#">141 ページの「CMM コンポーネント電力割り当てを表示する」</a></li><li>• <a href="#">142 ページの「ILOM 3.0.10 でブレードスロットの許容電力または予約電力を表示する」</a></li><li>• <a href="#">143 ページの「ILOM 3.0.10 でブレードの許容電力または許可制限を表示する」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li><li>• SPARC システムサーバー</li><li>• CMM</li></ul>

## 始める前に

- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』で定義されている電力監視用語を確認してください。
- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』でコンポーネント割り当て配電に関する概念情報を確認してください。
- 使用しているサーバーまたは CMM に ILOM 3.0.6 以降がインストールされている必要があります。この節で説明する手順のいくつかでは、明示されているように、サーバーまたは CMM で ILOM 3.0.10 以降を実行している必要があります。
- ILOM 3.0.10 の時点で、CMM およびブレード用の一部の CLI プロパティーが変更されています。
  - `allocated_power` は `granted_power` に改名されました
  - `allocatable_power` は `grantable_power` に改名されました
  - `permitted_power` は `grant-in-aid` に改名されました

各エントリの内容は次のとおりです。

- 許容電力は、単一のサーバーコンポーネント (メモリモジュールなど)、サーバーコンポーネントのカテゴリ (すべてのメモリモジュールなど)、またはすべてのサーバー消費電力コンポーネントによって消費される最大電力の合計を表します。
  - 許容可能電力は、CMM からブレードスロットに、許可制限を超えることなく割り当てることができる合計残余電力 (ワット) を示します。
  - 許可制限は、システムがブレードスロットに許容する最大電力を表します。
- 電力の消費または割り当ての構成変数を変更するには、ILOM の Administrator (a) 権限が必要です。

## ▼ すべてのサーバーコンポーネントのサーバー電力割り当てを表示する

1. ILOM サーバー SP CLI にログインします。
2. システム内のすべてのコンポーネントに割り当てられた電力の合計を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/powermgmt allocated_power
```

## ▼ サーバーコンポーネントの電力割り当てを表示する

1. ILOM サーバー SP CLI にログインします。
2. コンポーネントカテゴリ (ファン、CPU など) に割り当てられた電力を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/powermgmt/powerconf/component_type
```

*component\_type* は、コンポーネントカテゴリの名前です。

たとえば、すべての CPU (コンポーネントカテゴリ) に割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/powermgmt/powerconf/CPUs
```

---

注 – 各コマンドでは、コンポーネントによって消費される最大電力の読み取り専用値がワット単位で返されます。

---

3. 特定のコンポーネントに割り当てられた電力を表示するには、次のコマンドを入力します。

-> **show /SP/powermgmt/powerconf/component\_type/component\_name**

- *component\_type* は、コンポーネントカテゴリの名前です。
- *component\_name* は、コンポーネントの名前です。

たとえば、特定の CPU に割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

-> **show /SP/powermgmt/powerconf/CPUs/CPU*n***

*n* は、CPU のインストール位置番号です。

その他のラック搭載型サーバーコンポーネントには、次のようなものがあります。

- **/SP/powermgmt/powerconf/Fans/FB0\_FM*n***
- **/SP/powermgmt/powerconf/PSUs/PS*n***
- **/SP/powermgmt/powerconf/CPUs/MB\_P*n***
- **/SP/powermgmt/powerconf/memory/MB\_P0\_D*n***
- **/SP/powermgmt/powerconf/IO/DBP\_HDD*n***

その他のサーバーモジュールコンポーネントには、次のようなものがあります。

- **/SP/powermgmt/powerconf/CPUs/MB\_P*n***
- **/SP/powermgmt/powerconf/memory/MB\_P0\_D*n***
- **/SP/powermgmt/powerconf/IO/DBP\_HDD*n***

## ▼ すべてのシャーシコンポーネントに対する CMM 電力割り当てを表示する

1. ILOM CMM CLI にログインします。
2. すべてのシャーシシステムコンポーネントに割り当てられた電力の合計を表示するには、次のいずれかの操作を行います。
  - ILOM 3.0.8 以前を実行している場合は、次のコマンドを入力します。  
-> **show /CMM/powermgmt allocated\_power**
  - ILOM 3.0.10 以降を実行している場合は、次のコマンドを入力します。  
-> **show /CMM/powermgmt granted\_power**
3. ブレードスロットに割り当てられる残存電力を表示するには、次のコマンドを入力します。  
-> **show /CMM/powermgmt allocatable\_power**

## ▼ CMM コンポーネント電力割り当てを表示する

1. ILOM CMM CLI にログインします。
2. コンポーネントカテゴリ (ファン、ブレードスロットなど) に割り当てられた電力を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/component_type
```

*component\_type* は、コンポーネントカテゴリの名前です。

たとえば、すべてのブレードスロット (コンポーネントカテゴリ) に割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots
```

---

注 – 各コマンドでは、コンポーネントによって消費される最大電力の読み取り専用値がワット単位で返されます。

---

3. 特定のコンポーネントに割り当てられた電力を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/component_type/component_name
```

*component\_type* は、コンポーネントカテゴリの名前です。

*component\_name* は、コンポーネントの名前です。

たとえば、特定のブレードスロットに割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/BLn
```

*n* は、ブレードスロットの位置番号です。

その他の CMM コンポーネントには、次のようなものがあります。

- /CMM/powermgmt/powerconf/NEMs/NEM*n*
- /CMM/powermgmt/powerconf/Fans/FM*n*
- /CMM/powermgmt/powerconf/PSUs/PS*n*

## ▼ ILOM 3.0.10 でブレードスロットの許容電力または予約電力を表示する

1. ILOM CMM CLI にログインします。
2. すべてのブレードスロットに許容された電力の合計、またはすべての自動送電式 I/O ブレードスロットに予約された電力の合計を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots
```

すべてのブレードスロットに割り当てられた `granted_power` 値と `reserved_power` 値が表示されます。CLI の出力例を参照してください。

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots
/CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots
  Targets:
    BL0
    BL1
    BL2
    BL3
    BL4
    BL5
    BL6
    BL7
    BL8
    BL9
  Properties:
    granted_power = 952
    reserved_power = 876
  Commands:
    cd
    show
```

## ▼ ILOM 3.0.10 でブレードの許容電力または許可制限を表示する

1. ILOM CMM CLI にログインします。
2. 個別のブレードに許容された電力の合計、またはブレードに対して設定された許可制限値を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslot/BLn
```

*n* は、ブレードのスロット位置を表します。

出力例:

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/BL1

/CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/BL1
Targets:

Properties:
  granted_power = 0
  grant_limit = 800

Commands:
  cd
  set
  show
```

---

## 電力制限プロパティの構成

項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
サーバー SP の電力制限プロパティを構成する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">144 ページの「ブレードスロットの許容電力を構成する」</a></li><li>• <a href="#">145 ページの「サーバーの電力割当量プロパティを構成する」</a></li><li>• <a href="#">147 ページの「ILOM 3.0.10 でブレードの許可制限を構成する」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li><li>• SPARC システムサーバー</li><li>• CMM</li></ul>

## 始める前に

- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』で定義されている電力監視用語を確認してください。
- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』で、サーバーの電力制限 (またはサーバーの電力割当量) に関する概念情報を確認してください。
- 使用しているサーバーまたは CMM に ILOM 3.0.6 以降がインストールされている必要があります。この節で説明する手順のいくつかでは、明示されているように、サーバーまたは CMM で ILOM 3.0.10 以降を実行している必要があります。
- ILOM 3.0.10 の時点で、CMM およびブレード用の一部の CLI プロパティーが変更されています。
  - `allocated_power` は `granted_power` に改名されました
  - `allocatable_power` は `grantable_power` に改名されました
  - `permitted_power` は `grant_limit` に改名されました

各エントリの内容は次のとおりです。

- 許容電力は、単一のサーバーコンポーネント (メモリモジュールなど)、サーバーコンポーネントのカテゴリ (すべてのメモリモジュールなど)、またはすべてのサーバー消費電力コンポーネントによって消費される最大電力の合計を表します。
  - 許容可能電力は、CMM からブレードスロットに、許可制限を超えることなく割り当てることができる合計残余電力 (ワット) を示します。
  - 許可制限は、システムがブレードスロットに許容する最大電力を表します。
- 電力管理の構成変数を変更するには、ILOM で Administrator (a) の役割の権限が必要です。

## ▼ ブレードスロットの許容電力を構成する

1. ILOM CMM CLI にログインします。
2. CMM がブレードスロットに割り当てる許容 (最大) 電力を構成するには、次のいずれかの操作を行います。
  - ILOM 3.0.8 以前を使用している場合は、次のコマンドを入力します。

```
-> set /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/bladeslotn
permitted_power=watts
```

`bladeslotn` は、構成するブレードスロットを表します。



例:

```
-> set /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/bladeslot1
permitted_power=1200
Set 'permitted_power' to '1200'
```

■ ILOM 3.0.10 以降を使用している場合は、次のコマンドを入力します。

```
-> set /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/bladeslotn
grant_limit=watts
```

bladeslotn は、構成するブレードスロットを表します。

---

注 - サーバーモジュールの電源が投入されないようにするには、ブレードスロットの許容電力値を 0 に設定します。

---

## ▼ サーバーの電力割当量プロパティを構成する

1. ILOM サーバー SP CLI にログインします。
2. 現在の電力割当量設定を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/powermgmt/budget
```

出力例:

```
/SP/powermgmt/budget
Targets:
Properties:
  activation_state = enabled
  status = ok
  powerlimit = 600 (watts)
  timelimit = default (30 seconds)
  violation_actions = none
  min_powerlimit = 150
  pendingpowerlimit = 600 (watts)
  pendingtimelimit = default
  pendingviolation_actions = none
  commitpending = (Cannot show property)
Commands:
  cd
  show
->
```

### 3. 電力割当量設定を構成するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/powermgmt/budget property=value
```

property=value は、次のいずれかを表します。

- activation\_state=[enabled|disabled]
- pendingpowerlimit=[wattsw|percent%]
- pendingtimelimit=[default|none|seconds]
- pendingviolation\_actions=[none|poweroff]
- commitpending=true

電力割当量プロパティ	説明
アクティベーション状態	電力割当量設定を有効にするには、このプロパティを有効にします。
電力制限	Power Limit は、ワット単位、または最小システム電力と最大システム電力の範囲のパーセントで設定します。 注 - 最小システム電力は、CLI のターゲット /SP/powermgmt/budget min_powerlimit 以下で確認できます。最大システム電力は、Web インタフェースの Allocated Power プロパティまたは CLI のターゲット /SP/powermgmt allocated_power から確認できます。
時間制限	電力使用に制限を課すための次のいずれかの猶予期間を指定します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>Default</b> - プラットフォームによって選択された最適な猶予期間。</li><li>• <b>None</b> - 猶予期間なし。電力の上限が永続的に適用されます。</li><li>• <b>Custom</b> - ユーザー指定の猶予期間。</li></ul>
違反処理	電力制限を猶予期間内に実現できない場合にシステムが実行する処理です。このオプションは、None または Hard Power Off に設定できます。 この設定は、デフォルトでは None に設定されます。

注 - ILOM CLI で powerlimit、timelimit、および violation\_action を設定するには、一致する保留プロパティを設定し、これら 3 つの保留プロパティをグループとしてコミットする必要があります。set /SP/powermgmt/budget commitpending=true を入力してこれらのプロパティをコミットすると、割当量の activation\_state が enabled に設定されるたびに、新しい値が適用されます。

例:

```
-> set /SP/powermgmt/budget activation_state=enabled
Set 'activation_state' to 'enabled'
```

## ▼ ILOM 3.0.10 でブレードの許可制限を構成する

1. ILOM CMM CLI にログインします。

---

注 – ILOM でブレードの許容電力制限を変更するには、Admin (a) の役割のユーザーアカウントが必要です。

---

2. CMM がブレードに割り当てる許容 (最大) 電力を構成するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/BLn grant_limit=watts
```

---

注 – サーバーモジュールの電源が投入されないようにするには、ブレードの許可制限値を 0 に設定します。

---

---

注 – grant\_limit の値を、すでに許容された量 (granted\_power) よりも少ない値にすることはできません。

---

## CMM 電源冗長性プロパティの監視または設定

項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
CMM 電源冗長性プロパティを監視または設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">148 ページの「CMM 電源冗長性プロパティを監視または設定する」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• CMM</li></ul>

### 始める前に

- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』で定義されている電力監視用語を確認してください。
- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』で、CMM システムの電源冗長性についての概念情報を確認してください。

- CMM 電源冗長性プロパティを設定するには、サーバーに ILOM 3.0.6 以降がインストールされている必要があります。
- 電力管理の構成変数を変更するには、ILOM で Administrator (a) の役割の権限が必要です。

## ▼ CMM 電源冗長性プロパティを監視または設定する

1. ILOM CMM CLI にログインします。
2. 電力管理設定を構成するには、次のコマンドを入力します。

-> `set /CMM/powermgmt property=value`

`property=value` は、冗長性 [none|n+n] を表します。

例:

```
-> set /CMM/powermgmt redundancy=none
Set 'redundancy' to 'none'
```

---

注 – 冗長ポリシーを変更すると、サーバーモジュール (ブレード) に割り当てるために CMM に許可された総電力に影響を与えます。シャーシの許容電源 (Permitted Power) は、使用可能な電源が提供できる電力から、使用可能な冗長電力を差し引いた電力に設定されます。さらに、システムで使用できる冗長電力が存在しない場合、電源の損失が起これば、システムが許容電力 (Permitted Power) を下げます。システムが許容電力 (Permitted Power) をすでに割り当てられている電力以下に落とす場合、速やかにサーバモジュールをオフにする手段をとり、割り当てられた電力を削減する必要があります。

---

## 第10章

# ILOM 設定のバックアップおよび復元

### 項目

説明	リンク
ILOM 設定をバックアップする	• <a href="#">150 ページの「ILOM 設定のバックアップ」</a>
ILOM 設定を復元する	• <a href="#">152 ページの「ILOM 設定の復元」</a>
バックアップ XML ファイルを編集する	• <a href="#">153 ページの「バックアップ XML ファイルの編集」</a>
ILOM 設定をデフォルト設定にリセットする	• <a href="#">156 ページの「ILOM 設定をデフォルトにリセットする」</a>

### 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• 設定の管理とファームウェアの更新	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
• Web インタフェース	• ILOM 設定のバックアップおよび復元	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)
• IPMI ホストおよび SNMP ホスト	• ILOM 設定の管理	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコルリファレンスガイド』(820-7379)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

# ILOM 設定のバックアップ

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ILOM 設定をバックアップする	<ul style="list-style-type: none"><li>150 ページの「ILOM 設定のバックアップ」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

## 始める前に

- Admin、User Management、Console、Reset and Host Control、および Read Only (a、u、c、r、o) の役割が割り当てられたユーザーとして ILOM CLI にログインします。ILOM SP 設定の完全なバックアップを実行するには、これらの役割が必要です。
- 上記の役割を持たないユーザーアカウントを使用すると、作成される設定バックアップファイルに ILOM SP 設定のすべてのデータが含まれなくなる場合があります。

## ▼ ILOM 設定のバックアップ

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. `/SP/config` ディレクトリに変更します。次のように入力します。  
-> `cd /SP/config`
3. ユーザーパスワード、SSH 鍵、証明書などの機密データをバックアップする場合は、パスフレーズを入力する必要があります。次のように入力します。  
-> `set passphrase=passphrase`
4. バックアップ操作を開始するには、`/SP/config` ディレクトリ内から次のコマンドを入力します。  
-> `set dump_uri=transfer_method://username:password@ipaddress_or_hostname/directorypath/filename`  
各エントリの内容は次のとおりです。
  - `transfer_method` には、`tftp`、`ftp`、`sftp`、`scp`、`http`、または `https` を指定できます。
  - `username` は、リモートシステムでのユーザーアカウントの名前です (`username` は、`scp`、`sftp`、および `ftp` では必須です。`username` は、`tftp` では使用されず、`http` および `https` では省略可能です)。

- `password` は、リモートシステムでのユーザーアカウントのパスワードです (`password` は、`scp`、`sftp`、および `ftp` では必須です。 `password` は、`tftp` では使用されず、`http` および `https` では省略可能です)。
- `ipaddress_or_hostname` は、リモートシステムの IP アドレスまたはホスト名です。
- `directorypath` は、リモートシステム上の保存位置です。
- `filename` は、バックアップファイルに割り当てられている名前です。

例:

```
-> set dump_uri=
scp://adminuser:userpswd@1.2.3.4/Backup/Lab9/SP123.config
```

バックアップ操作が実行され、操作が完了するとプロンプトが表示されます。通常、バックアップ操作が完了するには 2 - 3 分かかります。

---

注 – バックアップ操作の実行中は、ILOM SP 上のセッションが一時的に停止します。バックアップ操作が完了すると、セッションは正常動作を再開します。

---

## ILOM 設定の復元

項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ILOM 設定を復元する	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">152 ページの「ILOM 設定の復元」</a></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• x86 システムサーバー SP</li> <li>• SPARC システムサーバー</li> <li>• CMM</li> </ul>

### 始める前に

- Admin、User Management、Console、Reset and Host Control、および Read Only (a、u、c、r、o) の役割が割り当てられたユーザーとして ILOM CLI にログインします。ILOM SP 設定の完全な復元を実行するには、これらの役割が必要です。
- 復元操作の実行時には、バックアップファイルの作成に使用したユーザーアカウントの権限と同じかそれ以上の権限を持つユーザーアカウントを使用してください。権限が少ないと、バックアップされている設定データの一部が復元されない場合があります。復元されないすべての設定プロパティは、イベントログに示されます。したがって、イベントログを確認することにより、すべての構成プロパティが復元されたかどうかを検証できます。

## ▼ ILOM 設定の復元

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. /SP/config ディレクトリに変更します。次のように入力します。  
-> `cd /SP/config`
3. バックアップファイルの作成時にパスフレーズが指定されている場合、復元操作を実行するには同じパスフレーズを指定する必要があります。次のように入力します。  
-> `set passphrase=passphrase`

パスフレーズは、バックアップファイルの作成時に使用したパスフレーズと同じである必要があります。

4. 復元操作を開始するには、次のように入力します。

```
-> set load_uri=  
transfer_method://username:password@ipaddress_or_hostname/directorypath/filename
```

各エントリの内容は次のとおりです。

- `transfer_method` には、`tftp`、`ftp`、`sftp`、`scp`、`http`、または `https` を指定できます。
- `username` は、リモートシステムでのユーザーアカウントの名前です (`username` は、`scp`、`sftp`、および `ftp` では必須です。 `username` は、`tftp` では使用されず、`http` および `https` では省略可能です)。
- `password` は、リモートシステムでのユーザーアカウントのパスワードです (`password` は、`scp`、`sftp`、および `ftp` では必須です。 `password` は、`tftp` では使用されず、`http` および `https` では省略可能です)。
- `ipaddress_or_hostname` は、リモートシステムの IP アドレスまたはホスト名です。
- `directorypath` は、リモートシステム上の保存位置です。
- `filename` は、バックアップファイルに割り当てられている名前です。

例:

```
-> set load_uri=  
scp://adminuser:userpswd@1.2.3.4/Backup/Lab9/SP123.config
```

復元操作が実行されます。XML ファイルが構文解析されます。通常、復元操作が完了するには 2 - 3 分かかります。

---

注 – 復元操作の実行中は、ILOM SP 上のセッションが一時的に停止します。復元操作が完了すると、セッションは正常動作を再開します。

---



# バックアップ XML ファイルを編集する

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
バックアップ XML ファイルを編集する	<a href="#">153 ページの「バックアップ XML ファイルの編集」</a>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li><li>• SPARC システムサーバー</li><li>• CMM</li></ul>

## 始める前に

- バックアップされた XML ファイルを別のシステムで使用する前に、ファイルを編集して、IP アドレスなどの特定のシステムに固有の情報をすべて削除する必要があります。

## ▼ バックアップ XML ファイルの編集

バックアップされた XML ファイルの例を次に示します。ファイルの内容は、この手順で使用する例に合わせて省略されています。

```
<SP_config version="3.0">
<entry>
<property>/SP/check_physical_presence</property>
<value>>false</value>
</entry>
<entry>
<property>/SP/hostname</property>
<value>labysystem12</value>
</entry>
<entry>
<property>/SP/system_identifier</property>
<value>SUN BLADE X8400 SERVER MODULE, ILOM v3.0.0.0, r32722
</value>
</entry>
.
.
.
<entry>
<property>/SP/clock/datettime</property>
<value>Mon May 12 15:31:09 2008</value>
</entry>
```

```

.
.
.
<entry>
<property>/SP/config/passphrase</property>
<value encrypted="true">89541176be7c</value>
</entry>
.
.
.
<entry>
<property>/SP/network/pendingipaddress</property>
<value>1.2.3.4</value>
</entry>
.
.
.
<entry>
<property>/SP/network/commitpending</property>
<value>>true</value>
</entry>
.
.
.
<entry>
<property>/SP/services/snmp/sets</property>
<value>enabled</value>
</entry>
.
.
.
<entry>
<property>/SP/users/john/role</property>
<value>aucro</value>
</entry>
<entry>
<entry>
<property>/SP/users/john/password</property>
<value encrypted="true">c21f5a3df51db69fdf</value>
</entry>
</SP_config>

```

1. この XML ファイルの例で、次の点を確認します。

- パスワードとパスフレーズ以外の設定情報は平文です。
- ファイルの最初の設定エントリである `check_physical_presence` プロパティは、`false` に設定されています。デフォルト設定は `true` なので、この設定はデフォルトの ILOM 設定が変更されていることを表しています。

- pendingipaddress と commitpending の設定は、各サーバーに固有であるため、復元操作でバックアップ XML ファイルを使用する前に削除しなければならない設定の例です。
- ユーザーアカウントの john には、a、u、c、r、o の役割が設定されています。デフォルトの ILOM 設定ではユーザーアカウントが設定されていないため、このアカウントはデフォルトの ILOM 設定が変更されていることを表しています。
- SNMP の sets プロパティは、enabled に設定されています。デフォルト設定は disabled です。

## 2. 平文の設定情報を変更するには、値を変更するか、新しい設定情報を追加します。

例:

- ユーザー john に割り当てられている役割を変更するには、テキストを次のように変更します。

```
<entry>
<property>/SP/users/john/role</property>
<value>auo</value>
</entry>
<entry>
```

- 新しいユーザーアカウントを追加し、そのアカウントに a、u、c、r、o の役割を割り当てるには、ユーザー john のアカウントのすぐ下に次のテキストを追加します。

```
<entry>
<property>/SP/users/bill/role</property>
<value>aucro</value>
</entry>
<entry>
```

- パスワードを変更するには、encrypted="true" と暗号化されたパスワード文字列を削除し、パスワードを平文で入力します。たとえば、ユーザー john のパスワードを変更するには、テキストを次のように変更します。

```
<entry>
<property>/SP/users/john/password</property>
<value>newpassword</value>
</entry>
```

## 3. バックアップ XML ファイルに変更を加えたら、同じシステムや別のシステムでの復元操作に使用できるようにファイルを保存します。

# ILOM 設定のリセット

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ILOM 設定をデフォルト設定にリセットする	<ul style="list-style-type: none"><li>156 ページの「ILOM 設定をデフォルトにリセットする」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

## 始める前に

- ILOM 設定をデフォルト設定にリセットするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ ILOM 設定をデフォルトにリセットする

- ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- /SP ディレクトリに変更します。次のように入力してください。  
-> `cd /SP`
- デフォルト設定にリセットするために選択するオプションに応じて、次のいずれかのコマンドを入力します。
  - `all` オプションを使用して ILOM 設定をリセットする場合は、次のように入力します。  
-> `set reset_to_defaults=all`  
ILOM SP が次に再起動すると、ILOM 設定がデフォルト設定に復元されます。
  - `factory` オプションを使用して ILOM 設定をリセットする場合は、次のように入力します。  
-> `set reset_to_defaults=factory`  
ILOM SP が次に再起動すると、ILOM 設定がデフォルト設定に復元され、ログファイルが消去されます。
  - 直前に指定したリセット操作を取り消す場合は、次のように入力します。  
-> `set reset_to_defaults=none`  
ILOM SP の再起動前に `reset_to_defaults=none` コマンドが発行された場合、前に発行された `reset_to_defaults` コマンドは取り消されます。

## 第11章

# ILOM ファームウェアの更新

---

項目	
説明	リンク
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">159 ページの「始める前に」</a></li></ul>
ILOM ファームウェアのアップグレード	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">159 ページの「ILOM ファームウェアのバージョンを識別する」</a></li><li>• <a href="#">160 ページの「新しい ILOM ファームウェアイメージをダウンロードする」</a></li><li>• <a href="#">160 ページの「ファームウェアイメージを更新する」</a></li></ul>
ファームウェア更新時のネットワーク問題をトラブルシューティングする	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">162 ページの「ファームウェア更新時のネットワーク障害から回復する」</a></li></ul>
ILOM SP をリセットする	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">163 ページの「ILOM SP または CMM をリセットする」</a></li></ul>

## 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• 設定の管理とファームウェアの更新	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
• Web インタフェース	• ILOM ファームウェアの更新	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)
• IPMI ホストおよび SNMP ホスト	• ILOM ファームウェア設定の構成	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコルリファレンスガイド』(820-7379)
• CLI および Web インタフェース (CMM のみ)	• ファームウェア更新手順	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) CMM 管理ガイド – Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』(821-3083)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。

[http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights\\_mgr30#hic](http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights_mgr30#hic)

# ILOM ファームウェアの更新

## 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	• <a href="#">159 ページの「始める前に」</a>	• x86 システムサーバー SP • SPARC システムサーバー • CMM
現在の ILOM ファームウェアのバージョンを識別する	• <a href="#">159 ページの「ILOM ファームウェアのバージョンを識別する」</a>	
使用しているシステムのファームウェアをダウンロードする	• <a href="#">160 ページの「新しい ILOM ファームウェアイメージをダウンロードする」</a>	
ファームウェアイメージを更新する	• <a href="#">160 ページの「ファームウェアイメージを更新する」</a>	
ファームウェア更新時のネットワーク問題をトラブルシューティングする	• <a href="#">162 ページの「ファームウェア更新時のネットワーク障害から回復する」</a>	

## 始める前に

この節の手順を実行する前に、次の要件を確認してください。

- システム上で現在動作している ILOM のバージョンを識別します。
- Oracle Sun プラットフォームの製品 Web サイトから、使用しているサーバーまたは CMM のファームウェアイメージをダウンロードして、TFTP、FTP、または HTTP サーバーにイメージを配置します。
- プラットフォームで必要になる場合は、サーバー SP のファームウェアを更新する前に、ホストオペレーティングシステムを停止します。
- Admin (a) 役割のアカウント権限をもつ ILOM ユーザー名とパスワードを取得します。システム上でファームウェアを更新するには、Admin (a) 権限が必要です。
- ファームウェアの更新プロセスの完了には、数分かかります。この間、ほかの ILOM タスクを実行しないでください。ファームウェアの更新が完了すると、システムが再起動します。

---

注 – ILOM 3.0.10 以降では、Oracle Sun モジュラーシステムのシャーシコンポーネントに対するファームウェアの更新を管理するための新しい機能を使用できます。CMM シャーシコンポーネントの ILOM ファームウェアを更新する方法の詳細と手順については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) CMM 管理ガイド – Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』(821-3083) を参照してください。

---

## ▼ ILOM ファームウェアのバージョンを識別する

次の手順に従って、ILOM ファームウェアのバージョンを識別します。

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、`version` と入力します。

次の情報が表示されます。

```
SP firmware 3.0.0.1
SP firmware build number: #####
SP firmware date: Fri Nov 28 14:03:21 EDT 2008
SP filesystem version: 0.1.22
```

## ▼ 新しい ILOM ファームウェアイメージをダウンロードする

1. <http://www.oracle.com/us/products/servers-storage/servers/index.html> にアクセスします。
2. ページの右にある「Downloads」ボックスを展開し、「Drivers and Firmware」リンクをクリックします。
3. 該当する Sun サーバーのページに移動します。
4. 「Downloads and Firmware」タブを選択します。
5. 該当するサーバーの「Download」リンクをクリックします。

## ▼ ファームウェアイメージを更新する

---

注 – プラットフォームで必要になる場合は、サーバー SP のファームウェアを更新する前に、ホストオペレーティングシステムを停止します。

---

---

注 – ホストオペレーティングシステムを正常にシャットダウンするには、ILOM Web インタフェースで「Remote Power Controls」->「Graceful Shutdown and Power Off」オプションを使用するか、ILOM CLI から `stop /SYS` コマンドを発行します。

---

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
2. ファームウェアを更新するためにネットワークに接続されていることを確認します。

例:

- サーバー SP でのネットワーク接続を確認するには、次のように入力します。  
-> `show /SP/network`
- CMM でのネットワーク接続を確認するには、次のように入力します。  
-> `show /CMM/network`

3. 次のコマンドを入力して、ILOM ファームウェアイメージをロードします。

```
-> load -source <supported_protocol>://<server_ip>/<path_to_firmware_image>/<filename.xxx>
```

ファームウェア更新プロセスについての注意が表示され、続いてイメージのロードのためのメッセージプロンプトが表示されます。この注意の内容は、使用しているサーバープラットフォームによって異なります。



4. 指定したファイルのロードについてのプロンプトで、「はい」の場合は「y」、「いいえ」の場合は「n」を入力します。

設定の保存を確認するプロンプトが表示されます。

例:

Do you want to preserve the configuration (y/n)?

5. 設定の保存についてのプロンプトで、「はい」の場合は「y」、「いいえ」の場合は「n」を入力します。

ILOM の既存の設定を保存して更新プロセスの完了後に復元する場合は、「y」と入力します。

---

注 – このプロンプトで「n」と入力すると、これとは別のプラットフォーム固有のプロンプトが表示されます。

---

6. 次のいずれかの操作を実行します。

- システムに 2.x ファームウェアリリースがインストールされている場合、システムは指定されたファームウェアファイルをロードしてから自動的に再起動して、ファームウェアの更新を完了します。手順 7 に進みます。

- SPARC システムに 3.x ファームウェアリリースがインストールされている場合、システムは指定されたファームウェアファイルをロードしてから自動的に再起動して、ファームウェアの更新を完了します。手順 7 に進みます。

- x86 システムに 3.x ファームウェアリリースがインストールされている場合は、BIOS アップデートの延期を確認するプロンプトが表示されます。例:

Do you want to force the server off if BIOS needs to be upgraded (y/n)?

- a. BIOS アップデートの延期についてのプロンプトで、「はい」の場合は「y」、「いいえ」の場合は「n」を入力します。

システムは、指定されたファームウェアファイルをロードしてから自動的に再起動して、ファームウェアの更新を完了します。

---

注 – BIOS についてのプロンプトは、現在 ILOM 3.x ファームウェアリリースが動作している x86 システムでのみ表示されます。このプロンプトで「はい」(y)と答えると、システムが次に再起動するまで、BIOS アップデートが延期されます。「いいえ」(n)と答えると、必要に応じて、ファームウェアの更新時に BIOS が自動的に更新されます。

---

---

注 – SP ファームウェアを更新する場合は、BIOS のデフォルト設定を保持することができません。SP ファームウェアの更新後、新しい BIOS イメージ用のデフォルト設定が自動的にロードされます。

---

- b. 手順 7 に進みます。

- 手順 1 で入力したユーザー名とパスワードを使用して、SSH 接続経由で ILOM サーバーの SP または CMM に再接続します。

---

注 – ファームウェアの更新前に ILOM 設定を保存しなかった場合、初期 ILOM セットアップ手順を実行して ILOM に再接続する必要があります。

---

- 正しいファームウェアバージョンがインストールされていることを確認します。CLI プロンプトで、次のように入力します。

-> `version`

サーバー SP または CMM のファームウェアバージョンは、インストールしたファームウェアバージョンと一致する必要があります。

## ▼ ファームウェア更新時のネットワーク障害から回復する

---

注 – ファームウェア更新プロセスを実行しているときにネットワーク障害が発生した場合、ILOM は自動的にタイムアウトし、システムを再起動します。

---

- ネットワークの問題に対処し、解決します。
- ILOM SP に再接続します。
- ファームウェア更新プロセスを再起動します。

---

## ILOM SP または CMM のリセット

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ILOM サービスプロセスをリセットする	<a href="#">163 ページの「ILOM SP または CMM をリセットする」</a>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li></ul>

## 始める前に

- SP をリセットするには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。
- ILOM/BIOS ファームウェアを更新したら、ILOM SP または CMM をリセットする必要があります。

ILOM サービスプロセッサ (SP) のリセットが必要な場合は、ホスト OS に影響を与えずにリセットできます。ただし、SP をリセットすると、現在の ILOM セッションが切断され、リセット中は SP が管理不可能な状態になります。

## ▼ ILOM SP または CMM をリセットする

1. ILOM サーバー SP CLI または ILOM CMM CLI にログインします。
2. `reset` コマンドを使用して、サーバー SP または CMM の電源を起動します。

例:

```
-> reset /SP
```

または

```
-> reset /CMM
```

SP または CMM がリセットされ、再起動します。



## 第12章

# リモートホストのストレージリダイレクトの管理と ILOM リモートコンソールのセキュリティ保護

### 項目

説明	リンク
ストレージリダイレクトを設定してストレージデバイスをリダイレクトする	<ul style="list-style-type: none"><li>166 ページの「ストレージリダイレクトの初期セットアップタスクの実行」</li><li>176 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」</li></ul>
ILOM リモートコンソールのロックオプションを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>182 ページの「ILOM リモートコンソールのセキュリティ保護」</li></ul>

### 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
• 概念	• リモートホスト管理オプション	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』 (820-7370)
• Web インタフェース	• リモートホストのリダイレクトの管理と ILOM リモートコンソールのセキュリティ保護	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』 (820-7373)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

# ストレージリダイレクトの初期セットアップタスクの実行

手順	タスク	説明	プラットフォーム機能のサポート
1	この節の初期セットアップ手順を実行する前に、すべての要件が満たされていることを確認します。	<ul style="list-style-type: none"><li>166 ページの「始める前に」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li></ul>
2	Storage Redirection サービスをシステムで開始します。	<ul style="list-style-type: none"><li>167 ページの「Mozilla Firefox Web ブラウザを使用して Storage Redirection サービスを起動する」</li></ul> または <ul style="list-style-type: none"><li>170 ページの「Internet Explorer (IE) Web ブラウザを使用して Storage Redirection サービスを起動する」</li></ul>	
3	Storage Redirection クライアントをダウンロードしてインストールします。	<ul style="list-style-type: none"><li>172 ページの「Storage Redirection クライアントをダウンロードしてインストールする」</li></ul>	

注 – ILOM 3.0 の Storage Redirection CLI は、Oracle の Sun x86 プロセッサベースのすべてのサーバーと SPARC プロセッサベースの一部のサーバーでサポートされています。この機能は、ILOM 2.0 を実行するシャーシ監視モジュール (chassis monitoring module、CMM) または x86 プロセッサベースのサーバーではサポートされません。

## 始める前に

システムでストレージリダイレクトをセットアップする前に、次の要件を満たす必要があります。

- ローカルシステムからリモートホストサーバー SP の ILOM Web インタフェースへの接続が確立されている必要があります。
- サーバーモジュール SP が ILOM 3.0 以降を実行している必要があります。

- ローカルシステムに Java Runtime Environment (1.5 以降) がインストールされている必要があります。最新の Java Runtime Environment をダウンロードするには、<http://java.com> を参照してください。

---

注 – 使用しているデスクトップで JAVA\_HOME 環境が設定されていない場合は、フルパスを入力しなければならないことがあります

---

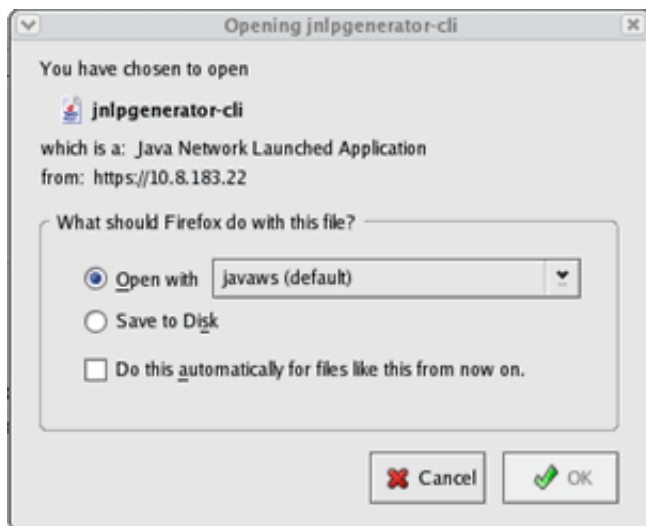
- Storage Redirection サービスの起動時に、32 ビットの Java Development Kit (JDK) ファイルを指定する必要があります。以下の手順で説明するように、最初にこのファイルをディスクに保存し、その後コマンドラインインタフェースから Storage Redirection サービスを直接実行するか、または CLI から Storage Redirection プロパティを使用する前に、このファイルをデフォルトのアプリケーションで開き、その後 ILOM Web インタフェースから Storage Redirection サービスを起動することができます。
- ILOM で有効なユーザーアカウントを持つユーザーはすべて、そのユーザーのローカルシステムで Storage Redirection サービスまたはクライアントを起動したりインストールしたりすることができます。ただし、Storage Redirection CLI の初期セットアップが完了したあと、リモートサーバーでストレージデバイス (CD/DVD または ISO イメージ) のリダイレクトを開始または停止するには、有効な Admin (a) 役割または Console (c) 役割のアカウントを入力する必要があります。
- Storage Redirection CLI に用意されるデフォルトのネットワーク通信ポートは、2121 です。このデフォルトのソケットポートを使用すると、Storage Redirection CLI がネットワーク経由でリモートホストサーバーの SP と通信することができます。デフォルトのネットワークポートを変更する必要がある場合は、Jnlpgenerator-cli ファイルを編集して、デフォルトのポート番号 (2121) を手動でオーバーライドする必要があります。このポートを変更する手順については、41 ページの「[シリアルポート設定を表示および構成する](#)」を参照してください。

## ▼ Mozilla Firefox Web ブラウザを使用して Storage Redirection サービスを起動する

Mozilla Firefox Web ブラウザを使用して Storage Redirection CLI 用に Storage Redirection サービスを起動するときに 32 ビット JDK を指定するには、次の手順を実行します。

1. ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
2. 「Remote Control」 --> 「Redirection」 --> 「Launch Service」をクリックします。

サービスを起動するために選択されたファイルの種類を示すダイアログが表示されます。



3. 「Opening jnlpgenerator-cli」ダイアログで、次の作業を行います。
  - a. 32 ビット JDK ファイルにアクセスするための次のいずれかのオプションを指定します。
    - **Save to Disk** – ローカルシステムに jnlpgenerator-cli ファイルを保存し、サービスをコマンド行から直接実行するには、「Save it to disk」を選択して、「OK」をクリックします。

このオプションを選択すると、今後サービスを起動するために ILOM Web インタフェースにサインインする必要がなくなります。サービスをコマンドウィンドウまたは端末から直接起動できるようになります。
    - **Open with...** – サービスを ILOM Web インタフェースから直接実行するには、「Open it with javaws (default)」(32 ビット JDK ファイル)を選択して、「OK」をクリックします。

このオプションを選択すると、jnlp ファイルはローカルシステムに保存されず、今後サービスを起動するには、Storage Redirection CLI を起動する前に ILOM Web インタフェースにサインインする必要があります。
  - b. (省略可能) 「Do this automatically for files like this from now on」チェックボックスを選択し、「OK」をクリックします。



---

注 – ILOM Web インタフェースからサービスを起動するたびに「Opening Jnlpgenerator-cli dialog」ダイアログが再表示されないようにするには、「Do this automatically for files like this from now on.」チェックボックスを選択 (有効化) します。ただし、このオプションを有効にすると、ILOM Web インタフェースからサービスを起動したりインストールしたりするときこのダイアログを表示することができなくなります。

---

---

注 – 将来、ストレージリダイレクト機能のデフォルト通信ポート番号 (2121) の変更が必要になった場合、「Opening Jnlpgenerator-cli」ダイアログを表示させ、使用しているシステムに jnlpgenerator-cli ファイルを保存して編集する必要があります。このような場合は、「Always perform this action when handling files of this type」オプションを選択 (有効化) することをお勧めしません。デフォルトのポート番号の変更の詳細については、[41 ページの「シリアルポート設定を表示および構成する」](#)を参照してください。

---

#### 4. 次のいずれかの操作を実行します。

---

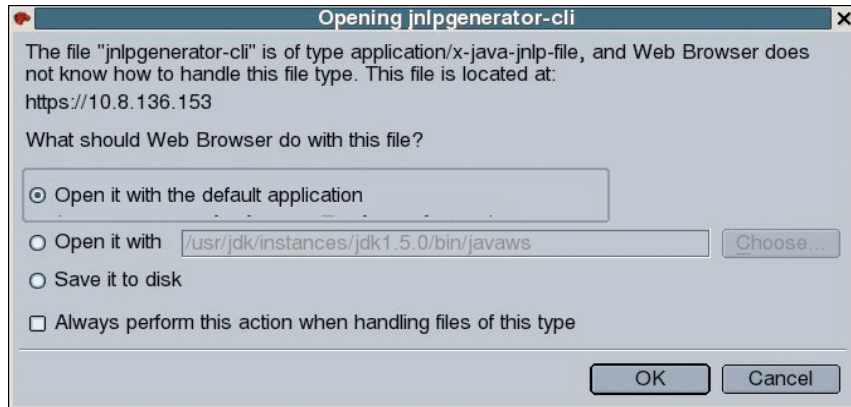
手順 3-a での選択	実行する手順
jnlpgenerator-cli ファイルを保存する	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 「Save As」ダイアログで、jnlpgenerator-cli ファイルをローカルシステム上に保存します。</li><li>2. コマンド行からサービスを起動するために、コマンドウィンドウまたは端末を開きます。</li><li>3. jnlpgenerator-cli ファイルをインストールした場所に移動し、javaws rconsole.jnlp コマンドを発行してサービスを起動します。</li></ol> <p>例:</p> <pre>-&gt; cd &lt;jnlp file location&gt;javaws rconsole.jnlp</pre>
- または -	
Web インタフェースからサービスを直接実行する	<ul style="list-style-type: none"><li>• 「Warning Security」ダイアログで、「Run」をクリックして Storage Redirection サービスを起動します。</li></ul>

---

## ▼ Internet Explorer (IE) Web ブラウザを使用して Storage Redirection サービスを起動する

ILOM の Storage Redirection CLI 機能用に Storage Redirection サービスを起動する前に、次の手順を実行します。これらの手順は、32 ビット JDK ファイルを登録したあとに Storage Redirection サービスを起動する方法を示しています。

1. Windows システムで Storage Redirection サービスを最初に起動する前に、次の手順を実行して 32 ビット JDK ファイルを登録する必要があります。
  - a. Windows クライアントで、Windows エクスプローラ (Internet Explorer ではありません) を開きます。
  - b. Windows エクスプローラのダイアログで、「ツール」-->「フォルダオプション」を選択し、「ファイルの種類」タブを選択します。
  - c. 「ファイルの種類」タブで、次の操作を行います。
    - 登録されたファイルの種類の一覧で JNLP を選択し、「変更」をクリックします。
    - 「ファイルを開くプログラムの選択」ダイアログで、「参照」をクリックして 32 ビット JDK ファイルを選択します。
    - 「この種類のファイルを開くときは、選択したプログラムをいつも使う」チェックボックスを選択します。
    - 「OK」をクリックし、ILOM Web インタフェースで Storage Redirection 用のサービスを起動します。
2. (32 ビット JDK ファイルの登録後に) Storage Redirection サービスを起動するには、次の操作を行います。
  - a. ILOM SP の Web インタフェースにログインします。
  - b. 「Remote Control」-->「Redirection」-->「Launch Service」をクリックします。  
「Opening Jnlpgenerator-cli」ダイアログが表示されます。



- c. 「Opening Jnlpgenerator-cli」ダイアログで、次のいずれかの操作を実行します。
- **Save it to Disk** – ローカルシステムに jnlpgenerator-cli ファイルを保存し、サービスをコマンド行から直接実行するには、「Save it to disk」を選択して、「OK」をクリックします。  
このオプションを選択すると、今後サービスを起動するために ILOM Web インタフェースにサインインする必要がなくなります。サービスをコマンドウィンドウまたは端末から直接起動できるようになります。
  - **Open with...** – サービスを ILOM Web インタフェースから直接実行するには、「Open it with the javaws (default)」(32 ビット JDK ファイル)を選択して、「OK」をクリックします。  
このオプションを選択すると、jnlp ファイルはローカルシステムに保存されず、今後サービスを起動するには、Storage Redirection CLI を起動する前に ILOM Web インタフェースにサインインする必要があります。

---

**注** – ILOM Web インタフェースからサービスを起動するたびに「Opening Jnlpgenerator-cl」ダイアログが再表示されないようにするには、「Always perform this action when handling files of this type」チェックボックスを選択 (有効化) します。ただし、このオプションを有効にすると、ILOM Web インタフェースからサービスを起動したりインストールしたりするときこのダイアログを表示することができなくなります。

---

---

**注** – 将来、ストレージリダイレクト機能のデフォルト通信ポート番号 (2121) の変更が必要になった場合、「Opening Jnlpgenerator-cli」ダイアログを表示させ、使用しているシステムに jnlpgenerator-cli ファイルを保存して編集する必要があります。このような場合は、「Always perform this action when handling files of this type」オプションを選択 (有効化) することをお勧めしません。デフォルトのポート番号の変更の詳細については、[41 ページの「シリアルポート設定を表示および構成する」](#)を参照してください。

---

d. 次のいずれかの操作を実行します。

手順 C での選択	実行する手順
jnlpgenerator-cli ファイルを保存する	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 「Save As」ダイアログで、jnlpgenerator-cli ファイルをローカルシステム上に保存します。</li><li>2. コマンド行からサービスを起動するために、コマンドウィンドウまたは端末を開きます。</li><li>3. jnlpgenerator-cli ファイルをインストールした場所に移動し、javaws rconsole.jnlp コマンドを発行してサービスを起動します。</li></ol> <p>例:</p> <pre>-&gt; cd &lt;jnlp file location&gt;javaws rconsole.jnlp</pre>
- または -	
Web インタフェースからサービスを直接実行する	<ul style="list-style-type: none"><li>• 「Warning Security」ダイアログで、「Run」をクリックして Storage Redirection サービスを起動します。</li></ul>

Storage Redirection サービスの起動に失敗すると、エラー状況を示すエラーメッセージが表示されます。一方、エラーメッセージが表示されなかった場合は、サービスが起動しており、ユーザー入力を待機しています。

## ▼ Storage Redirection クライアントをダウンロードしてインストールする

次の手順に従って、ローカルシステムに Storage Redirection クライアントをダウンロードし、インストールします。

**注** – Storage Redirection クライアントは、1 回限りのクライアントインストールです。

1. SP の ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」-->「Redirection」を選択します。  
「Launch Redirection」ページが表示されます。
2. 「Download Client」をクリックします。  
「Opening StorageRedir.jar」ダイアログが表示されます。



3. 「Opening StorageRedir.jar」ダイアログで、「Save it to Disk」をクリックし、「OK」をクリックします。

「Save As」ダイアログが表示されます。

---

注 - .jar ファイルをほかのリモートクライアントにインストールするたびに「Opening StorageRedir」ダイアログが再表示されないようにするには、「Always perform this action when handling files of this type」チェックボックスを選択 (有効化) します。ただし、このオプションを有効にすると、今後 .jar ファイルをダウンロードするときこのダイアログ (「Opening StorageRedir」) を表示することができなくなります。

---

4. 「Save As」ダイアログで、StorageRedir.jar ファイルをローカルシステム上に保存します。

# ストレージデバイスをリダイレクトするために Storage Redirection CLI を起動する

手順	タスク	リンク	プラットフォーム機能のサポート
1	Storage Redirection CLI を使用する前に、すべての要件が満たされていることを確認します。	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">175 ページの「始める前に」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li><li>• SPARC システムサーバー</li></ul>
2	Storage Redirection CLI を起動します。	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">176 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」</a></li></ul>	
3	必要に応じて、Storage Redirection サービスが動作していることを確認します。	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">177 ページの「Storage Redirection サービスが動作していることを確認する」</a></li></ul>	
4	必要に応じて、コマンド行のヘルプを表示します。または Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法の詳細を学習します。	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">178 ページの「Storage Redirection CLI のヘルプ情報を表示する」</a></li></ul>	
5	CLI からストレージデバイスをリダイレクトします。	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">178 ページの「ストレージデバイスのリダイレクトを開始する」</a></li></ul>	
6	アクティブなストレージデバイスのリストを表示します。	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">179 ページの「アクティブなストレージリダイレクトを表示する」</a></li></ul>	
7	ストレージデバイスのリダイレクトを停止します。	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">180 ページの「ストレージデバイスのリダイレクトを停止する」</a></li></ul>	

## 始める前に

この節の手順を実行する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

- ローカルシステムで Storage Redirection サービスが起動している必要があります。ローカルシステムにサービスがインストールされている場合は、コマンドウィンドウまたは端末から起動できます。サービスがローカルシステムにインストールされていない場合は、サービスを ILOM Web インタフェースから起動する必要があります。Storage Redirection サービスの開始またはインストール方法については、167 ページの「[Mozilla Firefox Web ブラウザを使用して Storage Redirection サービスを起動する](#)」を参照してください。
- ローカルシステムに Storage Redirection クライアント (StorageRedir.jar) がインストールされている必要があります。Storage Redirection クライアントのインストール方法の詳細については、172 ページの「[Storage Redirection クライアントをダウンロードしてインストールする](#)」を参照してください。
- ローカルシステムに Java Runtime Environment (1.5 以降) がインストールされている必要があります。最新の Java Runtime Environment をダウンロードするには、<http://java.com> を参照してください。
- リモートサーバーでストレージデバイス (CD/DVD または ISO イメージ) のリダイレクトを開始または停止するには、ILOM に有効な Admin (a) 役割または Console (c) 役割のアカウントが必要です。ユーザーアカウントおよび役割の詳細については、59 ページの「[ユーザーアカウントに役割を割り当てる](#)」を参照してください。

---

**注** – ILOM で有効なユーザーアカウントを持つユーザーはすべて、Storage Redirection CLI を (コマンドウィンドウまたは端末から) 起動したり、サービスの状態を確認したり、アクティブなストレージリダイレクトの発生を表示したりすることができます。

---

- Windows システムでは、CD-ROM およびフロッピーイメージのリダイレクトで、大文字の「C:\」と小文字の「c:\」の両方を使用できます。ただし、CD-ROM ドライブおよびフロッピードライブのリダイレクトでは、大文字 (「D:\」、 「A:\」) のみを使用できます。
- Storage Redirection のコマンド行モードの詳細については、241 ページの「[Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法](#)」を参照してください。

## ▼ コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する

---

注 – Storage Redirection CLI を起動する前に、Storage Redirection サービスを起動している必要があります。サービスを起動する手順については、167 ページの「[Mozilla Firefox Web ブラウザを使用して Storage Redirection サービスを起動する](#)」を参照してください。

---

### 1. コマンド行インタフェースを開きます。

例:

- Windows システムの場合: 「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」をクリックし、cmd と入力して、「OK」をクリックします。
- Solaris または Linux システムの場合: デスクトップで端末を開きます。

### 2. 次のいずれかの操作を実行します。

- 対話型シェルモードからコマンドを入力するには、次の手順を実行します。

- a. コマンド行インタフェースで、cd コマンドを使用して、Storage Redirection クライアント (StorageRedir.jar) がインストールされているディレクトリに移動します。

例:

```
cd <my_settings>/<storage_redirect_directory>
```

- b. ディレクトリプロンプトで、次のコマンドを入力して Storage Redirection CLI を起動します。

```
java -jar StorageRedir.jar
```

例:

```
C:\Documents and Settings\<redirectstorage>java -jar StorageRedir.jar  
<storageredir> プロンプトが表示されます。
```

---

注 – Windows を使用している場合、ターゲットドライブディレクトリの大文字を指定する必要があります。たとえば、c ドライブの場所を使用している場合は、c:\ではなく c:\ と指定する必要があります。

---

- 非対話型シェルモードからコマンドを入力するには、次の手順を実行します。

- a. コマンド行インタフェースで、シェルプロンプト (\$) に Storage Redirection CLI を起動するコマンド (java -jar StorageRedir.jar) を入力します。

```
$ java -jar StorageRedir.jar
```



---

注 – JAVA\_HOME 環境が設定されていない場合は、Java バイナリへのフルパスを使用しなければならないことがあります。たとえば、JDK パッケージを /home/user\_name/jdk の下にインストールした場合は、次のように入力します。/home/user\_name/jdk/bin/java -jar ...

---

---

注 – Storage Redirection CLI の起動に失敗すると、エラー状況を示す詳細なエラーメッセージが表示されます。エラーメッセージが表示されない場合は、Storage Redirection CLI はユーザー入力を受け付ける準備ができています。

---

## ▼ Storage Redirection サービスが動作していることを確認する

---

注 – 以下の手順では、Storage Redirection CLI がすでにコマンドウィンドウまたは端末から起動されていることが前提となっています。Storage Redirection CLI を起動する手順については、[176 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。

---

- <storageredir> プロンプトで、次のコマンドを入力して、Storage Redirection サービスがアクティブであることを確認します。

```
test-service
```

例:

```
<storageredir> test-service
```

または、これと同じコマンド (test-service) を非対話型シェルモードの構文を使用して入力することもできます。詳細は、[241 ページの「Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法」](#)を参照してください。

サービス接続の成功または失敗を示すメッセージが表示されます。

---

注 – サービス接続に失敗する場合は、ILOM Web インタフェースから、またはコマンドウィンドウ (サービスがインストールされている場合) から javaws rconsole.jnlp コマンドを発行することにより、Storage Redirection サービスを起動する必要があります。詳細は、[167 ページの「Mozilla Firefox Web ブラウザを使用して Storage Redirection サービスを起動する」](#)を参照してください。

---

## ▼ Storage Redirection CLI のヘルプ情報を表示する

注 – 以下の手順では、Storage Redirection CLI がすでにコマンドウィンドウまたは端末から起動されていることが前提となっています。Storage Redirection CLI を起動する手順については、176 ページの「[コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する](#)」を参照してください。

- <storageredir> プロンプトで、次のコマンドを入力して、コマンド行のヘルプを表示します。

**help**

例:

```
<storageredir> help
```

コマンドの構文および使用方法に関する次の情報が表示されます。

Usage:

```
list [-p storageredir_port] [remote_SP]
start -r redir_type -t redir_type_path
      -u remote_username [-s remote_user_password]
      [-p storageredir_port] remote_SP
stop -r redir_type -u remote_username
     [-s remote_user_password] [-p storageredir_port] remote_SP
stop-service [-p storageredir_port]
test-service [-p storageredir_port]
help
version
quit
```

または、これと同じコマンド (help) を非対話型シェルモードの構文を使用して入力することもできます。詳細は、241 ページの「[Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法](#)」を参照してください。

## ▼ ストレージデバイスのリダイレクトを開始する

注 – 以下の手順では、Storage Redirection CLI がすでにコマンドウィンドウまたは端末から起動されていることが前提となっています。Storage Redirection CLI を起動する手順については、176 ページの「[コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する](#)」を参照してください。

---

注 – 以下の手順で示すコマンドは、ひと続きの文字列として入力してください。

---

注 – Windows システムでは、CD-ROM およびフロッピーイメージのリダイレクトで、大文字の「C:\」と小文字の「c:\」の両方を使用できます。ただし、CD-ROM ドライブおよびフロッピードライブのリダイレクトでは、大文字（「D:\」、「A:\」）のみを使用できます。

---

- <storageredir> プロンプトで、start コマンドと、そのあとにリモート SP のリダイレクトデバイスの種類、デバイスへのパス、リモート SP ユーザー名とパスワード、および IP アドレスに関するコマンドとプロパティを入力します。

例:

```
<storageredir> start -r redir_type -t redir_type_path -u remote_username [-s remote_user_password] [-p non_default_storageredir_port] remote_SP_IP
```

---

注 – Windows を使用している場合、ドライブパスの大文字を指定する必要があります。たとえば、A ドライブの場所を使用している場合は、a:\ではなく A:\を指定する必要があります。

---

または、これと同じコマンド (start) を非対話型シェルモードの構文を使用して入力することもできます。詳細は、[241 ページの「Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法」](#)を参照してください。

---

注 – リモートサーバーのストレージデバイスのリダイレクトを開始するには、有効な Admin 役割または Console 役割のアカウントを指定する必要があります (-u remote\_username [-s remote\_user\_password])。パスワードコマンド (-s remote\_user\_password) を指定しないと、システムが自動的にパスワードの入力を要求します。

---

## ▼ アクティブなストレージリダイレクトを表示する

---

注 – 以下の手順では、Storage Redirection CLI がすでにコマンドウィンドウまたは端末から起動されていることが前提となっています。Storage Redirection CLI を起動する手順については、[176 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。

---

- <storageredir> プロンプトで、list コマンドと、その後ろにリモートホストサーバー SP のデフォルト以外のストレージリダイレクトポートおよび IP アドレスに対するサブコマンドとプロパティを入力します。

例:

```
<storageredir> list [-p non_default _storageredir_port] remote_SP
```

または、これと同じコマンド (list) を非対話型シェルモードの構文を使用して入力することもできます。詳細は、[241 ページの「Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法」](#)を参照してください。

指定された各サーバー SP のアクティブなストレージリダイレクトを示すリストが表示されます。

## ▼ ストレージデバイスのリダイレクトを停止する

---

注 – 以下の手順では、Storage Redirection CLI がすでにコマンドウィンドウまたは端末から起動されていることが前提となっています。Storage Redirection CLI を起動する手順については、[176 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。

---

---

注 – 以下の手順で示すコマンドは、ひと続きの文字列として入力してください。

---

- <storageredir> プロンプトで、stop コマンドと、その後ろにリモートホストサーバー SP のストレージデバイスの種類、リモート SP ユーザー名とパスワード、ストレージリダイレクトポート、および IP アドレスに関するコマンドとプロパティを入力します。

例:

```
<storageredir> stop -r redir_type -u remote_username [-s remote_user_password] [-p non_default _storageredir_port] remote_SP
```

または、これと同じコマンド (stop) を非対話型シェルモードの構文を使用して入力することもできます。詳細は、[241 ページの「Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法」](#)を参照してください。

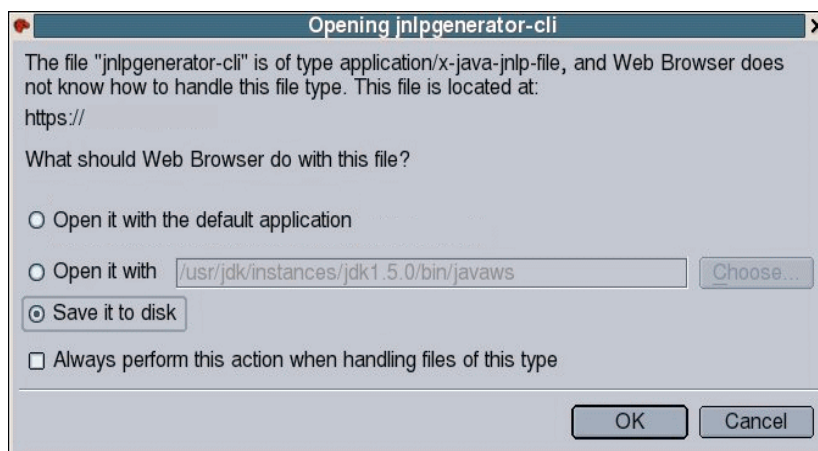
---

注 – リモートサーバーのストレージデバイスのリダイレクトを停止するには、有効な Admin 役割または Console 役割のアカウントを指定する必要があります (-u remote\_username [-s remote\_user\_password])。パスワードコマンド (-s remote\_user\_password) を指定しないと、システムが自動的にパスワードの入力を要求します。

---

## ▼ Storage Redirection のデフォルトネットワークポート 2121 を変更する

1. SP の ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」 --> 「Redirection」 を選択します。  
「Launch Redirection」 ページが表示されます。
2. 「Launch Service」 をクリックします。  
「Opening Jnlpgenerator-cli」 ダイアログが表示されます。



3. 「Opening Jnlpgenerator-cli」 ダイアログで、「Save it to disk」を選択し、「OK」をクリックします。  
「Save As」 ダイアログが表示されます。
4. 「Save As」 ダイアログで、jnlpgenerator-cli ファイルを保存する場所を指定します。

5. テキストエディタを使用して `jnlpgenerator-cli` ファイルを開き、このファイルで参照されているポート番号を変更します。

例:

```
<application-desc>
<argument>cli</argument>
<argument>2121</argument>
</application-desc>
```

`<application-desc>` で、2 つ目の引数を、使用する任意のポート番号に変更することができます。

6. 変更を保存し、`jnlpgenerator-cli` ファイルを閉じます。
7. `javaws` を使用して、ローカルクライアントから Storage Redirection サービスを起動します。

例:

```
javaws jnlpgenerator-cli
```

---

注 – 指定されたデフォルトポート番号を使用しない場合は、ストレージリダイレクトを開始、停止、または表示するたびに、Storage Redirection コマンド行インタフェースでデフォルト以外のポート番号を識別する必要があります。

---

## ILOM リモートコンソールのセキュリティ保護

### 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
始める前に	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">183 ページの「始める前に」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li></ul>
ILOM リモートコンソールのロックオプションを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">183 ページの「ILOM リモートコンソールのロックオプションを編集する」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• SPARC システムサーバー</li><li>• CMM</li></ul>

## 始める前に

ILOM リモートコンソールのロックオプションを設定する前に、次の要件を満たす必要があります。

- ILOM で ILOM リモートコンソールロックオプションを有効にするには、ユーザーアカウントに Console (c) 役割の権限が与えられている必要があります。
- サーバー SP で ILOM 3.0.4 以降を実行している必要があります。

## ▼ ILOM リモートコンソールのロックオプションを編集する

1. ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。

---

注 – CMM CLI にログインしたら、ILOM リモートコンソールの KVMS ロックオプションを有効または無効にする SP ターゲットに移動します。

---

2. SP KVMS サービスの管理に関連するプロパティをすべて表示するには、次のように入力します。

```
-> help /SP/services/kvms
```

次のサンプル出力が表示されます。

```
/SP/services/kvms : Management of the KVMS service
```

```
Targets:
```

```
Properties:
```

```
    custom_lock_key : KVMS custom lock key
```

```
    custom_lock_key : Possible values = esc, end, tab, ins, del, home, enter, space, break, backspace, pg_up, pg_down, scr_lck, sys_rq, num_plus, num_minus, f1, f2, f3, f4, f5, f6, f7, f8, f9, f10, f11, f12, a-z, 0-9, !, @, #, $, %, ^, &, *, (, ), -, _, =, +, ,, |, ~, \, [, {, ], }, ;, :, ', ", <, ., >, /, ?
```

```
    custom_lock_key : User role required for set = c
```

```
    custom_lock_modifiers : KVMS custom lock modifiers
```

```
    custom_lock_modifiers : Possible values = l_alt, r_alt, l_shift, r_shift, l_ctrl, r_ctrl, l_gui, r_gui
```

```
    custom_lock_modifiers : User role required for set = c
```

```
    lockmode : KVMS lock mode
```

```
    lockmode : Possible values = disabled, windows, custom
```

```
    lockmode : User role required for set = c
```

```
    mousemode : KVMS mouse mode
```

```
    mousemode : Possible values = absolute, relative
```

```
    mousemode : User role required for set = c
```

```
    servicestate : KVMS service state
```

```
    servicestate : Possible values = enabled, disabled
```

```
    servicestate : User role required for set = a
```



### 3. SP KVMS ターゲットプロパティを管理するには、cd、set、または show コマンドを使用して次のいずれかのタスクを実行します。

タスク	指示書
KVMS ターゲットに移動します。	<ul style="list-style-type: none"><li>• KVMS ターゲットに移動するには、次のコマンドを入力します。 -&gt; <b>cd /SP/services/kvms</b></li></ul> <p>注 - KVMS ロックモードオプションを有効または無効にする前に、KVMS ターゲットに移動する必要があります。</p>
KVMS ロックモードプロパティを表示します。	<ul style="list-style-type: none"><li>• KVMS ロックモードプロパティを表示するには、次のコマンドを入力します。 -&gt; <b>show</b></li></ul> <p>SP KVMS サービスの管理に関連するターゲット、プロパティ、およびコマンドが表示されます。</p>
ILOM リモートコンソールのロックモード機能を無効にします。	<ul style="list-style-type: none"><li>• ILOM リモートコンソールのロックモード機能を無効にするには、次のコマンドを入力します。 -&gt; <b>set lockmode=disabled</b></li></ul>
標準の Windows ホストロックモード機能を有効にします。	<ul style="list-style-type: none"><li>• Windows システムで標準のロックモード機能を有効にするには、次のコマンドを入力します。 -&gt; <b>set lockmode=windows</b></li></ul>
カスタムホストロックモード機能を有効にします。	<ul style="list-style-type: none"><li>• Linux、Solaris、または Windows の各システムでカスタムロックモード機能を有効にするには、次のコマンドを入力します。 -&gt; <b>set lockmode=custom</b> -&gt; <b>set custom_lock_key=&lt;カスタムロックキーを指定&gt;</b> -&gt; <b>set lock_modifiers=&lt;最大 4 つのカスタムロック修飾子を指定&gt;</b></li></ul> <p>注 - 指定する各カスタムロック修飾子はコンマで区切る必要があります。</p>

#### 有効なカスタムロックモードの例

この例では、ホスト OS で、オペレーティングシステムからログオフする次のカスタムキーボードショートカットシーケンスを定義済みです。

```
<shift><control><backspace>
```

ILOM リモートコンソールセッションの終了時にこのカスタムキーボードショートカットシーケンスを実装するには、ILOM CLI で次の KVMS プロパティを設定します。

```
/SP/services/kvms
  Targets:

  Properties:
    custom_lock_key = backspace
    custom_lock_modifiers = l_shift, l_ctrl
    lockmode = custom
    mousemode = absolute
    servicestate = enabled
```

## 第13章

# リモートホストの電源状態、BIOS 起動デバイス、およびホストサー バーコンソールの管理

### 項目

説明	リンク
リモートサーバーモジュールの電源状態を管理する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">188 ページの「ホストサーバーまたは CMM へのリモート電源状態コマンドの実行」</a></li></ul>
リモートホスト制御 - x86 システム SP の起動デバイス	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">190 ページの「x86 ホスト上の BIOS 起動デバイスの管理」</a></li></ul>
ホストコンソールの起動、表示プロパティの変更、およびコンソール履歴やブートログの表示方法を学習する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">192 ページの「ホストコンソールの管理」</a></li></ul>

### 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
<ul style="list-style-type: none"><li>• 概念</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• リモートホスト管理オプション</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
<ul style="list-style-type: none"><li>• Web インタフェース</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• リモートホストの電源状態の管理</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

# ホストサーバーまたは CMM へのリモート電源状態コマンドの実行

## 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ホストサーバーのリモート電源制御を管理する	<ul style="list-style-type: none"><li>188 ページの「サーバー SP または CMM CLI からリモート電源状態コマンドを実行する」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 システムサーバー SP</li><li>SPARC システムサーバー</li><li>CMM</li></ul>

## サーバー SP または CMM CLI からリモート電源状態コマンドを実行する

コマンドウィンドウまたは端末から、次の表 13-1 および表 13-2 で説明されているコマンドを実行して、離れた場所からホストサーバーや CMM の電源状態を制御できます。

表 13-1 サーバー SP のリモート電源制御コマンド

電源状態コマンド	説明	コマンド構文例
start	<p>start コマンドを使用して、リモートホストサーバーの電源を投入します。</p> <p>start コマンドを実行するには、次のように入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>サーバー SP CLI の場合:</li><li>1 つの専用 SP 付きブレードサーバーの CMM CLI の場合:</li><li>2 つの専用 SP 付きブレードサーバーの CMM CLI の場合:</li></ul>	<pre>start /SYS start /CH/BLn/SYS start /CH/BLn/NODEn/SYS</pre>
stop	<p>stop コマンドを使用して、ホストサーバーの電源を切断する前に、OS を正常に停止します。</p> <p>stop コマンドを実行するには、次のように入力します。</p>	

表 13-1 サーバー SP のリモート電源制御コマンド (続き)

電源状態コマンド	説明	コマンド構文例
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• サーバー SP CLI の場合:</li> </ul>	<code>stop /SYS</code>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 1 つの専用 SP 付きブレードサーバーの CMM CLI の場合:</li> </ul>	<code>stop /CH/BLn/SYS</code>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 2 つの専用 SP 付きブレードサーバーの場合:</li> </ul>	<code>stop /CH/BLn/NODEn/SYS</code>
<code>stop -force</code>	<p><code>stop -force</code> コマンドを使用して、リモートホストサーバーの電源をただちに切断します。</p> <p><code>stop -force</code> コマンドを実行するには、次のように入力します。</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• サーバー SP CLI の場合:</li> </ul>	<code>stop -force /SYS</code>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 1 つの専用 SP 付きブレードサーバーの CMM CLI の場合:</li> </ul>	<code>stop -force /CH/BLn/SYS</code>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 2 つの専用 SP 付きブレードサーバーの CMM CLI の場合:</li> </ul>	<code>stop -force /CH/BLn/NODEn/SYS</code>
<code>reset</code>	<p><code>reset</code> コマンドを使用して、リモートホストサーバーをただちに再起動します。</p> <p><code>reset</code> コマンドを実行するには、次のように入力します。</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• サーバー SP CLI の場合:</li> </ul>	<code>reset /SYS</code>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 1 つの専用 SP 付きブレードサーバーの CMM CLI の場合:</li> </ul>	<code>reset /CH/BLn/SYS</code>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 2 つの専用 SP 付きブレードサーバーの CMM CLI の場合:</li> </ul>	<code>reset /CH/BLn/NODEn/SYS</code>

表 13-2 シャーシ監視モジュール (CMM) のリモート電源状態コマンド

電源状態コマンド	説明	コマンド構文例
start	start コマンドを使用して、リモートシャーシの全電源を入れます。 CMM CLI からリモートシャーシへ start コマンドを実行するには、次のように入力します。	start /CH
stop	stop コマンドを使用して、シャーシおよびそのコンポーネントの電源を正常に切断します。 CMM CLI からリモートシャーシへ stop コマンドを実行するには、次のように入力します。	stop /CH
stop -force	stop -force コマンドを使用して、シャーシおよびそのコンポーネントの電源をただちに切断します。 CMM CLI からリモートシャーシへ stop -force コマンドを実行するには、次のように入力します。	stop -force /CH

ホストサーバーへの接続、または ILOM CLI からのコマンド実行の詳細については、[27 ページの「ILOM の通信設定」](#)を参照してください。

## x86 ホスト上の BIOS 起動デバイスの管理

項目	説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する		<ul style="list-style-type: none"> <li>191 ページの「始める前に」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>x86 システムサーバー SP</li> </ul>
BIOS 起動デバイスの順序を制御する		<ul style="list-style-type: none"> <li>191 ページの「BIOS ホスト起動デバイスのオーバーライドを設定する」</li> </ul>	

## 始める前に

- ホスト起動デバイスの設定変数を変更するには、Reset and Host Control (r) の役割が必要です。

---

注 – ホスト制御の BIOS 起動デバイス機能は、x86 システム SP でサポートされています。この機能は、CMM または SPARC システム SP ではサポートされません。SPARC システムでの ILOM ホスト制御起動オプションについては、オンラインの ILOM 補足マニュアル、またはシステムに付属のプラットフォームの管理マニュアルを参照してください。

---

次の手順に従って、ホスト制御機能を使用して、ILOM から BIOS 起動デバイスの設定をオーバーライドします。

## ▼ BIOS ホスト起動デバイスのオーバーライドを設定する

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. `cd` および `show` コマンドを使用して、ホストシステムに移動します。

例:

```
->cd /HOST
/HOST

->show

/HOST
  Targets:
    diag

  Properties:
    boot_device = default
    generate_host_nmi = (Cannot show property)

  Commands:
    cd
    set
    show
```

3. 次回システムの電源が投入されるときにホスト起動デバイスを設定するには、次のように入力します。

```
->set boot_device=value
```

次の値を指定できます。

- default — 値を default に設定すると、BIOS 設定はオーバーライドされません。default に設定すると以前の設定内容もすべてクリアされます。
- pxe — 値を pxe に設定すると、次回のホスト起動時に BIOS の起動順序設定は一時的に無視され、ホストは PXE の起動指定に従ってネットワークから起動します。
- disk — 値を disk に設定すると、次回のホスト起動時に BIOS の起動順序設定は一時的に無視され、BIOS が選択した最初のディスクから起動します。どのディスクが選ばれるかは、構成によって異なります。通常、ホストではこのオプションがデフォルトで使用されるため、このオプションを選択してもホストの動作は変わらない可能性があります。
- diagnostic — 値を diagnostic に設定すると、次回のホスト起動時に BIOS の起動順序設定は一時的に無視され、ホストは診断パーティションに起動します (構成されている場合)。
- cdrom — 値を cdrom に設定すると、次回のホスト起動時に BIOS の起動順序設定は一時的に無視され、ホストは接続されている CD-ROM または DVD デバイスから起動します。
- bios — 値を bios に設定すると、次回のホスト起動時に BIOS の起動順序設定は一時的に無視され、ホストは BIOS 設定画面にブートします。

---

## ホストコンソールの管理

### 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">193 ページの「始める前に」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li><li>• SPARC サーバー</li></ul>
ホストコンソールプロパティを表示および設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">193 ページの「ホストコンソールプロパティを表示および設定する」</a></li></ul>	
ホストコンソールを起動し、コンソール履歴またはブートログ履歴を表示する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">195 ページの「ホストコンソールを起動し、コンソール履歴とブートログを表示する」</a></li></ul>	



## 始める前に

- ホストコンソールプロパティーを変更するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- ILOM 3.0.12 以降、ホストコンソールプロパティー (`line_count`、`pause_count` および `start_from`) はセッションをまたいで保持されなくなりました。これらプロパティーの値は、実行中の特定の `spsh` セッションの間だけ有効です。

## ▼ ホストコンソールプロパティーを表示および設定する

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. `cd` および `ls` コマンドを使用して、ホストコンソールプロパティーに移動します。  
例:

```
-> cd /HOST/console
/HOST/console

-> ls

/HOST/console
  Targets:
    history

  Properties:
    escapechars = #.
    line_count = 0
    pause_count = 0
    start_from = end

  Commands:
    cd
    show
    start
    stop
```

---

注 - `spsh` セッションが起動されるたびに、これらのプロパティーはデフォルト値 (`line_count = 0`、`pause_count = 0`、`start_from = end`) に初期化されます。これらプロパティーの値は、実行中の特定の `spsh` セッションの間だけ有効です。

---

3. help コマンドを使用して、ホストコンソールプロパティの説明を表示します。

例:

```
-> help escapechars
  Properties:
    escapechars : set escape chars using the console connection
    escapechars : User role required for set = a

-> help line_count
  Properties:
    line_count : total number of lines to display
    line_count : Possible values = 0-2048 where 0 means no limit
    line_count : User role required for set = c

-> help pause_count
  Properties:
    pause_count : number of lines to display before each pause
    pause_count : Possible values = 0-2048 where 0 means no limit
    pause_count : User role required for set = c

-> help start_from
  Properties:
    start_from : from which end of the available history to list
    start_from : Possible values = beginning,end
    start_from : User role required for set = c
```

4. set コマンドを使用して、ホストコンソールプロパティを設定します。

例:

- line\_count プロパティに値を設定するには、次のように入力します。

```
-> set line_count=value
```

*value* には、1 から 2048 を指定できます。

- pause\_count プロパティに値を設定するには、次のように入力します。

```
-> set pause_count=value
```

*value* には、行数として 1 から任意の有効な整数または無限数を指定できます。デフォルトでは一時停止しません。

- start\_from プロパティに値を設定するには、次のように入力します。

```
-> set start_from=value
```

*value* には *end* または *beginning* を指定できます。*end* 値は、バッファ内の最後の行、つまり最新の行です (デフォルト)。*beginning* 値は、バッファ内の最初の行です。

- `escapechars` に値を設定するには、次のように入力します。

-> `set escapechars=value`

`value` は 2 文字以内で指定します。デフォルトの値は `#.` (ハッシュとピリオド) です。

---

注 - `/SP/console escapechars` プロパティを使用すると、システムコンソールセッションを切り替えて ILOM に戻すときに使用する、エスケープ文字シーケンスを指定できます。エスケープ文字の変更は、現在アクティブなコンソールセッションでは有効になりません。

---

## ▼ ホストコンソールを起動し、コンソール履歴とブートログを表示する

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. ホストコンソールの表示プロパティを設定します (193 ページの「[ホストコンソールプロパティを表示および設定する](#)」を参照)。

---

注 - ILOM 3.0.12 以降、ホストコンソールプロパティ (`line_count`、`pause_count` および `start_from`) はセッションをまたいで保持されなくなりました。これらプロパティの値は、実行中の特定の `spsh` セッションの間だけ有効です。

---

3. ホストコンソールを起動するには、次のように入力します。

-> `start /SP/console`

4. コンソール履歴を表示するには、次のように入力します。

-> `show /SP/console/history`

コンソール履歴バッファは、最大 1M バイトの情報を格納できる循環バッファです。このバッファには、ホストコンソールで制御される OS 情報およびすべての POST 情報と起動情報が格納されます。

5. ブートログを表示するには、次のように入力します。

-> `show /SP/console/bootlog`

ブートログは、システムのスタートアップ状況を追跡し、発生した問題をすべて記録します。



## 第14章

# SPARC サーバーでの TPM と LDom の状態の管理

---

### 項目

説明	リンク
SPARC サーバー上の TPM の状態を制御する	<ul style="list-style-type: none"><li>198 ページの「SPARC サーバーでの TPM の状態の制御」</li></ul>
SPARC サーバー上の論理ドメイン (LDom) の設定を管理する	<ul style="list-style-type: none"><li>201 ページの「SPARC サーバーでの LDom 設定の管理」</li></ul>

---

### 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
<ul style="list-style-type: none"><li>概念</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>リモートホスト管理オプション</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
<ul style="list-style-type: none"><li>Web インタフェース</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>SPARC サーバーでの TPM と LDom の状態の管理</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)

---

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

---

# SPARC サーバーでの TPM の状態の制御

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>198 ページの「始める前に」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>SPARC システム SP</li></ul>
SPARC サーバーでの TPM の状態を制御する	<ul style="list-style-type: none"><li>198 ページの「SPARC サーバー上の TPM の状態を制御する」</li></ul>	

## 始める前に

- ILOM の TPM (Trusted Platform Module) 機能は SPARC サーバーでのみ使用できます。
- SPARC サーバーで、TPM をサポートするバージョンの Oracle Solaris オペレーティングシステムが実行されている必要があります。

Solaris での TPM のサポートの設定に関する詳細は、Solaris のドキュメントまたは使用しているサーバーに付属しているプラットフォームのドキュメントを参照してください。
- SPARC サーバー SP で ILOM 3.0.8 以降のバージョンを使用している必要があります。
- ILOM で TPM 設定を変更するには、Reset and Host Control (r) ユーザーアカウントが必要です。

## ▼ SPARC サーバー上の TPM の状態を制御する

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. `show` コマンドを使用して、TPM のターゲット、プロパティ、およびコマンドを表示します。

例:

```
-> show /HOST/tpm

/HOST/tpm
  Targets:

  Properties:
    activate = false
    enable = false
    forcetclear = false

  Commands:
    cd
    set
    show

->
```

3. help コマンドを使用して、TPM のターゲットおよびプロパティについての詳細を表示します。

例:

```
-> help /HOST/tpm

/HOST/tpm : Host TPM (Trusted Platform Module) Knobs
  Targets:

  Properties:
    activate : TPM Activate Property. If set to TRUE, then TPM
will be activated if the 'enable' property is also set to TRUE.
    activate : Possible values = true, false
    activate : User role required for set = r

    enable : TPM Enable Property. If not enabled, then TPM
configuration changes can not be made.
    enable : Possible values = true, false
    enable : User role required for set = r

    forcetclear : TPM Forcetclear Property. If set to TRUE, then
TPM state will be purged on the next power on event if and only if
the 'enable' property is set to TRUE.
    forcetclear : Possible values = true, false
    forcetclear : User role required for set = r
```

4. set コマンドを使用して、TPM のプロパティ値を指定します。

例:

- set コマンドの使用例:  
set [target] <property>=<value> [<property>=<value>]
- プロンプトで、TPM のターゲットと、1 つ以上のプロパティ値を次のように指定します。

```
-> set /host/tpm property=value
```

```
-> set /host/tpm property=value property=value
```

property と value には、次の表に示すいずれかのパラメータを指定できます。

プロパティ	値	例:
enable	true または false を指定できます。 注 - enable のデフォルト値は false です。	TPM 状態を有効にするには、次のように入力します。 -> set /HOST/tpm enable=true 注 - SPARC サーバーの次の電源投入時に TPM の有効な状態をサーバーに適用するには、TPM 状態をアクティブにする必要があります。詳細については、activate プロパティを参照してください。
activate	true または false を指定できます。 注 - activate のデフォルト値は false です。	TPM の状態を有効にし、SPARC サーバーの次の電源投入時にサーバーでこの状態 (有効) をアクティブにするには、次のように入力します。 -> set /HOST/tpm enable=true activate=true
forceclear	true または false を指定できます。 注 - forceclear のデフォルト値は false です。	SPARC サーバーの次の電源投入時にサーバーで TPM の有効な状態を消去する (無効にする) には、次のように入力します。 -> set /HOST/tpm forceclear=true 注 - enable と activate が true に設定されている場合、forceclear は true にのみ設定されます。



# SPARC サーバーでの LDom 設定の管理

## 項目

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>201 ページの「始める前に」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>SPARC システム SP</li></ul>
ILOM の格納されている LDom 設定を表示および管理する	<ul style="list-style-type: none"><li>202 ページの「SPARC T3 シリーズのサーバーに格納されている LDom 設定のターゲットおよびプロパティを表示する」</li><li>203 ページの「格納されている LDom 設定に対してホストの電源を指定する」</li><li>203 ページの「制御ドメインのプロパティ値を有効または無効にする」</li></ul>	

## 始める前に

格納されている論理ドメイン (LDom) 設定の ILOM 設定を表示および管理するには、次の要件を満たす必要があります。

- 適切な ILOM ポイントリリースファームウェアがインストールされている SPARC サーバーの ILOM にアクセスする必要があります (次の「注」を参照)。

注 – SPARC T3 シリーズのサーバーから LDom のターゲットおよびプロパティを表示するには、ILOM 3.0.12 以降が必要です。次の場合は ILOM 2.0.0 以降が必要です。(1) ホスト SPARC サーバーで使用する LDom 設定を指定する場合。(2) ホスト SPARC サーバーから制御ドメインの起動プロパティ値を管理する場合。

- Oracle VM Server for SPARC (Logical Domains Manager) 2.0 以降のソフトウェアがホスト SPARC サーバーにインストールされている必要があります。
- ホスト SPARC サーバーに LDom 設定が格納されている必要があります。ホスト SPARC サーバーで LDom 設定を作成して保存する方法については、『Logical Domains 1.3 管理ガイド』(821-1077) を参照してください。
- 次の項目を設定するには、ILOM の Remote Host Reset and Host Control (r) 権限が必要です。
  - LDom の bootmode ターゲット
  - 第一ドメインまたはゲストドメインの bootmode プロパティ値

## ▼ SPARC T3 シリーズのサーバーに格納されている LDom 設定のターゲットおよびプロパティを表示する

SPARC T3 シリーズのサーバーに格納されている LDom 設定のターゲットおよびプロパティを表示するには、次の手順に従います。

1. SPARC T3 シリーズのサーバーで ILOM CLI にログインします。
2. 格納されている LDom ホスト設定の名前を表示するには、次のように入力します。  
-> `show /HOST/domain/configs`
3. 格納されている LDom 設定の作成日と、格納されている LDom 設定内で設定されているドメイン数についてのプロパティ値を表示するには、次のように入力します。

-> `show /HOST/domain/configs/<name_of_stored_configuration>`

たとえば、次の例は、ONEDOMAIN という名前の架空の保存済み LDom 設定に関連するプロパティ値を表示する CLI の出力を示しています。

```
-> show
/HOST/domain/configs
  Targets:
    trimmed
    ONEDOMAIN
Properties:

  Commands:
    cd
    show

-> show ONEDOMAIN
/HOST/domain/configs/ONEDOMAIN
  Targets:
Properties:
  date_created = 2010-08-17 17:09:34
  domains = 1

  Commands:
    cd
    show
```

---

注 – ILOM は読み取り専用のプロパティを非揮発性メモリーに格納し、LDom Manager の LDom 設定が更新されるたびにそれらのプロパティを更新します。

---

## ▼ 格納されている LDom 設定に対してホストの電源を指定する

ホストサーバーの電源が投入されたときに使用する LDom 設定を指定するには、次の手順に従います。

1. SPARC サーバーで ILOM CLI にログインします。
2. `cd` コマンドを使用して `/Host/bootmode` ターゲットに移動し、`set config=` コマンドを使用して保存済みの LDom 設定を指定します。

例:

次の例は、ONEDOMAIN という名前の架空の保存済み LDom 設定を `bootmode` ターゲットとして設定するための CLI の出力を示しています。

```
-> cd /HOST/bootmode
/HOST/bootmode

-> set config=ONEDOMAIN
Set 'config' to 'ONEDOMAIN'
```

LDom 設定の `bootmode` プロパティに加えた変更は、ホストサーバーを次回リセットまたは電源投入したときに有効になります。

## ▼ 制御ドメインのプロパティ値を有効または無効にする

ILOM で LDom 制御ドメインの起動プロパティ値を有効または無効にするには、次の手順に従います。

1. SPARC サーバーで ILOM CLI にログインします。
2. `cd` コマンドを使用して `/Host/domain/control` ターゲットに移動し、`ls` コマンドを使用してホスト制御ドメインおよびゲストドメインの `auto-boot` プロパティを表示します。

例:

```
-> cd /HOST/domain/control
-> ls

/HOST/domain/control
Targets:

Properties:
  auto-boot = enabled
  boot_guests = enabled

Commands:
  cd
  reset
  set
  show
```

3. set コマンドを使用して、次の auto-boot プロパティ値および boot-guests プロパティ値を指定します。

プロパティ	プロパティ値の設定	説明
auto-boot	set auto-boot=<value>	set auto-boot= コマンドに続けて、次のプロパティ値のいずれかを入力します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• enabled (デフォルト): auto-boot プロパティ値を有効にすると、次の電源投入またはリセット後に制御ドメインが自動的に起動します。</li><li>• disabled: 制御ドメインの auto-boot プロパティ値を無効にすると、次の電源投入またはリセット後にドメインは自動的に再起動せず、OpenBoot の ok プロンプトで停止します。</li></ul>
boot_guests	set boot_guests=<value>	set boot_guests= コマンドに続けて、次のプロパティ値のいずれかを入力します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• enabled (デフォルト): boot_guests プロパティ値を有効にすると、ゲストドメインは次の電源投入またはリセット後に起動します。</li><li>• disabled: ゲストドメインの boot_guests プロパティ値を無効にすると、次の電源投入またはリセット後にゲストドメインが起動しなくなります。</li></ul>

## 第15章

# リモートホストシステムの診断の実行

### 項目

説明	リンク
x86 システムのハードウェア問題を診断する	<ul style="list-style-type: none"><li>206 ページの「x86 システムのハードウェア問題の診断」</li></ul>
SPARC システムのハードウェア問題を診断する	<ul style="list-style-type: none"><li>209 ページの「SPARC システムのハードウェア問題の診断」</li></ul>
Oracle の保守担当者がシステムの問題の診断に使用するデータを収集する	<ul style="list-style-type: none"><li>212 ページの「システムの問題を診断するための SP データの収集」</li></ul>

### 関連項目

ILOM	章または節	ガイド
<ul style="list-style-type: none"><li>概念</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>x86 または SPARC システムの診断</li><li>システムの問題を診断するための SP データの収集</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』(820-7370)
<ul style="list-style-type: none"><li>Web インタフェース</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>診断</li><li>システムの問題を診断するための SP データの収集</li></ul>	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface 手順ガイド』(820-7373)

ILOM 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトで入手できます。  
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic>

# x86 システムのハードウェア問題の診断

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">209 ページの「始める前に」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• x86 システムサーバー SP</li></ul>
診断テストを設定および実行するための要件が満たされていることを確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">206 ページの「PC-Check 診断の設定と実行」</a></li></ul>	
PC-Check 診断テストを設定および実行する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">206 ページの「PC-Check 診断の設定と実行」</a></li></ul>	
ホストへの NMI を生成する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">208 ページの「マスク不可能割り込みを生成する」</a></li></ul>	
他の x86 システムハードウェア診断テストおよびツールを実行する	<ul style="list-style-type: none"><li>• 『Sun x64 サーバー診断ガイド』(820-7813)</li></ul>	

## 始める前に

- x86 システムのハードウェア問題を診断するには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ PC-Check 診断の設定と実行

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力して、診断テストを有効にします。

```
-> cd /HOST/diag/  
/HOST/diag  
  
-> show /HOST/diag  
Targets:  
  
Properties:  
state = disabled  
  
Commands:  
cd  
set  
show  
  
-> set state=extended This will enable Pc-Check to run a 20-40 minute test suite  
OR  
-> set state=enabled This will enable Pc-Check to run a 4-5 minute test suite  
OR  
-> set state>manual This will enable you to select specific Pc-Check tests to run  
  
-> show  
Targets:  
  
Properties:  
state = enabled  
  
Commands:  
cd  
set  
show
```

3. ホストの電源をリセットして、PC 診断テストを実行します。

## ▼ マスク不可能割り込みを生成する



注意 – ホスト OS の設定によっては、マスク不可能割り込み (non-maskable interrupt, NMI) を生成すると、OS がクラッシュしたり、応答しなくなったり、外部デバッガからの入力を待機したりする場合があります。

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
-> cd /HOST
/HOST

-> show
/HOST
Targets:
    diag

Properties:
    generate_host_nmi = (Cannot show property)

Commands:
    cd
    set
    show

-> set generate_host_nmi=true
set 'generate_host_nmi' to 'true'
```



# SPARC システムのハードウェア問題の診断

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>209 ページの「始める前に」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>SPARC システムサーバー</li></ul>
診断テストを実行するようにシステムを設定する	<ul style="list-style-type: none"><li>209 ページの「診断モードを設定する」</li></ul>	
アクティブ化する診断トリガーを指定する	<ul style="list-style-type: none"><li>210 ページの「診断トリガーを指定する」</li></ul>	
実行する診断のレベルを指定する	<ul style="list-style-type: none"><li>210 ページの「診断のレベルを指定する」</li></ul>	
実行される診断テストの出力の詳細度を指定する	<ul style="list-style-type: none"><li>211 ページの「診断出力の詳細度を指定する」</li></ul>	

## 始める前に

この節の手順を実行する前に、次の要件を確認してください。

- SPARC システムで診断テストを設定および実行するには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。

## ▼ 診断モードを設定する

ホストモードプロパティ `/HOST/diag` を使用して、診断を有効にするかどうかを制御し、有効にする診断モードを指定します。

次の手順に従って、診断モードを設定します。

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag mode=value
```

`value` は、次のいずれかの値です。
  - `off` - どのような診断も実行しません。
  - `normal` - 診断を実行します (デフォルト値)。
3. ホストの電源をリセットして、診断テストを実行します。

## ▼ 診断トリガーを指定する

ホストでの電源投入時の自己診断テスト (power-on self-test、POST) を実行させる 1 つまたは複数のトリガーを選択できます。

次の手順に従って、トリガーレベルを設定します。

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. コマンドプロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag trigger=value
```

ここで、*value* は、次のいずれかです。

- none – 診断はトリガーによって実行されません。
- user-reset – ユーザーによるリセット時に診断が実行されます。
- power-on-reset – 電源投入時に診断が実行されます。
- error-reset – エラーによるリセット時に診断が実行されます。
- all-resets – 上記のいずれの種類のリセット時にも診断が実行されます。

## ▼ 診断のレベルを指定する

診断の実行がトリガーされた状況に応じて、実行する診断テストのレベルを指定できる個別の ILOM CLI プロパティがあります。これにより、各種のホストリセット状況でどの程度の診断テストを実行するかを詳細に制御できます。

`/HOST/diag level` プロパティを使用して、診断が使用可能な場合に実行される診断テストのレベルを指定します。

次の手順に従って、実行される診断のレベルを指定します。

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. ホストのリセット状況に応じて、次のいずれかのコマンドを実行します。

- ホストの電源投入時の診断レベルを指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag power_on_level=value
```
- ユーザーがホストをリセットした場合の診断レベルを指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag user_reset_level=value
```
- システムエラーによってホストがリセットされた場合の診断レベルを指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set /HOST/diag error_reset_level=value
```

*value* は、次のいずれかの値です。

- min – 最小レベルの診断を実行してシステムを検証します。
- max – システムの健全性を完全に検証するための最大限の診断が実行されます (デフォルト値)。

---

注 – ILOM 2.x との下位互換性を維持するために、以前からあるプロパティ `/HOST/diag level` も、すべての種類のトリガーに同じ診断レベルを指定するショートカットとして引き続きサポートされています。 `/HOST/diag level` に対して設定された値はどんな値でも、3つのトリガー固有プロパティ (`power_on_level`、`user_reset_level`、および `error_reset_level`) のすべてに適用されます。

---

3. ホストの電源をリセットして、診断テストを実行します。

## ▼ 診断出力の詳細度を指定する

診断の実行がトリガーされた状況に応じて、実行する診断の出力の詳細度を指定できる固有の ILOM CLI プロパティがあります。これにより、各種のホストリセット状況でどの程度の診断出力を行うかを詳細に制御できます。

次の手順に従って、診断出力の詳細度を指定します。

1. ILOM SP CLI にログインします。

2. ホストのリセット状況に応じて、次のいずれかのコマンドを実行します。

- ホストの電源投入時に実行される診断の出力の詳細度を指定するには、次のコマンドを入力します。  
-> `set /HOST/diag power_on_verbosity=value`
- ユーザーがホストをリセットした場合に実行される診断の出力の詳細度を指定するには、次のコマンドを入力します。  
-> `set /HOST/diag user_reset_verbosity=value`
- システムエラーによってホストがリセットされた場合に実行される診断の出力の詳細度を指定するには、次のコマンドを入力します。  
-> `set /HOST/diag error_reset_verbosity=value`

*value* は、次のいずれかの値です。

- `none` – 障害が検出されないかぎり、診断の実行時にシステムコンソールには出力が表示されません。
- `min` – 診断で、制限された量の出力がシステムコンソールに表示されます。
- `normal` – 診断によってシステムコンソール上に行われる出力は中程度の量です (デフォルト値)。
- `max` – 診断で、実行されている各テストの名前と結果を含む完全な出力がシステムコンソールに表示されます。
- `debug` – 診断で、テストされているデバイスと各テストのデバッグ出力を含む広範囲なデバッグの出力がシステムコンソールに表示されます。

---

注 – ILOM 2.x との下位互換性を維持するために、以前からあるプロパティー `/HOST/diag verbosity` も、すべての種類のトリガーに同じ出力詳細度を指定するショートカットとして引き続きサポートされています。`/HOST/diag verbosity` に対して設定された値はどんな値でも、3つのトリガー固有の詳細度プロパティー (`power_on_verbosity`、`user_reset_verbosity`、および `error_reset_verbosity`) のすべてに適用されます。

---

3. ホストの電源をリセットして、診断テストを実行します。

---

## システムの問題を診断するための SP データの収集

項目		
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">212 ページの「始める前に」</a></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• Oracle の保守担当者向け機能のみ</li></ul>
SP データを収集する	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">213 ページの「システムの問題を診断するために SP データを収集する」</a></li></ul>	

---

### 始める前に

- サービススナップショットユーティリティを使用して SP データを収集するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。



---

**注意** – ILOM サービススナップショットユーティリティの目的は、Oracle の保守担当者が問題の診断に使用するデータを収集することです。Oracle の保守担当者からの依頼がないかぎり、ユーザーはこのユーティリティを決して実行しないでください。

---

## ▼ システムの問題を診断するために SP データを収集する

次の手順に従って、サービススナップショットユーティリティを実行します。

1. ILOM SP CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
->set /SP/diag/snapshot dataset=data  
->set /SP/diag/snapshot dump_uri=URI
```

この場合、*data* および *URI* は次のいずれかです。

変数	オプション	説明
<i>data</i>	normal	ILOM、オペレーティングシステム、およびハードウェアの各情報を収集することを指定します。
	FRUID	ILOM 3.0.3 の時点で使用可能であり、normal オプションで収集されるデータに加えて、サーバーで現在設定されている FRU に関する情報を収集するよう ILOM に要求します。
	full	すべてのデータを収集すること（「完全」収集）を指定します。 注 - このオプションを使用すると、実行中のホストがリセットされる場合があります。
	<ul style="list-style-type: none"><li>• normal-logonly</li><li>• fruid-logonly</li><li>• full-logonly</li></ul>	ログファイルのみを収集することを指定します。
<i>URI</i>	有効なターゲットディレクトリの場所	ターゲットディレクトリの URI を指定します。URI の形式は次のとおりです。 protocol://username:password@host/directory 「protocol」には、「SFTP」または「FTP」のいずれかの転送方法を指定できます。 たとえば、ホスト上で <i>data</i> と命名されたディレクトリにスナップショット情報を格納するには、次のように <i>URI</i> を定義してください。 ftp://joe:mypasswd@host_ip_address/data ディレクトリ <i>data</i> はユーザーのログインに対して相対的であるため、ターゲットディレクトリは多くの場合 /home/joe/data になります。



## 付録 A

# CLI コマンドリファレンス

---

---

## CLI コマンドリファレンス

この付録では、使用している Oracle Sun サーバーを ILOM コマンド行インタフェース (CLI) から管理するために使用する一般的な ILOM コマンドについて説明します。

この付録の構文例では、/SP/ で始まるターゲット (ほとんどの Oracle Sun サーバーに適用可能) を使用します。ただし、サブターゲットはすべてのサーバープラットフォームで共通のため、これらのコマンドを CMM から実行する場合は、/SP/ で始まるターゲットを /CMM/ に置き換えることができます。または、これらのコマンドをシャーシ監視モジュール (CMM) のサーバーブレードから実行する場合は、サーバーブレードのプラットフォームに応じて、/SP/ で始まるターゲットを /CH/BLn または CH/BLn/Noden に置き換えることができます。

### cd コマンド

cd コマンドを使用すると、ネームスペースを操作できます。ターゲットの場所に cd を行うと、その場所がほかのすべてのコマンドのデフォルトターゲットになります。ターゲットなしで -default オプションを使用すると、最上位のネームスペースに戻ります。cd -default を入力した場合は、cd / を入力した場合と同じ結果が得られます。cd とだけ入力すると、ネームスペースの現在の場所が表示されます。help targets と入力すると、ネームスペース全体にあるすべてのターゲットのリストが表示されます。

## 構文

**cd** *target*

## オプション

**[-default] [-h|help]**

## ターゲットとプロパティ

ネームスペースの任意の場所。

## 例

emmett というユーザー名を作成するには、/SP/users に **cd** を行い、デフォルトのターゲットとして /SP/users を使用して **create** コマンドを実行します。

```
-> cd /SP/users
```

```
-> create emmett
```

自分の場所を表示するには、**cd** と入力します。

```
-> cd /SP/users
```

## create コマンド

**create** コマンドを使用すると、ネームスペースのオブジェクトを設定できます。  
**create** コマンドで特定のプロパティを指定しないかぎり、プロパティは空です。

## 構文

**create** [*options*] *target* [*propertyname=value*]

## オプション

**[-h help]**



## ターゲット、プロパティ、および値

表 A-1 create コマンドのターゲット、プロパティ、および値

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト値
<i>/SP/users/username</i>	password	<文字列>	(none)
	role	administrator  operator a  u c r o s	o
<i>/SP/services/snmp/communities/</i> <i>communityname</i>	permissions	ro  rw	ro
<i>/SP/services/snmp/user/</i> <i>username</i>	authenticationprotocol	MD5	MD5
	authenticationpassword	<文字列>	(空文字列)
	permissions	ro  rw	ro
	privacyprotocol	none  DES	DES
	privacypassword	<文字列>	(空文字列)

### 例

```
-> create /SP/users/susan role=administrator
```

## delete コマンド

delete コマンドを使用すると、ネームスペースのオブジェクトを削除できます。delete コマンドを確認するプロンプトが表示されます。-script オプションを使用することで、このプロンプトの表示を省略できます。

### 構文

```
delete [options] [-script] target
```

### オプション

```
[-h|help] [-script]
```

### ターゲット

表 A-2 delete コマンドのターゲット

有効なターゲット
<i>/SP/users/username</i>
<i>/SP/services/snmp/communities/</i> <i>communityname</i>
<i>/SP/services/snmp/user/</i> <i>username</i>

## 例

```
-> delete /SP/users/susan  
-> delete /SP/services/snmp/communities/public
```

## dump コマンド

dump コマンドを使用すると、URI で指定したりモートの場所に、ターゲットからファイルを転送できます。

### 構文

```
dump -destination <URI> target
```

### オプション

```
[-destination]
```

## exit コマンド

exit コマンドを使用すると、CLI セッションを終了できます。

### 構文

```
exit [options]
```

### オプション

```
[-h help]
```

## help コマンド

help コマンドを使用すると、コマンドとターゲットについてのヘルプ情報を表示できます。-o|output terse オプションを使用すると、使用方法に関する情報のみが表示されます。-o|output verbose オプションでは、使用方法、説明、およびコマンド使用法の例などの追加情報が表示されます。-o|output オプションを使用しない場合は、コマンドの使用法と簡単な説明が表示されます。

*command targets* を指定すると、/SP と /SYS にある固定ターゲットのうち、そのコマンドに有効なターゲットの詳細リストが表示されます。固定ターゲットとは、ユーザーが作成できないターゲットです。

legal command target を指定すると、著作権情報と製品使用権が表示されます。

## 構文

**help** [*options*] *command target*

## オプション

**[-h|help] [-o|output terse|verbose]**

## コマンド

**cd, create, delete, exit, help, load, reset, set, show, start, stop, version**

## 例

```
-> help load
The load command transfers a file from a remote location specified
by the URI and updates the given target.
Usage: load [-script] -source <URI> [target]
-source: Specify the location to get a file.
```

```
-> help -output verbose reset
The reset command is used to reset a target.
Usage: reset [-script] [target]
Available options for this command:
-script: Do not prompt for yes/no confirmation and act as if yes
were specified.
```

## load コマンド

load コマンドを使用すると、Uniform Resource Indicator (URI) で特定されるソースからイメージファイルを転送し、ILOM のファームウェアを更新できます。URI によって、転送に使用するプロトコルと認証を指定できます。load コマンドは、複数のプロトコル (TFTP、SCP、FTP) をサポートしています。認証が必要であっても指定しない場合は、パスワードの入力を求めるコマンドプロンプトが表示されます。-script オプションを使用すると、yes または no を確認するプロンプトの表示が省略され、yes が指定されたものとしてコマンドが動作します。

---

注 – このコマンドは、ILOM のファームウェアと BIOS を更新するために使用します。

---

表 A-3 load コマンドのターゲット、プロパティ、および値

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト値
/SP/users/username	password	<文字列>	(none)
	role	administrator operator  a u c l r o s	o

## 構文

```
load -source URI
```

## オプション

```
[-h|help] [-script]
```

## 例:

```
-> load -source tftp://ip_address/newmainimage
```

---

注 – ファームウェアをアップグレードすると、サーバーと ILOM はリセットされます。アップグレード処理の前に、サーバーの正常な停止を行うことをお勧めします。アップグレードの完了には、約 5 分かかります。ILOM は、特別なモードに入って、新しいファームウェアをロードします。ファームウェアのアップグレードが完了して ILOM がリセットされるまで、ほかのタスクは実行できません。

---

```
-> load -source tftp://ip_address/newmainimage
Are you sure you want to load the specified file (y/n)? y
File upload is complete.
Firmware image verification is complete.
Do you want to preserve the configuration (y/n)? n
Updating firmware in flash RAM:
.
Firmware update is complete.
ILOM will not be restarted with the new firmware.
```

## reset コマンド

reset コマンドを使用すると、ターゲットの状態をリセットできます。リセット操作を確認するプロンプトが表示されます。-script オプションを使用することで、このプロンプトの表示を省略できます。

---

注 - reset コマンドは、ハードウェアデバイスの電源状態には影響を与えません。

---

### 構文

**reset** [*options*] *target*

### オプション

**[-h|help] [-script]**

(SPARC ベースのシステムでは、-f|force オプションがサポートされています。)

### ターゲット

表 A-4 reset コマンドのターゲット

---

有効なターゲット

---

/SP

/SYS

---

### 例

```
-> reset /SP
```

```
-> reset /SYS
```

## set コマンド

set コマンドを使用すると、ターゲットのプロパティを指定できます。

### 構文

**set** [*options*] *target* [*propertyname=value*]

### オプション

**[-h help]**

## ターゲット、プロパティ、および値

表 A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト値
/HOST/tpm	enable	true   false	false
	activate	true   false	false
	forceclear	true   false	false
/SP/alertmgmt/rules	testalert	true	(none)
/SP/alertmgmt/rules/ rulename (rulename = 1 - 15)	community_or_username	<文字列>	public
	destination	email_address	(none)
	destination_port	<整数>	0
	event_class_filter	" "   Log   Email   Internal   Captive Shell   Backup   Restore   Audit   IPMI   Chassis   Fault   System   ActDir	(none)
	event_type_filter	" "   Developer   Connection   Send   Product   Chassis   Command Entered   State   Action   Fault   Repair   Warning	(none)
	level	disable   down   critical   major   minor	(none)
	snmp_version	1   2c   3	3
	type	email   ipmipet   snmptrap	(none)
/SP/cli	timeout	<整数>	(none)
/SP/clock	datetime	現在の日時	<文字列>
	timezone	EST   PST8PDT	GMT
	usentpserver	enabled   disabled	disabled
/SP/console/history	line_count	<整数>	0
	pause_count	<整数>	0
	start_from	end   beginning	end
/SP/services/http	port	<整数>	80
	secureredirect	enabled   disabled	enabled
	servicestate	enabled   disabled	disabled

表 A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト値
<b>/SP/services/https</b>	port	<整数>	443
	servicestate	enabled   disabled	disabled
<b>/SP/services/ipmi</b>	servicestate	enabled   disabled	enabled
<b>/SP/services/kvms</b>	mousemode	absolute   relative	absolute
	servicestate	enabled   disabled	enabled
<b>/SP/services/snmp</b>	engineid	<16 進数>	IP アドレス
	mibs	dump_uri	(none)
	port	<整数>	161
	sets	enabled   disabled	disabled
	v1	enabled   disabled	disabled
	v2c	enabled   disabled	disabled
	v3	enabled   disabled	enabled
	servicestate	enabled   disabled	enabled
<b>/SP/services/snmp/ communities/private</b>	permission	ro   rw	rw
<b>/SP/services/snmp/ communities/public</b>	permission	ro   rw	ro
<b>/SP/services/snmp/user /username</b>	authenticationprotocol	MD5	MD5
	authenticationpassword	<文字列>	(空文字列)
	permissions	ro   rw	ro
	privacyprotocol	none   DES	DES
	privacypassword	<文字列>	(空文字列)
<b>/SP/services/ssh</b>	external_host		
	generate_new_key_action	true	(none)
	generate_new_key_type	rsa   dsa	(none)
	restart_sshd_action	true	(none)
	state	enabled   disabled	enabled
<b>/SP/services/sso</b>	state	enabled   disabled	enabled
<b>/SP/users/username</b>	role	administrator   operator   a   u   c   r   o   l   s	(none)
	password	<文字列>	(none)

表 A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト値
/SP/clients/ activedirectory	state	enabled   disabled	disabled
	defaultrole	administrator   operator   a u   c   r   o   s	(none)
	dnslocatormode	enabled   disabled	disabled
	expsearchmode	enabled   disabled	disabled
	address	<IP アドレス> または <DNS 名>	(none)
	port	<0 - 65535 の整数>	0
	strictcertmode	enabled   disabled	disabled
	timeout	<整数>	4
	logdetail	none   high   medium   low   none trace	
/SP/clients/ activedirectory/ admingroups/ <i>n</i> <i>n</i> は 1 ~ 5	name	<文字列>	(none)
/SP/clients/ activedirectory/ opergroups/ <i>n</i> <i>n</i> は 1 ~ 5	name	<文字列>	(none)
/SP/clients/ activedirectory/ userdomains/ <i>n</i> <i>n</i> は 1 ~ 5	domain	<文字列>	(none)
/SP/clients/ activedirectory/ customgroups/ <i>n</i> <i>n</i> は 1 ~ 5	name roles	<文字列> a   u   c   r   o   s   administrator   o operator	(none)
/SP/clients/ activedirectory/ alternateservers/ <i>n</i> <i>n</i> は 1 ~ 5	address port	<IP アドレス> または <DNS 名> <整数>	(none) 0



表 A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト値
/SP/clients/ activedirectory/ alternateservers/n/cert n は 1 ~ 5	certstatus	<文字列>	certificate not present
	clear_action	true	(none)
	issuer	<文字列>	(none)
	load_uri	tftp   ftp   scp	(none)
	serial_number	<文字列>	(none)
	subject	<文字列>	(none)
	valid_from	<文字列>	(none)
	valid_until	<文字列>	(none)
/SP/clients/ activedirectory/cert/	certstatus	<文字列>	certificate not present
	clear_action	true	(none)
	issuer	<文字列>	(none)
	load_uri	tftp   ftp   scp	(none)
	serial_number	<文字列>	(none)
	subject	<文字列>	(none)
	valid_from	<文字列>	(none)
	valid_until	<文字列>	(none)
/SP/clients/ activedirectory/ dnslocatorqueries/n n は 1 ~ 5	service	<DOMAIN>	(none)
/SP/clients/dns	auto_dns	enabled   disabled	disabled
	nameserver	<文字列>	(none)
	retries	<0 - 5 の整数>	(none)
	searchpath	<文字列>	(none)
	timeout	<1 - 10 の整数>	(none)
/SP/clients/ldap	binddn	<ユーザー名>	(none)
	bindpw	<文字列>	(none)
	defaultrole	administrator   operator   a   u   c   r   o   s	o
	address	<ipaddress>   none	(none)
	port	<整数>	389
	searchbase	<文字列>	(none)
	state	enable   disabled	disabled



表 A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト値
/SP/clients/ldapssl/ cert/	certstatus	<文字列>	certificate not present
	clear_action	true	(none)
	issuer	<文字列>	(none)
	load_uri	tftp   ftp   scp	(none)
	serial_number	<文字列>	(none)
	subject	<文字列>	(none)
	valid_from	<文字列>	(none)
	valid_until	<文字列>	(none)
/SP/clients/ ldapssl/ cert/n	version	<文字列>	(none)
	domain	<文字列>	(none)
n は 1 ~ 5			
/SP/clients/ntp/server/ [1 2]	address	<IP アドレス>	(none)
/SP/clients/radius	defaultrole	administrator   operator   a   u	operator
	address	c   r   o   s   none	
	port	<IP アドレス>   none	(none)
	secret	<整数>	1812
	state	<string>   none	(none)
/SP/clients/smtp	enable	enable   disabled	disabled
	address	<IP アドレス>	IP アドレス
	port	<整数>	25
/SP/clients/syslog[1 2]	state	enabled   disabled	enabled
	address	<IP アドレス>	IP アドレス
/SP/config	dump_uri	tftp   ftp   sftp   scp   http   https	(none)
	load_uri	tftp   ftp   sftp   scp   http   https	(none)
	passphrase	<文字列>	(none)
/SP/diag	snapshot	(none)	(none)
/SP/network	commitpending	true	(none)
	pendingipaddress	<ipaddress>   none	(none)
	pendingdiscovery	dhcp   static	dhcp
	pendingipgateway	<ipaddress>   none	(none)
	pendingipnetmask	<点で区切られた IP の 10 進数>	10.8.255.255
	enable	enabled   disabled	enabled
	state		

表 A-5 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

有効なターゲット	プロパティ	値	デフォルト値
/SP/network/ipv6	state	enabled   disabled	enabled
	autoconfig	stateless   dhcpv6_stateless   dhcpv6_stateful   disable	stateless
	pending_static_ipaddress	<IPv6 アドレス>	(none)
	commitpending	true	(none)
/SP/network/test	ping	<IPv4 アドレス>	(none)
	ping6	<IPv6 アドレス>	(none)
/SP/preferences/banner	connect_message	<文字列>	(none)
	login_message	<文字列>	(none)
	login_message_acceptance	enabled   disabled	disabled
/SP/serial/external	commitpending	true	(none)
	flowcontrol	none	(none)
	pendingspeed	<リストの整数>	9600
	speed	<リストの整数>	9600
/SP/serial/host	commitpending	true	(none)
	pendingspeed	<リストの整数>	9600
	speed	<リストの整数>	9600
/SP/	check_physical_presence	true   false	(none)
	hostname	<文字列>	(none)
	reset_to_defaults	all   factory   none	(none)
	system_contact	<文字列>	(none)
	system_description	<文字列>	(none)
	system_identifier	<文字列>	(none)
	system_location	<文字列>	(none)

### 例

```
-> set /SP/users/susan role=administrator
-> set /SP/clients/ldap state=enabled binddn=proxyuser bindpw=ez24get
```

## show コマンド

show コマンドを使用すると、ターゲットとプロパティについての情報を表示できます。

-display オプションは、表示される情報の種類を決定します。-display targets を指定すると、現在のターゲットの下にあるネームスペースのすべてのターゲットが表示されます。-display プロパティを指定すると、ターゲットのすべてのプロパティ名と値が表示されます。このオプションでは、特定のプロパティ名を指定することができ、これらの値のみ表示されます。-display all を指定すると、現在のターゲットの下にあるネームスペースのすべてのターゲットと、指定したターゲットのプロパティが表示されます。-display オプションを指定しない場合、show コマンドは、-display all が指定されたものとして動作します。

-level オプションは、show コマンドの深さを制御し、-display オプションのすべてのモードに適用されます。-level 1 を指定すると、オブジェクトが存在するネームスペースのレベルが表示されます。1 より大きい値の場合、ネームスペースのターゲットの現在のレベルおよび <指定した値> のレベルより下にあるレベルの情報を返します。-level all 引数を指定すると、ネームスペースの現在のレベルとそれより下のレベルの情報すべてが表示されます。

-o|output オプションは、コマンド出力の内容と形式を指定します。ILOM では、表形式でターゲットおよびプロパティを表示する -o table のみをサポートしています。

エイリアスの show components は、次の CLI コマンドのショートカットです。

```
-> show -o table -level all /SYS component state
```

show components エイリアスでも、このコマンドと同じ出力が生成されます。したがって、このエイリアスを使用して、ターゲットごとに1つのプロパティに限定して表出力を行うことができます。

### 構文

```
show [options] [-display targets|properties|all] [-level value|all] target  
[propertyname]
```

### オプション

```
[-d|-display] [-l|level] [-o|output]
```

## ターゲットとプロパティ

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ

有効なターゲット	プロパティ
<b>/HOST/tpm</b>	activate enable forceclear
<b>/SYS</b>	
<b>/SYS/DBP/HDD<i>n</i></b> <i>n</i> は有効な HDD スロット	type ipmi_name fru_name fru_manufacturer fru_version fru_serial_number controller_id disk_id capacity device_name disk_type wwn raid_status raid_ids
<b>/STORAGE/raid/controller@od:00.0</b> 00.0 はコントローラの ID	fru_manufacturer fru_model pci_vendor_id pci_device_id pci_subvendor_id pci_subdevice_id raid_levels max_disks max_raids max_hot_spares max_global_hot_spares min_stripe_size max_stripe_size
<b>/STORAGE/raid/controller@od:00.0/ raid_id0</b> 00.0 はコントローラの ID、 <b>raid_id0</b> はターゲット RAID ディスク	level status disk_capacity device_name mounted

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
<b>/STORAGE/raid/controller@od:00.0/ raid_id0/disk_id0</b> 00.0 はコントローラの ID、 <b>raid_id0</b> はター ゲット RAID ディスク、 <b>disk_id0</b> はターゲット ディスク	fru_manufacturer fru_serial_number fru_version status capacity device_name disk_type wwn raid_ids system_drive_slot
<b>/SP</b>  <b>/SP/alertmgmt/rules/ rulename</b> (rulename = 1 ~ 15)	community   username destination destination_port event_class_filter event_type_filter level snmp_version type
<b>/SP/cli</b>  <b>/SP/clients/ activedirectory</b>	timeout  state certfilestatus defaultrole getcertfile address logdetail port strictcertmode timeout
<b>/SP/clients/ activedirectory/ admingroups/n</b> n は 1 ~ 5	name
<b>/SP/clients/ activedirectory/ alternateservers/n</b> n は 1 ~ 5	address port

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
/SP/clients/ activedirectory/ alternateservers/n/cert n は 1 ~ 5	clear_action issuer load_uri serial_number subject valid_from valid_until version
/SP/clients/ activedirectory/cert	certstatus clear_action issuer load_uri serial_number subject valid_from valid_until version
/SP/clients/ activedirectory/ customgroups/n n は 1 ~ 5	name roles
/SP/clients/ activedirectory/ opergroups/n n は 1 ~ 5	name
/SP/clients/ activedirectory/ userdomains/n n は 1 ~ 5	domain
/SP/clients/dns	auto_dns nameserver searchpath
/SP/clients/ldap	binddn bindpw defaultrole address port searchbase state



表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
<code>/SP/clients/ldapssl</code>	defaultrole address logdetail port optionalUserMapping state strictcertmode timeout
<code>/SP/clients/ ldapssl/ admingroups/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	name
<code>/SP/clients/ ldapssl/ alternateservers/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	address port
<code>/SP/clients/ ldapssl/ alternateservers/n/cert</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	cert_status clear_action issuer load_uri serial_number subject valid_from valid_until version
<code>/SP/clients/ldapssl/cert</code>	certstatus clear_action issuer load_uri serial_number subject valid_from valid_until version
<code>/SP/clients/ ldapssl/ customgroups/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	name roles

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
<code>/SP/clients/ ldapssl/ opergroups/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	name
<code>/SP/clients/ ldapssl/ userdomains/n</code> <i>n</i> は 1 ~ 5	domain
<code>/SP/clients/ntp/server/[1 2]</code>	address
<code>/SP/clients/radius</code>	address port secret state
<code>/SP/clients/smtp</code>	port state
<code>/SP/clock</code>	datetime usntpserver uptime timezone
<code>/SP/config</code>	dump_uri load_uri passphrase
<code>/SP/console</code>	escapechars
<code>/SP/console/history</code>	line_count pause_count start_from
<code>/SP/diag/snapshot</code>	dataset dump_uri result
<code>/SP/firmware</code>	load_uri
<code>/SP/logs/event</code>	clear

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
<code>/SP/network</code>	commitpending dhcp_server_ip ipaddress ipdiscovery ipgateway ipnetmask macaddress pendingipaddress pendingdiscovery pendingipgateway pendingipnetmask state
<code>/SP/network/ipv6</code>	state autoconfig dhcpv6_server_ duid link_local_ipaddress static_ipaddress ipgateway pending_static_ipaddress dynamic_ipaddress_1
<code>/SP/network/test</code>	ping ping6
<code>/SP/powermgmt</code>	actual_power permitted_power available_power
<code>/SP/preferences/banner</code>	connect_message login_message login_message_acceptance
<code>/SP/serial/external</code>	flowcontrol speed
<code>/SP/serial/host</code>	commitpending pendingspeed speed
<code>/SP/services/http</code>	port secureredirect servicestate
<code>/SP/services/https</code>	cert_status servicestate

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
<code>/SP/services/https/ssl</code>	cert_status
<code>/SP/services/https/ssl/default_cert</code>	issuer subject valid_from valid_until
<code>/SP/services/https/ssl/custom_cert</code>	clear_action issuer load_uri subject valid_from valid_until
<code>/SP/services/https/ssl/custom_key</code>	key_present load_uri clear_action
<code>/SP/services/ipmi</code>	servicestate
<code>/SP/services/kvms</code>	mousemode servicestate
<code>/SP/services/servicetag</code>	passphrase product_urn state
<code>/SP/services/snmp</code>	engineid mibs port sets v1 v2c v3 servicestate
<code>/SP/services/snmp/communities/private</code>	permissions
<code>/SP/services/snmp/communities/public</code>	permissions
<code>/SP/services/snmp/users/username</code>	password role
<code>/SP/services/ssh</code>	state

表 A-6 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

有効なターゲット	プロパティ
<code>/SP/services/ssh/keys/dsa</code>	fingerprint length privatekey publickey
<code>/SP/services/ssh/keys/rsa</code>	fingerprint length privatekey publickey
<code>/SP/services/sso</code>	state
<code>/SP/sessions/sessionid</code>	username starttime type mode
<code>/SP/users/username</code>	role password
<code>/SP/users/username/ssh/keys/1</code>	fingerprint algorithm load_uri clear_action embedded_comment bit_length
<code>/SP/users/username/service</code>	service_password service_password_expires
<code>/SP/users/username/escalation</code>	escalation_password escalation_password_expires

例

```
-> show /SP/users/user1
-> show /SP/clients -level2
-> show components
```

## start コマンド

start コマンドを使用すると、ターゲットの電源を入れるか、またはホストコンソールとの接続を開始できます。-script オプションを使用すると、yes または no を確認するプロンプトの表示が省略され、yes が指定されたものとしてコマンドが動作します。

### 構文

```
start [options] target
```

### オプション

```
[-h|help] [-script]
```

### ターゲット

表 A-7 start コマンドのターゲット

有効なターゲット	説明
/SYS または /CH	システムまたはシャーシを起動 (電源を投入) します。
/SP/console	コンソールストリームへインタラクティブセッションを開始します。

### 例

```
-> start /SP/console
```

```
-> start /SYS
```

## stop コマンド

stop コマンドを使用すると、ターゲットを停止するか、またはホストコンソールと別のユーザーの接続を終了することができます。stop コマンドを確認するプロンプトが表示されます。-script オプションを使用することで、このプロンプトの表示を省略できます。-f|force オプションは、操作をただちに実行するように指定します。

### 構文

```
stop [options] [-script] target
```

### オプション

```
[-f|force] [-h|help]
```

## ターゲット

表 A-8 stop コマンドのターゲット

有効なターゲット	説明
<code>/SYS</code> または <code>/CH</code>	正常な停止を実行し、指定したシステムまたはシャーシの電源を切ります。 <code>-f</code>   <code>-force</code> オプションを使用すると、正常な停止をスキップして、ただちに電源を強制的に切ります。
<code>/SP/console</code>	ホストコンソールとほかのユーザーの接続を終了します。

## 例

```
-> stop /SP/console
-> stop -force /SYS
```

## version コマンド

version コマンドを使用すると、ILOM のバージョン情報を表示できます。

## 構文

**version**

## オプション

`[-h help]`

## 例

```
-> version
version SP firmware version: 3.0.0
SP firmware build number: 4415
SP firmware date: Mon Mar 28 10:39:46 EST 2008
SP filesystem version: 0.1.9
```





# Storage Redirection コマンド行のモード、構文、および使用方法

---

Storage Redirection CLI は、対話型モードと非対話型モードの両方のコマンド入力をサポートしています。対話型モードは、一連の Storage Redirection コマンドを入力する必要がある場合に便利です。非対話型モードは、バッチ手続きまたはスクリプトを実行する必要がある場合に便利です。これらのモードのいずれかで Storage Redirection コマンドを入力するために必要な構文は、次のとおりです。

### ■ 対話型シェルモードの構文

```
<storageredir> <command> <command options> <sub-commands> <sub-command options>
```

Storage Redirection CLI を起動して対話型シェルからコマンドを直接実行するには、まず、Storage Redirection クライアントがインストールされている場所に移動し、`java -jar StorageRedir.jar` コマンドを発行して Storage Redirection CLI を起動する必要があります。詳細は、[176 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。

### ■ 非対話型シェルモードの構文

```
$ java -jar StorageRedir.jar <command> <command options> <sub-commands> <sub-command options>
```

Storage Redirection CLI を起動して非対話型シェルからコマンドを直接実行するには、シェルプロンプト (\$) で、Storage Redirection コマンド (`java -jar StorageRedir.jar`) と、実行するコマンドをそれに続けて入力する必要があります。手順については、[176 ページの「コマンドウィンドウまたは端末を使用して Storage Redirection CLI を起動する」](#)を参照してください。

## サポートされている Storage Redirection コマンドおよびオプション

次の表に、Storage Redirection CLI で発行できる、サポートされているコマンドおよびオプションを示します。

- [表 B-1 Storage Redirection コマンド](#)
- [表 B-2 Storage Redirection コマンドオプション](#)
- [表 B-3 Storage Redirection サブコマンド](#)
- [表 B-4 Storage Redirection サブコマンドオプション](#)

表 B-1 Storage Redirection コマンド

コマンド名	説明
<code>java -jar StorageRedir.jar</code>	<code>java -jar</code> コマンドを使用すると、コマンドウィンドウまたは端末から Storage Redirection クライアント ( <code>StorageRedir.jar</code> ) を起動することができます。
<code>storageredir</code>	<code>storageredir</code> コマンドは、すべてのストレージリダイレクト操作を実行します。

表 B-2 Storage Redirection コマンドオプション

オプション名	説明
- h	- h コマンドオプションは、コマンド行のヘルプ情報を表示します。
- v	- v コマンドオプションは、Java コマンドのバージョン情報を表示します。

表 B-3 Storage Redirection サブコマンド

サブコマンド名	説明
list	<p>list サブコマンドは、1 つまたはすべてのリモート SP で現在アクティブなストレージリダイレクトのリストを提供します。</p> <p><b>構文の使用例:</b></p> <pre>storageredir list [-p storageredir_port] [remote_SP]</pre>
start	<p>start サブコマンドは、ローカルホストとリモートホストサーバーの間の指定されたリダイレクトを呼び出します。認証パスワードを入力しないと、システムがパスワードを要求します。</p> <p><b>構文の使用例:</b></p> <pre>storageredir start -r redir_type -t redir_type_path -u remote_username [-s remote_user_password] [-p storageredir_port] remote_SP</pre> <p><b>注</b> - リモートサーバーのストレージデバイスのリダイレクトを開始するには、有効な Admin または Console の役割のアカウントを ILOM で指定する必要があります。</p>
stop	<p>stop サブコマンドは、ローカルホストとリモートホストサーバーの間の指定されたリダイレクトを停止します。認証パスワードを入力しないと、システムがパスワードを要求します。</p> <p><b>構文の使用例:</b></p> <pre>storageredir stop -r redir_type -u remote_username [-s remote_user_password] [-p storageredir_port] remote_SP</pre> <p><b>注</b> - リモートサーバーのストレージデバイスのリダイレクトを停止するには、有効な Admin または Console の役割のアカウントを ILOM で指定する必要があります。</p>
test-service	<p>test-service サブコマンドは、Storage Redirection サービスの接続がローカルホストでアクティブになっているかどうかを確認します。</p> <p><b>構文の使用例:</b></p> <pre>storageredir test-service [-p storageredir_port]</pre>
stop-service	<p>stop-service サブコマンドは、リモートホストサーバーへの Storage Redirection サービスの接続を停止します。</p> <p><b>構文の使用例:</b></p> <pre>storageredir stop-service [-p storageredir_port]</pre>

表 B-4 Storage Redirection サブコマンドオプション

サブコマンドオプション名	説明
<code>-r <i>redir_type</i></code>	<p><code>-r <i>redir_type</i></code> は、リダイレクト対象のストレージメディアの種類を識別します。  <i>redir_type</i> の有効なデバイス値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• CD-ROM デバイス  構文: <code>-r cdrom</code></li> <li>• CD-ROM イメージ:  構文: <code>-r cdrom_img</code></li> <li>• フロッピーデバイス:  構文: <code>-r floppy</code></li> <li>• フロッピーイメージ:  構文: <code>-r floppy_img</code></li> </ul>
<code>-t <i>redir_type_path</i></code>	<p><code>-t <i>redir_type_path</i></code> は、ストレージリダイレクトメディアが保存またはマウントされている場所へのフルパスを識別します。</p> <p>例:  <code>-t /home/username/JRC_Test_Images/CDROM.iso</code></p>
<code>-u <i>remote_username</i></code>	<p><code>-u <i>remote_username</i></code> は、ILOM SP へのログインに必要なユーザー名を識別します。</p> <p>例:  <code>-u john_smith</code></p> <p>注 - ILOM で有効なユーザーアカウントはすべて、そのユーザーのローカルシステムで Storage Redirection サービスまたはクライアントをインストールしたり起動したりすることができます。ただし、リモートサーバー上のストレージデバイスのリダイレクトを開始または停止するには、有効な Admin または Console の役割が ILOM が必要です。</p>
<code>-s <i>remote_user_password</i></code>	<p><code>-s <i>remote_user_password</i></code> は、ILOM SP へのログインに必要なパスワードを識別します。</p> <p>このパスワードコマンドがコマンド行で指定されていない場合、システムは自動的にパスワードの入力を要求します。</p>
<code>-p <i>storageredir_port</i></code>	<p><code>-p <i>storageredir_port</i></code> は、ローカルホストでのストレージリダイレクト通信ポートを識別します。指定されているデフォルトポートは 2121 です。</p> <p>例:  <code>-p 2121</code></p>

## 付録 C

# IPv4 または IPv6 の ILOM 接続に関する問題の診断

IPv6 による ILOM との接続で問題が発生した場合は、表 C-1 を参照してください。IPv6 を使用した ILOM へのアクセス時の一般的な問題の解決に役立ちます。

表 C-1 IPv6 接続の一般的な問題と推奨解決方法

IPv6 接続の一般的な問題	推奨解決方法
IPv6 アドレスを使用して ILOM Web インタフェースにアクセスすることができません。	URL 内の IPv6 アドレスが角括弧で囲まれていることを確認します。例: <a href="https://[fe80::221:28ff:fe77:1402]">https:// [fe80::221:28ff:fe77:1402]</a>
IPv6 アドレスを使用してファイルをダウンロードすることができません。	URL 内の IPv6 アドレスが角括弧で囲まれていることを確認します。例: <code>load -source tftp://[fec0:a:8:b7:214:rfff:fe01:851d]desktop.pkg</code>
IPv6 を使用して、ネットワーククライアントから ILOM にアクセスすることができません。	分割サブネットの場合は、次の操作を実行します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• ILOM のアドレスがリンクローカルアドレスかどうかだけでなく、動的か静的かを確認します。</li><li>• ネットワーククライアントに設定されているアドレスがリンクローカルアドレスかどうかだけでなく、IPv6 アドレスかどうかを確認します。</li></ul> 同一サブネットまたは分割サブネットの場合は、次の操作を実行します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または ILOM CLI の <code>/SP/network/ipv6</code> のターゲットで、「IPv6 State」の設定が有効になっていることを確認します。</li><li>• 制限付きシェルで <code>ping6</code> を実行します。</li><li>• 制限付きシェルで <code>traceroute</code> を実行します。</li></ul>

表 C-1 IPv6 接続の一般的な問題と推奨解決方法 (続き)

IPv6 接続の一般的な問題	推奨解決方法
IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境内のクライアントから ILOM にアクセスすることができません。	<p>次の設定が有効になっていることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>State</b> – ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または CLI の /SP/network のターゲットで、「State」の設定を有効にすることができます。</li> <li>• <b>IPv6 State</b> – ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または /SP/network/ipv6 のターゲットで、「IPv6 State」の設定を有効にすることができます。</li> </ul>
IPv4 を使用して、ネットワーククライアントから ILOM にアクセスすることができません。	ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または ILOM CLI の /SP/network のターゲットで、「State」の設定が有効になっていることを確認します。

## 付録 D

# ローカル相互接続インタフェースの ホスト OS 手動設定ガイドライン

---

ILOM SP 接続ポイントのルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェースで手動設定するように選択した場合は、ホスト OS 接続ポイントのルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスもローカル相互接続インタフェースで手動設定する必要があります。この付録では、オペレーティングシステムごとに、ホスト OS 接続ポイントのルーティングの宛先とならない静的 IPv4 アドレスを設定する場合の一般的なガイドラインについて説明します。ホストオペレーティングシステムで IP アドレスを設定する方法の詳細については、ベンダーのオペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

---

**注** – ILOM には、ホストオペレーティングシステムへの USB Ethernet インタフェースとしてサーバーにインストールされた内部 USB Ethernet デバイスが表示されます。

---

表 D-1 ホスト OS に内部 USB Ethernet デバイスを設定する場合の一般的なガイドライン

オペレーティングシステム	一般的なガイドライン
Windows Server 2008	<p>Windows で内部 USB Ethernet デバイスが検出されると、ほとんどの場合、そのデバイスのデバイスドライバを指定するためのプロンプトが表示されます。実際にはドライバは不要なため、.inf ファイルを指定することで、内部 USB Ethernet デバイスの通信スタックの要件を満たす必要があります。.inf ファイルは、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 のソフトウェアディストリビューションから入手できます。この管理バックソフトウェアは、Oracle のソフトウェア製品ダウンロードページ (<a href="http://www.oracle.com">www.oracle.com</a>) からダウンロードできます。また、.inf ファイルは、管理バックソフトウェアから抽出することができます。.inf ファイルを管理バックソフトウェアから抽出する方法の詳細については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』(821-2181) を参照してください。</p> <p>Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 のソフトウェアディストリビューションから .inf ファイルを適用すると、「コントロールパネル」(「スタート」-&gt;「コントロールパネル」)にある Microsoft Windows のネットワーク設定オプションを使用することにより、ホスト OS 接続ポイントの静的 IP アドレスをローカル相互接続インタフェースで設定できるようになります。</p> <p>Windows 2008 で IPv4 アドレスを設定する方法の詳細については、Microsoft Windows オペレーティングシステムのドキュメントまたは Microsoft TechNet サイト (<a href="http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754203%28WS.10%29.aspx">http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754203%28WS.10%29.aspx</a>) を参照してください。</p>
Linux	<p>Oracle Sun サーバーでサポートされているほとんどの Linux オペレーティングシステムのインストールには、内部 Ethernet デバイス用のデバイスドライバのインストールが含まれています。</p> <p>通常、内部 USB Ethernet デバイスは、Linux オペレーティングシステムによって自動的に検出されます。内部 Ethernet デバイスは、通常 usb0 と表示されます。ただし、内部 Ethernet デバイスの名前は、Linux オペレーティングシステムのディストリビューションに応じて異なる場合があります。</p> <p>次の手順で、usb0 (通常、サーバーで検出された内部 USB Ethernet デバイス) に対応する静的 IP アドレスを設定する方法について説明します。</p> <pre data-bbox="351 1072 958 1263"> \&gt;lsusb usb0   \&gt; ifconfig usb0 169.254.182.77   \&gt; ifconfig usb0 netmask 255.255.255.0   \&gt; ifconfig usb0 broadcast 169.254.182.255   \&gt; ifconfig usb0   \&gt; ip addr show usb0 </pre> <p>注 - 一般的な ifconfig の手順を実行する代わりに、インタフェースの設定をスクリプト処理することもできます。ただし、厳密には、Linux ディストリビューション間でネットワークスクリプトは異なります。通常、Linux の動作バージョンには、ネットワークスクリプトをモデル化するための例が含まれています。</p> <p>Linux オペレーティングシステムを使用してデバイスの IP アドレスを設定する方法の詳細については、Linux オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。</p>



表 D-1 ホスト OS に内部 USB Ethernet デバイスを設定する場合の一般的なガイドライン (続き)

---

オペレーティングシステム 一般的なガイドライン

---

Solaris

Oracle Sun プラットフォームのサーバーでは、ほとんどの Solaris オペレーティングシステムインストールに、内部 USB Ethernet デバイス用のデバイスドライバのインストールが含まれています。このドライバがサポートされていなかった場合、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアからこのドライバを抽出することができます。Ethernet インタフェース用の Solaris 固有の OS ドライバを抽出する方法については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』(821-2181) を参照してください。

通常、内部 USB Ethernet デバイスは、Solaris オペレーティングシステムによって自動的に検出されます。内部 Ethernet デバイスは、通常 `usbecm0` と表示されます。ただし、内部 Ethernet デバイスの名前は、Solaris オペレーティングシステムのディストリビューションに応じて異なる場合があります。

Solaris オペレーティングシステムでローカルの USB Ethernet デバイスが認識されたあと、USB Ethernet デバイスの IP インタフェースを設定する必要があります。

次の手順で、`usbecm0` (通常、サーバーで検出された内部 USB Ethernet デバイス) に対応する静的 IP アドレスを設定する方法について説明します。

- 次のコマンドを入力して、IP インタフェースを `plumb` または `unplumb` します。

```
ifconfig usbecm0 plumb
```

```
ifconfig usbecm0 unplumb
```

- 次のコマンドを入力して、アドレス情報を設定します。

```
ifconfig usbecm0 netmask 255.255.255.0 broadcast 169.254.182.255  
169.254.182.77
```

- インタフェースを設定するには、次のように入力します。

```
ifconfig usbecm0 up
```

- インタフェースを停止するには、次のように入力します。

```
ifconfig usbecm0 down
```

- アクティブなインタフェースを表示するには、次のように入力します。

```
ifconfig -a
```

- 接続をテストするには、Solaris ホストまたは SP の内部 USB Ethernet デバイスに対して `ping` を実行します。

```
ping <Solaris ホストの IPv4 アドレス>
```

```
ping <SP-Ethernet USB の IPv4 アドレス>
```

**注** – 一般的な `ifconfig` の手順を実行する代わりに、インタフェースの設定をスクリプト処理することもできます。ただし、厳密には、Solaris ディストリビューション間でネットワークスクリプトが異なる場合があります。通常、動作バージョンに、ネットワークスクリプトをモデル化するための例が含まれています。

Solaris オペレーティングシステムを使用してデバイスの静的 IP アドレスを設定する方法の詳細については、Solaris オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

---

---

**注** – 内部 USB Ethernet デバイスのドライバがオペレーティングシステムのインストールに含まれていなかった場合、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアから Ethernet デバイス用のデバイスドライバを入手することができます。このファイルを管理パックから抽出する方法の詳細については、『Oracle Server Hardware Management Pack ユーザーズガイド』(821-2181) を参照してください。

---



# 索引

---

## A

### Active Directory

- certstatus, 65
- strictcertmode, 64
- 証明書の削除, 67
- 設定の表示と構成, 67
- トラブルシューティング, 75

## C

### CLI コマンド構文

- help コマンド, 218
- load コマンド, 219
- reset コマンド, 221
- show コマンド, 229
- start コマンド, 238
- stop コマンド, 238
- version コマンド, 239

### CLI コマンド

- 組み合わせて実行, 10
- 個別に実行, 9
- リファレンス, 215

### CLI コマンド構文

- cd コマンド, 215
- create コマンド, 216
- delete コマンド, 217
- dump コマンド, 218
- exit コマンド, 218
- set コマンド, 221

### CLI コマンドの種類

- SNMP コマンド, 13

- 一般的なコマンド, 10
- クロック設定コマンド, 13
- 警告管理コマンド, 12
- システム管理アクセスコマンド, 12
- ネットワークとシリアルポートのコマンド, 11
- ホストシステムのコマンド, 14
- ユーザーコマンド, 11

### CLI のターゲットの種類

- /CH, 5
- /CMM, 5
- /HOST, 5
- /SP, 5
- /SYS, 5

## D

- default ユーザーアカウント
- パスワードの回復に使用, 25

### Distributed Management Task Force Command-Line Protocol (DMTF CLP), 2

- DSA 鍵
- 表示, 47

## H

- HTTP または HTTPS の設定
- 使用可能への切り替え, 42
- ターゲット、プロパティ、および値, 43

## I

### ILOM 2.x

- 2.x スクリプトの更新, 15
- ILOM 3.0 と比較したプロパティ, 15

ILOM 設定, 149

バックアップ, 149

復元, 152

リセット, 156

ILOM 設定のバックアップ

手順, 150

必要な時間, 151

必要な役割, 150

要件, 150

ILOM のバージョン情報

表示, 159

ILOM のリセット, 163

IP アドレスの割り当て

CLI を使用した編集, 32

## J

Java Runtime Environment

ダウンロード, 167

Jnlppgenerator, 168

## L

LDAP, 76

概要, 76

設定, 77

LDAP/SSL, 78

certstatus, 79

strictcertmode, 78

証明書の削除, 80

設定の表示と構成, 80

トラブルシューティング, 86

LDAP サーバー

設定, 76

## P

passphrase

ILOM 設定のバックアップに使用, 150

ILOM 設定の復元に使用, 152

password

失ったパスワードの回復, 25

変更, 58

PC-Check 診断テスト

PC-Check 診断テスト, 206

## R

RADIUS

設定, 87

設定の必要条件, 87

RSA 鍵

表示, 46

## S

Secure Shell (SSH)

新しい鍵の生成, 47

現在の鍵の表示, 46

設定, 45

有効化または無効化, 46

リモート接続の確立, 45

SMTP クライアント

設定, 121

SNMP トラップ警告, 116

SPARC サーバー

TPM と LDom の状態の管理, 197

SPARC システムの診断, 209

SPARC 診断

POST のトリガー, 210

出力の詳細度, 211

モード, 209

レベル, 210

SP のリセット, 163

SSH 鍵, 62

削除, 63

追加, 63

SSH 接続, 45

CLI を使用した鍵暗号化, 46

新しい鍵, 47

再起動, 48

有効化および無効化, 46

ssh コマンド (Solaris)

SP への接続, 45

Storage Redirection CLI

アクティブなリダイレクトの表示, 179

起動, 176

クライアントのインストール, 172

サインイン認証, 167

サポートされているコマンドおよびオプション, 242

初回セットアップ, 166  
デフォルトの通信ポート, 167  
モード, 241  
strictcertmode, 64

## U

user accounts  
password, 58  
個別のセッションの表示, 61  
個別のユーザーアカウントの表示, 60  
削除, 59  
設定, 21, 57  
追加, 58  
役割, 59  
ユーザーセッションのリストの表示, 61

## X

x64 システムの診断, 206

## い

イベントログ  
出力のフィルタリング, 100  
内容, 102  
表示およびクリア, 100

## か

回復、失ったパスワード, 25

## く

クロック設定, 99

## け

警告  
警告管理用の CLI コマンド, 119  
電子メール通知  
SMTP クライアントの設定, 121  
電子メール通知の生成, 122  
警告テスト  
生成, 118  
警告ルール  
CLI コマンド, 119  
使用不可への切り替え, 118  
設定, 117

## こ

コマンド行インタフェース (CLI)  
概要, 2  
コマンド構文, 9  
コマンドの出力オプションのフィルタリング, 14  
ターゲットツリー, 8  
コマンドのプロパティ  
ILOM 2.x, 15  
ILOM 3.0, 15  
コマンド文字列, 10  
コンポーネント  
監視, 95, 109  
管理, 92  
サービスへの復帰, 94  
取り外し, 93  
有効化および無効化, 94  
コンポーネント情報, 92

## さ

サーバーのある場所にいる  
証明, 25  
サービススナップショットユーティリティー, 213  
サービスプロセッサ  
リセット, 163  
サインイン認証  
Storage Redirection CLI に必要, 167

## し

システムインジケータ  
表示, 98  
システム警告  
SMTP クライアントの設定, 121  
管理用コマンド, 119  
削除, 118  
生成, 118  
設定, 117  
設定の必要条件, 116  
システムコンポーネント  
表示および管理, 92  
システムの問題  
診断, 212  
消費電力  
監視, 125, 128  
許容電力の監視, 132

- 個々の電源の監視, 130
- システムの合計電力の監視, 129
- 使用可能な電力の監視, 131
- 実際の電力の監視, 130
- 消費電力管理
  - 電力の監視
    - show コマンド, 132
- 証明書の状態, 65
- 証明書の認証, 64
- シリアルポート出力
  - ILOM CLI を使用した切り替え, 44
- シリアルポート設定
  - pending および active プロパティ, 41
  - ターゲット、プロパティ、および値, 42
  - 表示および構成, 41
- シングルサインオン, 57
- 診断, 205

## す

- ストレージメディアのリダイレクト
  - 必要なタスク, 175
  - 要件, 175

## せ

- センサー測定値, 97

## た

- ターゲットツリー, 8

## つ

- 通信設定
  - 設定, 27
  - 設定の必要条件, 29

## て

- デフォルト設定
  - リセットオプション, 156
- 電源状態コマンド, 188
- 電源投入時の自己診断テスト
  - 診断トリガー, 210
- 電源ポリシー
  - 設定, 136

## と

- トラブルシューティング, 213
- ドキュメント, xvii
- ドメインネームサービス (DNS)
  - ターゲット、プロパティ、および値, 40
  - ロケータサービス, 72

## ね

- ネームスペース
  - SP によるアクセス, 6
- ネットワーク設定, 28
  - DNS, 40
  - IP アドレスの編集, 32
  - pending および active プロパティ, 29
  - システム識別子, 39
  - シリアルポート, 41
  - ターゲット、プロパティ、および値, 31
  - 表示および構成, 30
  - ホスト名, 39
- ネットワークポート 2121
  - ストレージリダイレクトのデフォルトポート, 181

## は

- バックアップ XML ファイル
  - コンテンツの例, 153
  - 編集、パスワード, 155
  - 編集、役割, 155
  - 編集、ユーザーアカウントの追加, 155
  - 編集の要件, 153
  - 編集例, 154
- バックアップ操作
  - CLI コマンド, 150

## ふ

- ファームウェア
  - イメージの更新, 160
  - 更新セッションのトラブルシューティング, 162
  - 更新時の回復, 162
  - 更新の必要条件, 159

## 復元

- ILOM 設定の復元, 149

## 復元操作

- CLI コマンド, 152

- 機密データの要件, 150
- セッションの一時的な停止, 152
- パスフレーズの要件, 152
- 必要な時間, 152
- 必要なユーザーの役割, 151

プロパティ

- ILOM 3.0 と ILOM 2.x の比較, 15

## ま

- マスク不可能割り込み (NMI), 208

## り

- リモート電源制御
  - CLI コマンド, 188
- リモートの syslog 受信, 103

## リモートホスト

- Storage Redirection CLI, 174

- 管理, 165

- ストレージデバイスのリダイレクト, 174

- ストレージデバイスのリダイレクトの開始, 178

- ストレージデバイスのリダイレクトの停止, 180

- ストレージリダイレクト, 166

- デフォルトネットワークポートの変更, 181

- 電源状態コマンド, 188

- 電源状態の管理, 187

## ろ

- ログアウト, 24

- ログイン

- 初回, 20

- 要件, 18

